写真記録

東南アジア

歴史・戦争・日本

4 ビルマ タイ

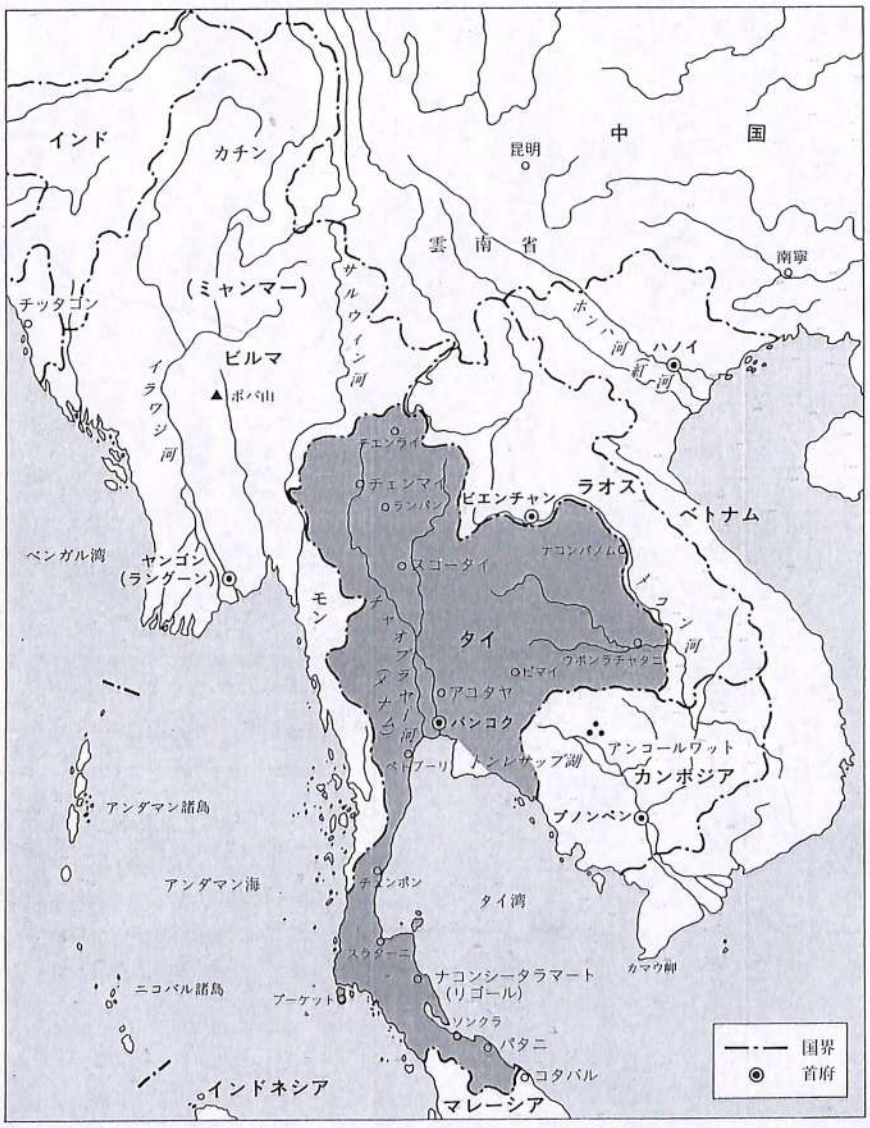
根本 敬
村嶋英治

ほるぷ出版

タイ

the Kingdom of Thailand

村嶋英治



51万3115km²の国土と95年半ばに6000万人に達した人口を有する東南アジアの大国。東京から首都バンコクまでの空路の距離は2868マイル（約4615km），飛行機でわずか5～6時間の距離である。近代史において西洋植民地主義から独立を守った数少ないアジアの独立国。国王制や上座部仏教など独自の伝統と文化を維持しながら，国際的環境変化に柔軟に対応し，民主化と高度経済成長をつづけている。

タイの歴史

タイ族国家の興亡

タイの歴史教科書で教えられるタイ国史は，チャオプラヤー河中流域のスコータイに13世紀半ばに建国されたタイ族の国家に始まる。さらに下流のアユッタヤーを王都として14世紀半ばに別のタイ族国家が生まれた。アユッタヤー王都は，1767年にビルマ軍に滅ぼされるまで400 年間にわたって繁栄した。ビルマ軍支配への反抗の中心になった華僑の血を引く武将タークシンは，1768年末にトンブリーにて王に即位した。彼はビルマ軍を逐っただけでなく東南アジア大陸部を広範囲に征服し，版図を拡大した。しかし，1782年に有力武将であるチャクリーに王位を奪われた。チャクリー（ラッタナコーシン）朝は，チャオプラヤー河の下流東岸のバンコクの地を都として今日までつづいている。

イギリス・フランスの侵出

チャクリー朝４代目のモンクット王（在位1851～68年）の時代の1855年，タイはイギリスとの間に通商航海条約を締結し，自由貿易を認めた。この条約でタイは一方的に領事裁判権を許し，関税自主権を失った。以後，欧米列強は同種の不平等条約をタイに押しつけた。

５世王，チュラーロンコーン王（在位1868～1910年）時代に入ると，ベトナムを植民地化したフランスは東から，ビルマを征服したイギリスは西からタイ領土を蚕食し，タイ領土は半減した。今日のタイの国境は1867年から1909年までの間にイギリス，フランスとの間の数次の条約で定まったものである。これらの条約で英仏両帝国主義がタイから奪った領土は，今日のラオスとカンボジアとの全域，マレーシア，ビルマ（ミャンマー），ベトナムの一部を成している。

とりわけフランスは，タイに軍事的圧力を加えて強引に領土を要求した。1893年７月，バンコクにまで仏砲艦を乗り入れてのラオス割譲要求は，砲艦外交の典型であった。フランスの砲火を前に屈したタイは，独立の危機に直面した。独立維持のため近代的中央集権国家の建設が急務となった。行政機構の整備，国防のために近代的軍隊の建設，人材育成のための学校教育，さらには民族意識の教化などが課題となった。いわゆるタイの絶対王制が成立したのは，このチュラーロンコーン王時代である。

民主主義・民族主義の広がり

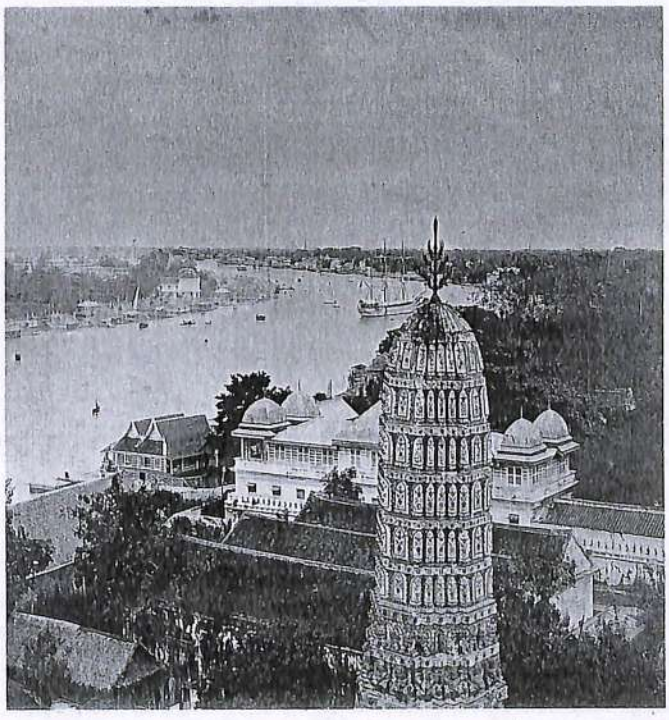
しかし，西洋化には西洋の民主主義思想の流入が伴うことは避け得なかった。タイ人エリートは，留学先のヨーロッパで，西洋の強国は自由平等な個人が基礎となっていることを実感した。またタイが国防のために採用した国民皆兵などの西洋の諸制度は，フランス革命以来の民族主義，民主主義の原理と不可分であった。教育あるタイ人のなかに，民族意識と権利意識が広がった。ワチラーウット王（在位1910～25年）は，自らタイ人に民族意識を鼓吹したが，人民の政治的権利要求には耳をかさなかった。同王の弟プラチャーティポック王（在位1925～35年）は，人民による下からの革命を危惧して民主的制度改革を検討したが，結局1932年の立憲革命まで何らの具体化もしなかった。

立憲君主制へ

1930年に入ると，世界恐慌のタイへの波及で人民の所得も国家財政も窮迫した。万策尽きた国王は，人民の生活を顧みる余裕もなく，大規模なリストラと増税を実施した。チャクリー王朝創始から150 年後の1932年，欧州に留学した文武のエリート官僚を中心とした人民党がクーデターに決起して立憲君主制へと転換した。人民党は人民を顧みない王族支配は，民族の利益に反するのみならず，民族の発展を阻害していると考えていた。

しかし，主権在民の憲法を制定した人民党の政治も西洋型民主主義からはほど遠かった。人民党は憲法上に特権的な地位を得て権力を独占し，一方，批判勢力は武力による政権打倒を試みた。これ以降，政権維持には軍部の支持が不可欠となったのである。タイは1990年代始めまで，民主化と軍事クーデターを繰り返すこととなった。

チャクリー（バンコク）王朝創始	1782年4月6日
イギリスとの間に友好通商条約、不平等条約の始まり	1855年4月18日
在英仏の王弟・官吏ら11名、国王に立憲制への変革を求める上奏提出	1885年1月8日
修好通商に関する日本国・シャム国間の宣言	1887年9月26日
中央集権化のために内務省などを創設	1892年4月1日
ラオスの割譲要求するフランスは砲艦をバンコクに侵入させ圧力を加える	1893年7月13日
日本シャム修好通商航海条約締結	1898年2月25日
フランスに西部カンボジア割譲	1907年3月23日
イギリスにマレイ4州を割譲	1909年3月10日
チュラーロンコーン王死亡し、ワチラーウット王王位継承	1910年10月23日
陸軍青年将校のクーデター計画発覚	1912年3月1日
ワチラーウット王「東洋のユダヤ人」を新聞連載	1914年7月2日
ドイツおよびオーストリア、ハンガリーに宣戦布告、フランスに義勇軍を送る	1917年7月22日
米国との間に改正条約調印、関税自主権回復	1920年12月16日
義務教育法地域を限定して施行	1921年10月1日
日暹通商航海条約調印（12月29日発効）	1924年3月10日
ワチラーウット王死亡、プラチャーティポック王継承	1925年11月26日
パリでプリーディー、ピブーンら人民党結成	1927年2月
ラジオ放送開始	1931年2月25日
プラチャーティポック王がアメリカで地方自治を認めるという記者会見	1931年4月27日
世界大恐慌による財源不足のため官吏を多数解雇、給与税を新設	1932年4月1日
人民党クーデター成功（27日に臨時憲法公布）	1932年6月24日
恒久憲法公布	1932年12月10日
国際連盟臨時総会は満州問題勧告案を採択、タイは棄権	1933年2月24日
マノー首相らは憲法を無視して国会を停止	1933年4月1日
人民党のピブーン、パホンら再度クーデター	1933年6月20日
民主化を要求するボーウォラデート親王の乱	1933年10月11～25日
プラチャーティポック王はロンドンから民主化を要求して退位、9歳のアーナンタマヒドン王が継承	1935年3月2日
各国と平等条約締結、治外法権は完全に終了	1937年11～12月
ピブーン、首相に就任	1938年12月16日
国名をシャムからタイ国に変更	1939年6月24日
第二次世界大戦に関して中立宣言	1939年9月5日
英仏との間に不可侵条約、日本との間に友好関係の存続および相互の領土尊重に関する条約に調印	1940年6月12日
フランス軍機タイ領を爆撃してタイ仏印紛争本格化	1940年11月28日
日本は仏印、泰に対し軍事政治経済にわたり緊密不離の結合を設定するという主旨の『対仏印、泰施策要綱』を決定	1941年1月30日
日本の調停によりタイ仏間平和条約。タイは失地の一部を回復	1941年5月9日
戦時におけるタイ人の義務を定める法律施行。敵にあらゆる方法で抗戦妨害する義務を定め、違反者は死刑もしくは終身刑	1941年9月11日
タイ民族は侵略者に屈従せず、自由独立のために最後の一人まで戦うと政府声明	1941年9月11日
日本国軍隊のタイ国領域通過に関する日本国タイ国間協定	1941年12月8日
日本国タイ国間同盟条約および付属秘密了解事項調印	1941年12月21日
日タイ同盟条約を根拠として日タイ軍の間に日泰協同作戦に関する協定締結	1942年1月3日
タイ外征軍はビルマのシャン州に進攻	1942年5月
日本国タイ国間文化協定調印	1942年10月28日
タイとの間にバーンボーン事件発生	1942年12月18日
東条首相訪タイしてマライ4州とシャン2州のタイ帰属を約束	1943年7月4日
ピブーン首相は重慶軍との連絡を試みる	1944年1月末
自由タイの落下傘諜者第一陣タイ国内に降下	1944年3月15日
日本軍誤解によってラノーン市の軍警察を武装解除	1944年7月30日
ピブーン首相辞任、クアン内閣発足	1944年8月1日
プリーディー摂政平和宣言	1945年8月16日
イギリスとの間の戦争状態終結の協定に調印	1946年1月1日
アーナンタマヒドン王怪死、プーミポン王が継承	1946年6月9日
陸軍クーデター、ピブーンは国軍司令官に復帰	1947年11月8日
マニラで8か国が参加、東南アジア集団防衛条約締結	1954年9月8日
ピブーン首相の「汚い選挙」	1957年2月26日
サリット元帥の革命	1958年10月20日
タノーム元帥の革命	1971年11月17日
学生革命が軍事政権追放	1973年10月14日
「10月6日」事件で軍が復権	1976年10月6日
プレーム内閣発足	1980年3月3日
軍のクーデターがチャートチャーイ文民政権を打倒	1991年2月23日、
軍の政治関与に反対する野党、市民を軍が武力弾圧、国王調停で解決	1992年5月20日



暁の寺（ワット・アルン）から見たバンコクの眺望　19世紀末、日本人写真師・磯長海洲がヤグラを組んで撮影した。

第１章
多種族多文化社会とタイ民族意識の形成

さまざまな種族・さまざまな信仰

今日タイ国籍をもち，タイ語を使用し，タイ国の領域に住んでいる人々，すなわちタイ人は血統から見れば実に多様な種族的起源をもっている。現代タイ人の最大多数派は，もちろんタイ族であるが，他に全人口の20パーセント近い華人，5パーセント前後のマレー系，さらにモン，クメール，ベトナム，チャム，カレン，ビルマ，インド系住民なども住んでいる。この他にも北の山地にはさまざまな少数民族が生活している。

宗教もタイ族，モン，クメールなどに上座部仏教，マレーやチャム人にイスラーム教，華人に道教，ベトナム人にキリスト教，インド人にヒンドゥー教などが信仰されている。ムスリムの多いマレー半島部には，多数のマスジット（イスラム寺院）があるが，バンコク市内にも159 のマスジット（タイ全国のマスジット数は1992年で2799か所）が存在している。タイ国は近隣の東南アジア諸国と同様に，多種族多文化国家なのである。

しかし，種族としてのタイ族が居住する地域は，現在のタイ国の領域より狭いと理解すると，とんでもない間違いである。タイ族はタイ国境を遥かに超えて，ラオス，ベトナム北部，中国の雲南省や広西省，ミャンマーのシャン州，インドのアッサム地方にまで広く分布している。タイ族はアジア大陸南部の一大種族と言うことができるのである。今日のタイの国境は1867年から1909年までの間に，フランス，イギリスがタイ族の居住分布などにはお構いなく，押しつけた数次の条約で定まったものである。これらの条約で英仏両帝国主義がタイから奪った領土は，今日のラオスとカンボジアとの全域，マレーシア，ミャンマー，ベトナムの一部を成している。第二次世界大戦の勃発で英仏植民地勢力が弱体化した1940年末に，タイはタイ仏印紛争を起こし，日本の調停によりフランスに対する失地の一部を回復したが，第二次大戦後再びフランスに返還した。

一つの言語と民族意識―独立を維持するために―

今日のタイ国内の多種族性に話を戻そう。言語については，1921年からタイ政府がタイ語義務教育を開始し逐次全国に拡大したので，今日では全人口が共通語としてのタイ語を理解できるようになっている。同時に，政府は学校教育を通じて国民に同一タイ民族に属しているというアイデンティティも植えつけたので，今日では血統上の差異はあっても，同じタイ民族の一員であるという意識を殆どの国民がもっている。

統一した民族意識を育成することは，タイ国の独立維持のためには必要条件であった。タイの独立は20世紀初頭までは英仏の植民地主義に，30年代末から40年代半ばにおいては武力南進する日本に，40年代末から80年代初めまでは中国やベトナムの支援を得た共産主義者によって脅かされた。20世紀のタイ史においては，どの時期にあっても常に人民に民族意識を確認させる必要があったのである。そのため国内各地に民族の独立維持に貢献した英雄像が設置されている。彼らはちょうど日本人が神社に祭られ神となったかつての英雄たちを拝んでいるのと同様に，人民の信仰を集めている。

しかし多様な種族に一つの民族意識を持たせることは決して容易に実現できることではなかった。今日の状況は，中央政府が長年にわたり，種族の言語による教育や出版を弾圧し，禁止した賜物である。このような弾圧の対象となったのは，主に高い文化をもつ華僑やマレー人であった。

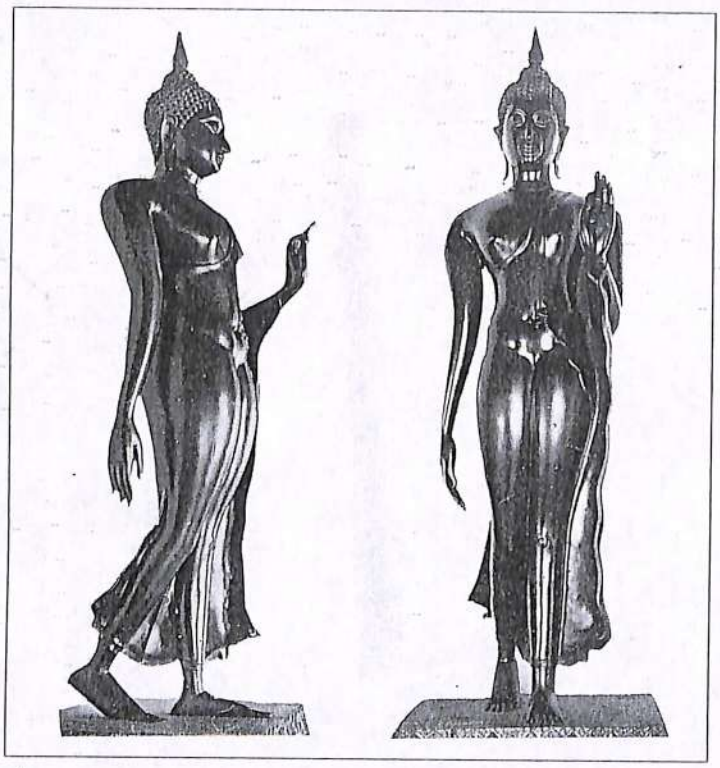
1．多様な種族と文化・宗教

タイ国の地は，かつてはモン人，クメール人の世界であった。それを示す多数の遺跡や遺物が全国各地に残っている。北から移動してきたタイ族は，モン，クメールの文化を摂取した。タイ族は純粋な上座部仏教徒とは言えない。例えば王室儀式の宗教は仏教とヒンドゥー教の両方から成り，ヒンドゥー教の儀式についてはバンコク都庁脇にあるテーワサターンの司祭が執り行なう。また，タイ人は日本の民間信仰と同様にさまざまな霊力を信じ，その信仰は仏教以上の場合もある。

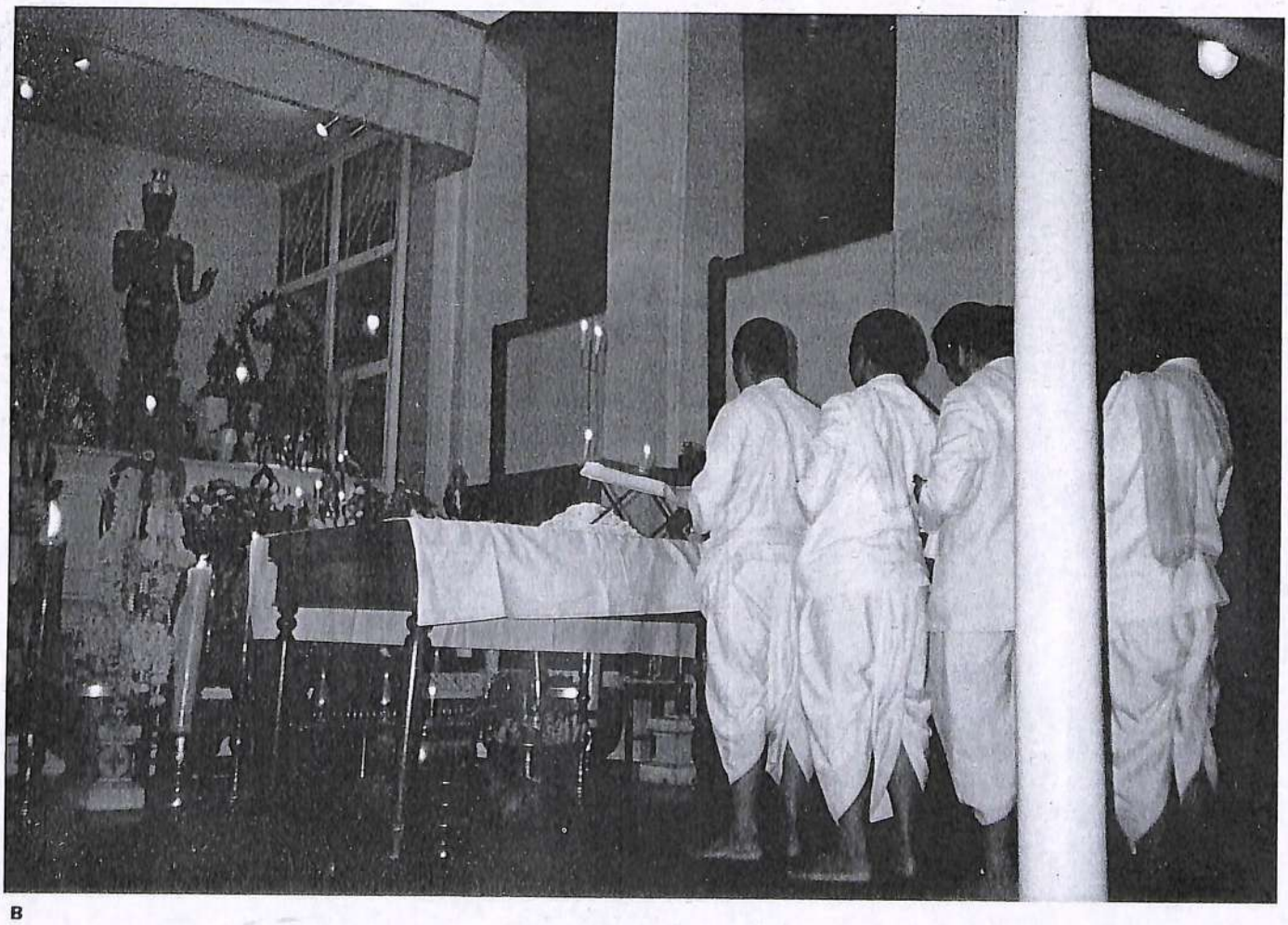
A

B

A　モン人のタワーラワディー時代（7～11世紀）の仏像　ナコンパトム県。
B　ヒンドゥー文化の12世紀のパノマルン遺跡　ブリラム県。

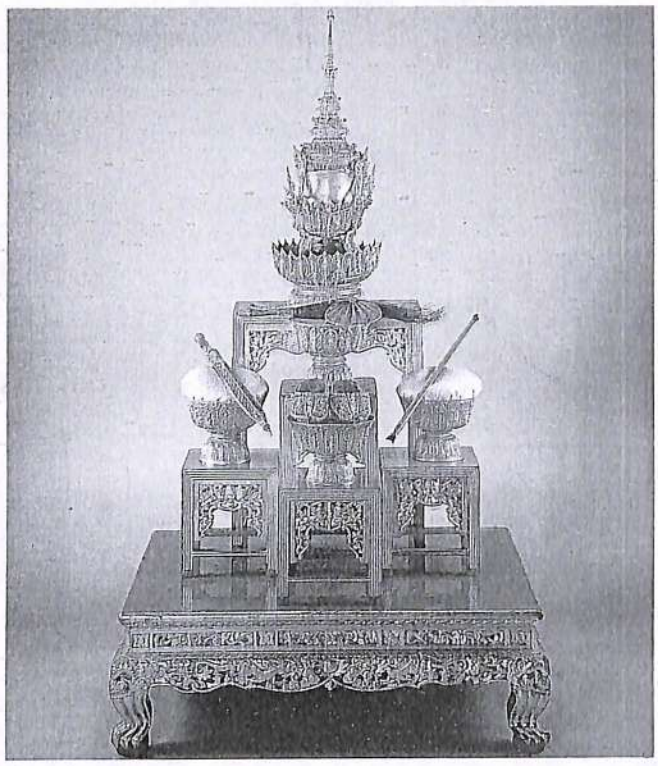


A



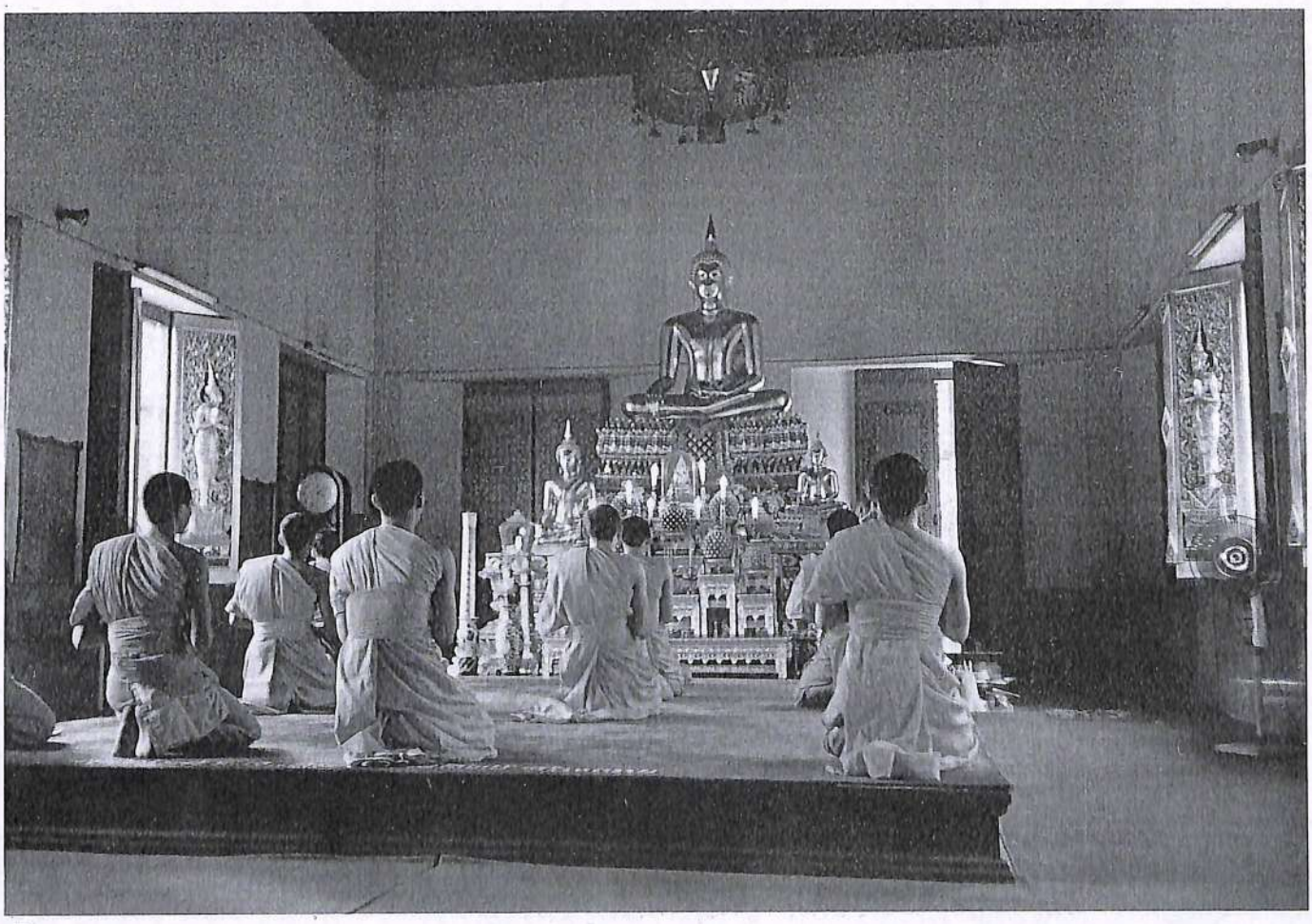
B

A　スコータイ様式の仏像
B　王室の諸行事を司るバンコクのテーワサターン



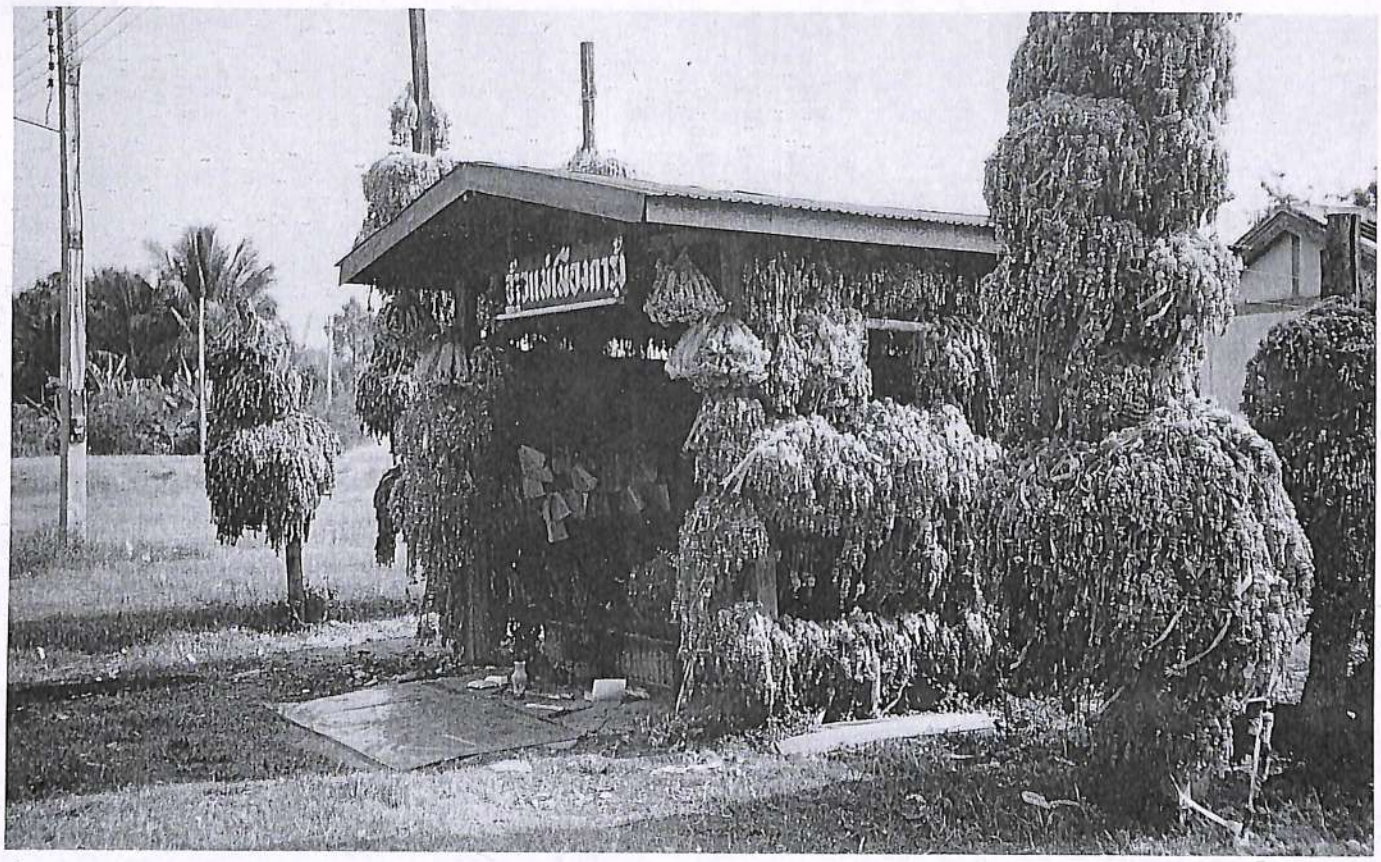
C

D



E

C　国王の５種の神器
D　タイ国の守護神，プラサヤームテワティラート
E　上座部仏教寺院の朝の読経　（ＢＥ撮影／村嶋英治）



A

B

A　民間信仰の祠

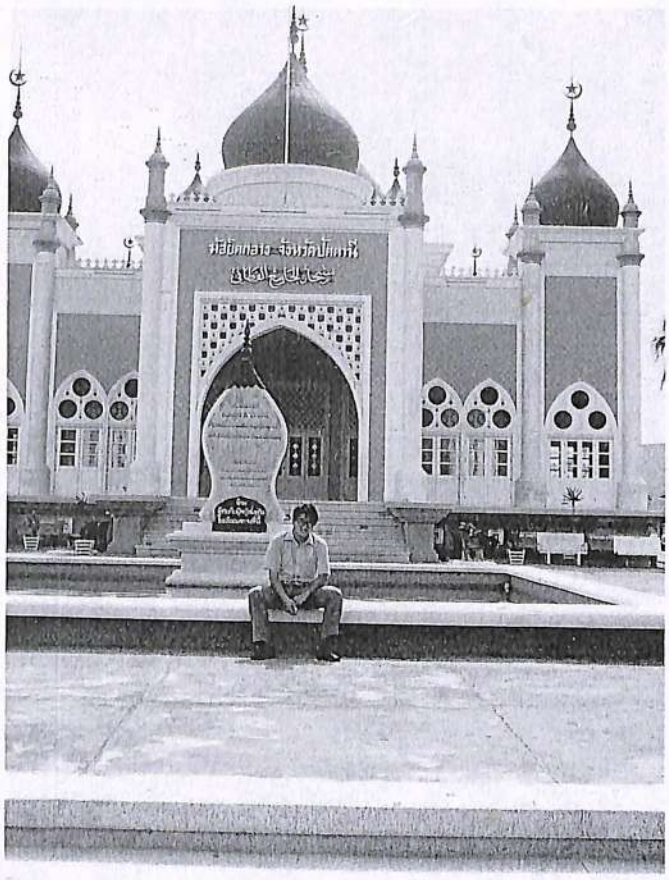
B　北タイプレー県のシャン人の仏教寺院

C

D

C　バンコクの華僑街ヤワラート通り
D　中部タイの地方都市の華僑の廟　全国のほとんどの町に華僑の廟がある。（A～D撮影／村嶋英治）

A



B

C

D

A　バンコクのマスジット（イスラム寺院）

B　南タイ，パッターニーのマスジット（イスラム寺院）

C　バンコク市内のチャム人のモスク　チャム人はタイの近代軍政ができるまで，軍人として重要な役割をになっていた。このモスクの墓は，戦死した多くの兵士が埋葬されている。

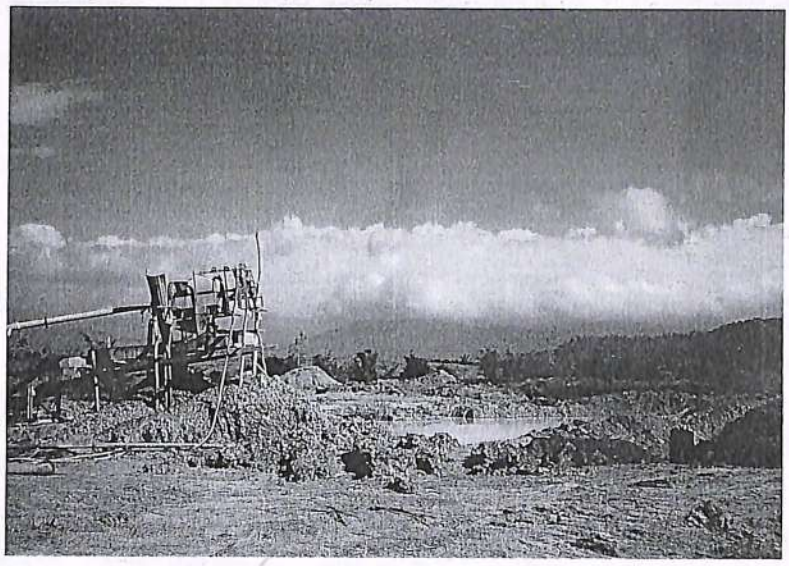
D　**犠牲の羊を解体**　生後７日以内に神に捧げて祝う。バンコクで。

（A～D撮影／村嶋英治）

2．大陸国家の国境

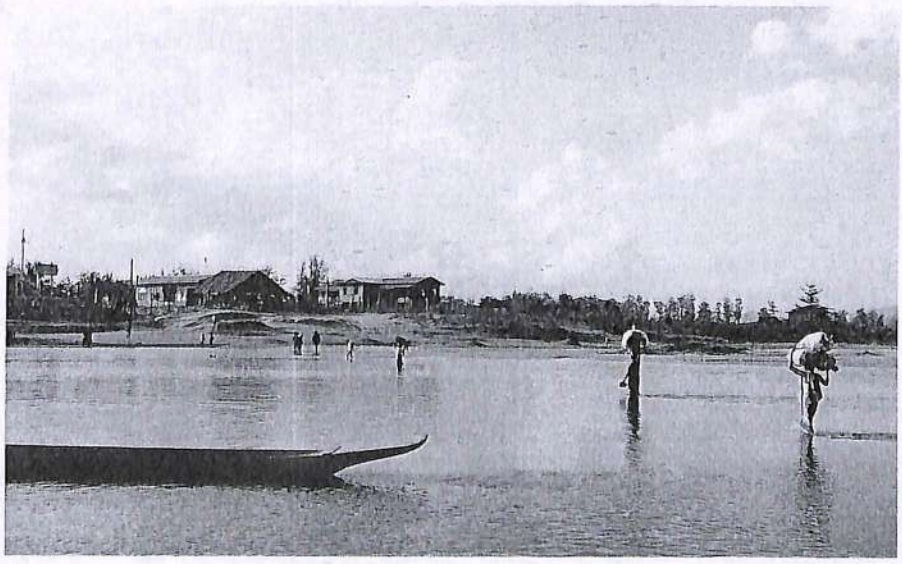
大陸国家であるタイの国境は，隣国と地つづきである。タイの国境地帯では国境にまたがって同一種族が居住していることが多い。タイ・ラオス国境の大部分はメコン河によっているが，そうでない部分ではほんの数メートルの小川が国境のこともあり，国境をはさんでも双方の住民は比較的自由に往来している。またビルマ（ミャンマー）国境やカンボジア国境では，タイ側から工業製品が運び込まれ，相手側からは牛，木材，宝石などが運び出されている。これらは統計上把握が困難な国境貿易である。

タイ・ラオス国境　ルーイ県ナーヘーウ郡（本項の写真／村嶋英治）



A

B



C

A　タイ・カンボジア国境の宝石（ルビー）掘り

B　東北タイのタイ・カンボジア国境　大断層を国境とする。低地側がカンボジア。

C　タイ・ビルマ国境　ターク県メーソット。

3．民族独立の誇り

タイを旅行すると，各地で有名無名の英雄たちの廟に出くわす。彼らは神として民衆の信仰を集めている。なかでも16世紀末と1767年の２度にわたり，ビルマ軍が王都アユッタヤーに進攻した際に，ビルマ軍を退け独立を回復したプラ・ナレースアン王とタークシン王の廟の数は他に抜きんでている。民族の独立を尊ぶタイ人の気持をよくあらわしている。また見方を変えると，タイの近現代史は英仏の植民地主義勢力，武力南進する日本，中国・ベトナムの共産主義勢力からの脅威に間断なくさらされ，独立維持の重要性が常にタイ人の念頭を去らなかったことを示している。

信仰されるプラ・ナレースワン王　中北部ペッチャブーン県ウィチャンプリー郡。1582年にこの地で敵と戦った。（撮影／村嶋英治）

A

B

A　信仰されるタークシン王　バンコクトンブリーの旧トンブリー朝王宮内の廟。

B　愛国記念碑　ビルマ軍の侵入によりアユッタヤーの都が1767年に陥落した時，バーンラチャン村民が自発的にビルマ軍に抵抗し，愛国心を発揮したことを記念する像。シンブリー県カーイ・バーンラチャン郡。（ＡＢ撮影／村嶋英治）

C

C　ラッタナコーシン（バンコク）朝を創立した一世王

第2章
近代国家の建設

独立を維持するために

1868年，15歳で王位を継承したチャクリー王朝第5代目のチュラーロンコーン王（在位1868～1910年）の治世時代に，タイは英仏の植民地主義勢力に国境を包囲されて独立維持上最大の危機を迎えた。この時代にタイの独立を守り，タイを西洋や西洋化しつつある日本をモデルにして近代文明国家に導いた名君として同王は，タイ国民より敬愛されている。現在では同王は民衆の願い事をかなえてくれる神として崇拝され，バンコクの同王騎馬像前には線香ロウソク生花が絶えることがない。

タイが独立を維持できた理由の一つとしては，英仏が1896年の協定および1904年の英仏協商によってタイを両国植民地間の緩衝国とすることに合意したこともあるが，これのみで独立維持を説明することには無理がある。タイが植民地勢力の要求に柔軟に対応して，彼らの経済的領土的利益を満足させるとともに，近代国家として諸制度の整備に努力したことも独立維持に大きく貢献した。そのためタイの払った代償は領土の半減であり，タイ経済のイギリスや華僑による支配であった。19世紀半ばのタイの近代化開始とともに多数の華僑がタイに流入したが，その大部分は労働者であった。その一部は成功して資本家に成長した。裕福な華僑資本家は欧米の国籍を取得して，欧米がタイに対してもつ条約上の特権によって保護された。アジア人のなかで日本人のみが「名誉白人」的特権的地位を得たと考えることは誤りなのである。

チュラーロンコーン王は，隣国ビルマを征服するイギリスを眼のあたりにしてタイの独立を危惧し，1884年にヨーロッパに駐在中のタイ外交官に独立維持の方策を諮問した。これに答えて1885年1月に王弟・外交官ら11名が西洋の信頼を得るためには，西洋と同じ統治原理，すなわち立憲体制にすべきであるという奏上を行なった。西洋をモデルにした近代化の推進はこのころから本格化し，たとえば1887年には陸軍士官学校が開校したし，その他諸々の学校が創設開校された。1892年には中央集権的な行政制度の整備も始まった。

中央集権国家の建設

しかし，チュラーロンコーン王は統治原理の西洋化には頑として応じなかった。彼はタイの国王は市民革命以前の西洋の国王のような専制君主ではなく，人民の父親であり保護者である，親心をもって子どもである人民を統治していると主張した。このような国王像を同王の2人の息子，ワチラーウット王（在位1910～25年），プラチャーティポック王（在位1925～35年）も持ちつづけた。32年，立憲革命で国王の権力はイギリス型君主制を模範として制限されたが，父親としての国王像は今日に至るまで，タイ人に一定の影響力をもっている。

チュラーロンコーン王時代の改革は，チャクリー改革と言われることもあるが，この改革がもたらしたものは王権の制限ではなく，逆に中央集権国家の建設による国王への権力集中であった。

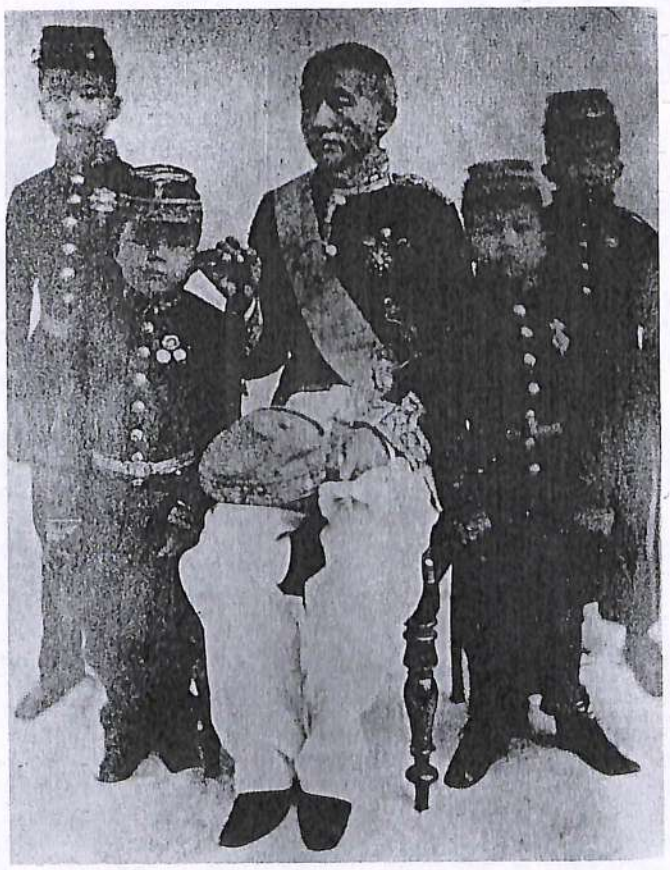
ワチラーウット王も人民には参政権を全く与えなかったが，彼は「民族」をタイ人が忠誠を尽くすべき最高の公として強調した。現行の国旗，国籍法，苗字使用法，義務教育法などを制定したのは彼である。彼はタイ経済の華僑支配にも警鐘をならした。関税自主権回復を目的に彼は，1917年7月に第一次世界大戦に参戦し，目的を遂げることができた。

プラチャーティポック王は即位の当初から兄王時代の財政赤字問題の解決におわれただけではなく，30年に入ると世界恐慌による輸出不振，農産物価額低落，財政赤字，失業問題などに直面した。この解決のため官吏の解雇，増税を強行した。このような経済状態に，1931年のラジオ放送の開始や新聞発行の増大などに見るマスメディアの発達や教育の普及による国民の知識増大が加わって，政治的無権利状態への不満が高まった。これが32年立憲革命の背景となった。

1．チュラーロンコーン王の独立維持の苦闘

チュラーロンコーン王時代，イギリスは北タイのチーク産業などに進出し，フランスはタイの属国・ルアンプラバン王国などが支配するラオスにホー族（漢族）の反乱などを口実にして進出した。1893年にラオスを奪って後も，フランスはタイ湾東海岸のチャンタブリーを占領した。国王は独立維持のためチャクリー改革に着手したが，その担い手は欧州に留学させた多数の王子たちであった。同王はロシアやドイツあるいは日本との関係を強化して英仏の圧力に対抗しようとする外交策を用いた。

A

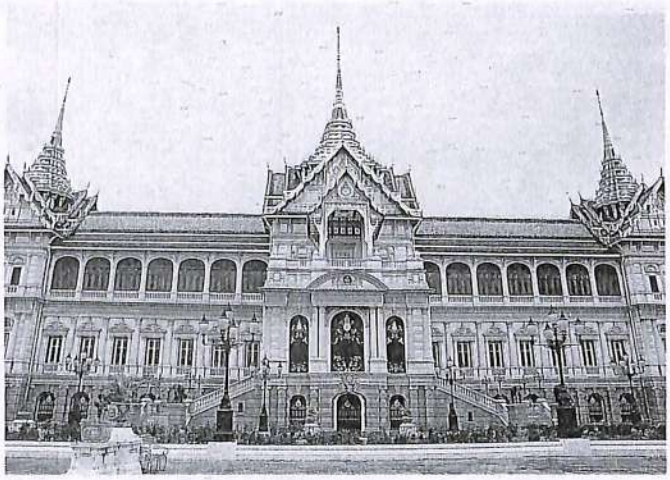


B

A　モンクット王　1858年撮影。チュラーロンコーン王の父。後に，アメリカ映画「王様と私」のモデルになった人物。

B　モンクット王（60歳）と王子たち　左端は12歳のチュラーロンコーン王子，右から２人目は７歳のテーワウォン王子（後の外相）

A



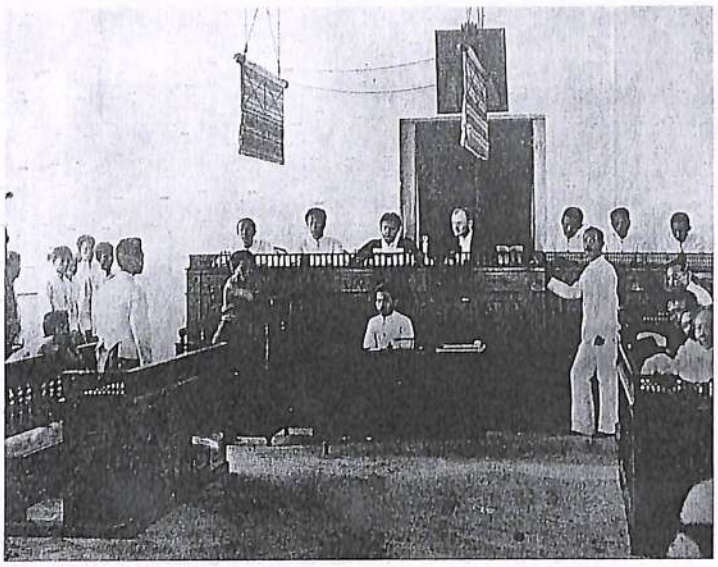
B

C

A　ホー族の侵攻に出動するタイ軍　1875年シャムの属国ルアンプラバンに侵攻したホー族（漢族）鎮圧のため，ピサヌローク州から徴兵した兵隊を派遣した。象にドイツ製の大砲をのせて運んだ。

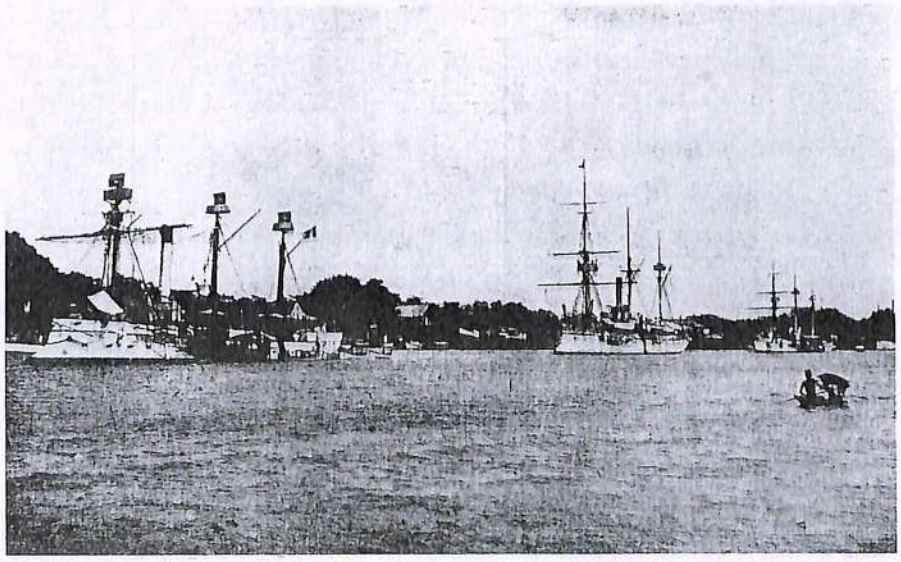
B　1876年に着工した王宮

C　伐採したチーク材の運送　北タイにおけるイギリスの経済的関心はチーク材であった。



D

E

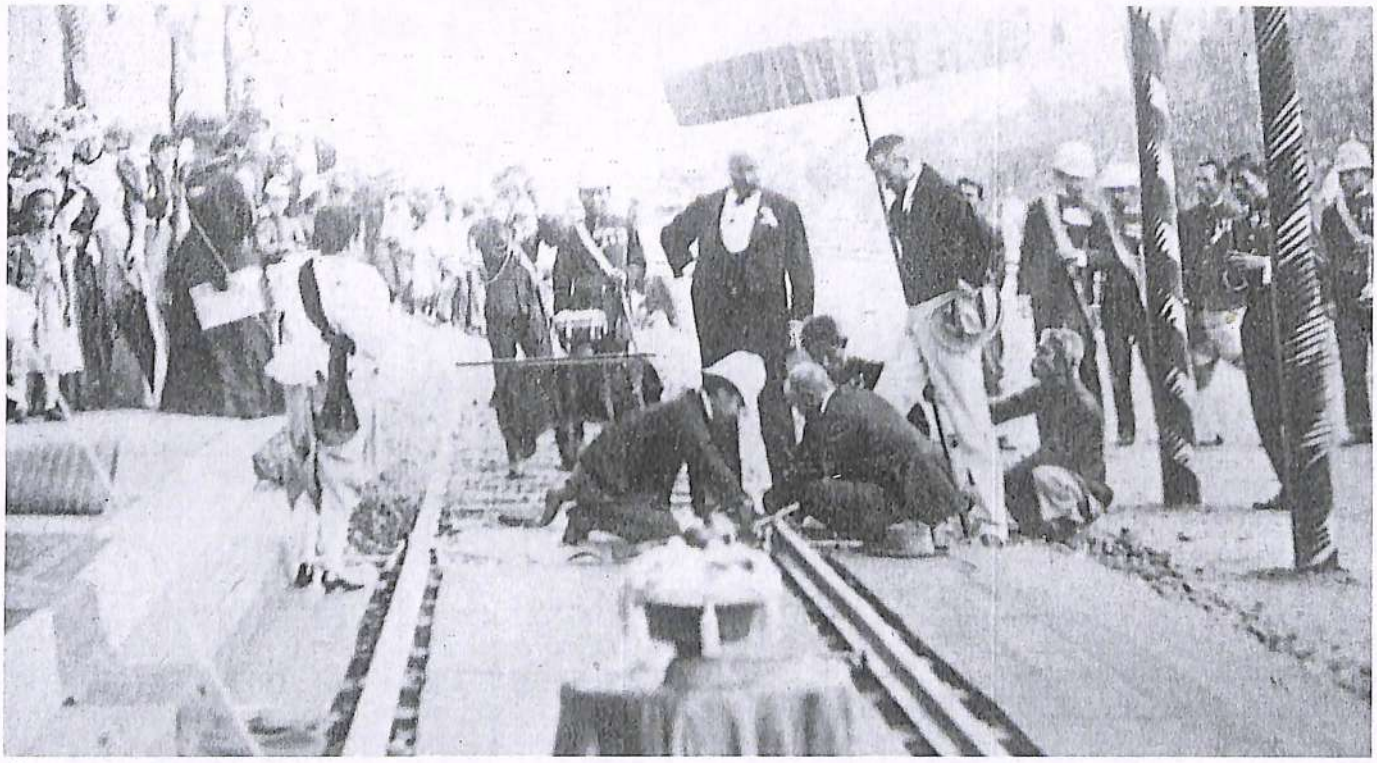


F

D　外国人判事によるタイの裁判　タイは西欧列強に不平等条約，治外法権を押しつけられた。
E　フランス軍がチャンタブリーを保障占領した（1893年）時代の仏軍司令部　（撮影／村嶋英治）
F　バンコクに侵入したフランスの砲艦　1893年7月13日夜，フランス艦隊は，タイ側の禁止を無視してチャオプラヤー河を遡航，バンコクにまで侵入し，ラオスの割譲をせまった。

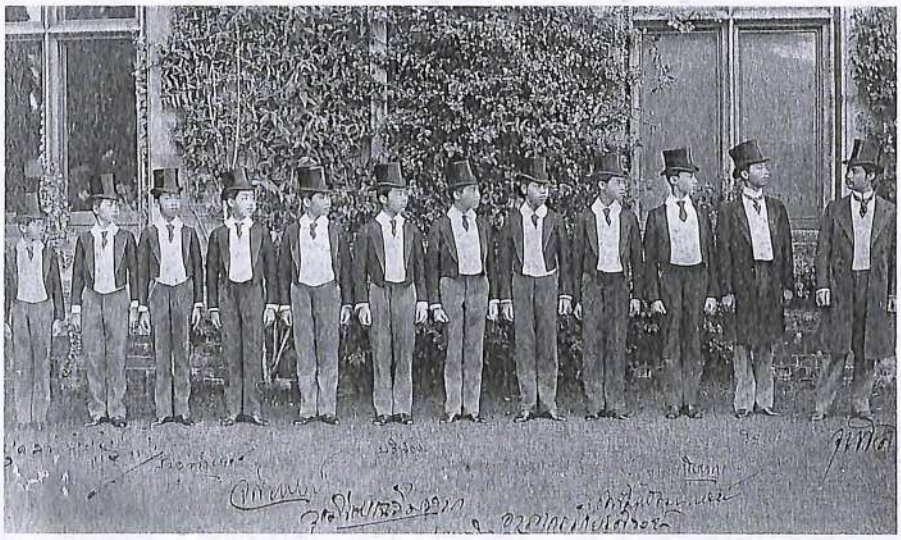
A

A　チュラーロンコーン王夫妻　1896年撮影。



B

C



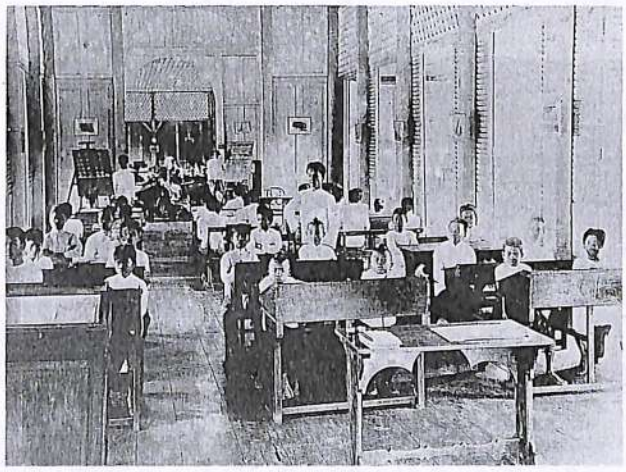
D

B　鉄道開通式のチュラーロンコーン王　1897年3月26日，バンコク・アユッタヤー間の鉄道が開通した。鉄道は近代国家建設に欠かせないものだった。

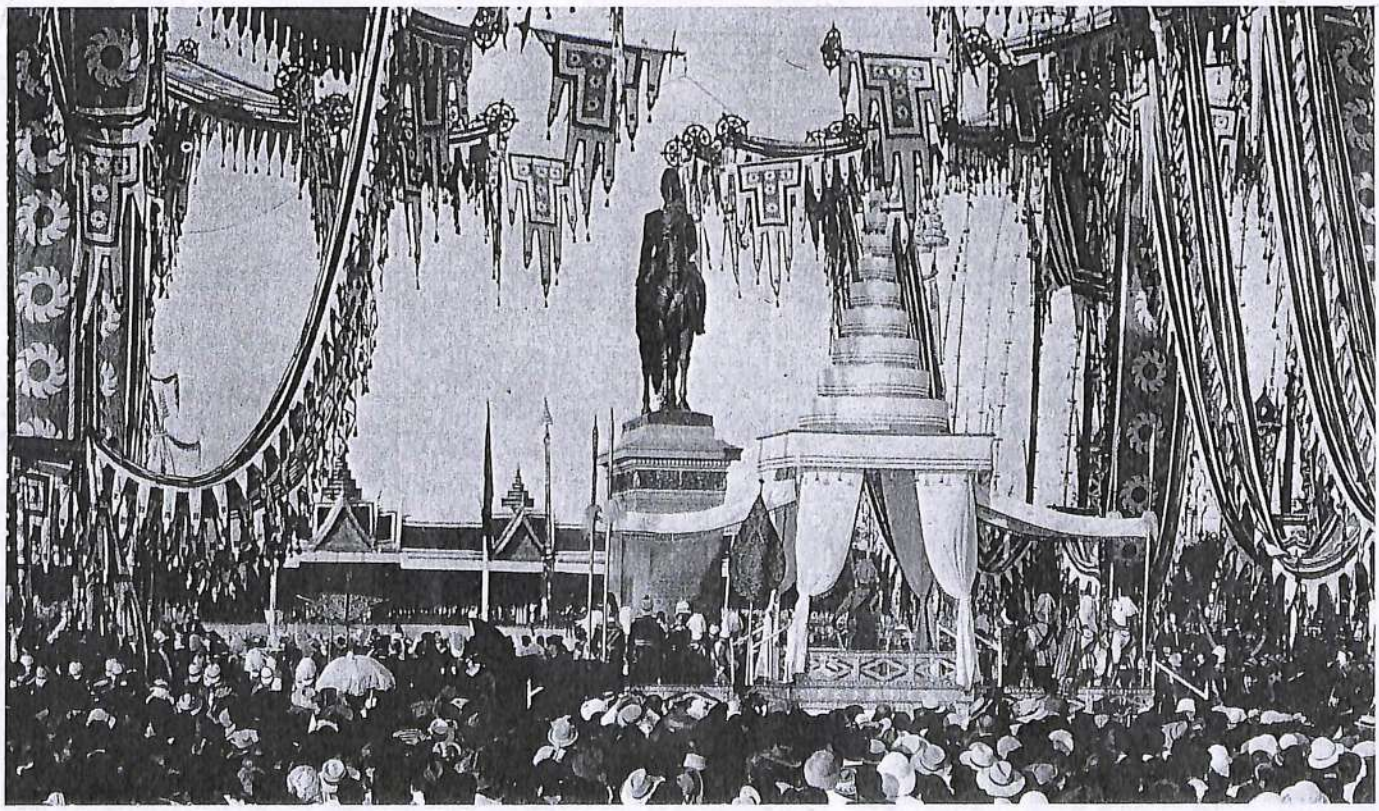
C　1892年の郵便配達　19世紀末には郵便制度も整備された。

D　チュラーロンコーン王（右端）と留学中の王子たち　1897年，王の第1回ヨーロッパ訪問時，留学していた王子たちをロンドンに集めた。チュラロンコーン王には77人の子どもがいた。左から7人目が次の王位を継ぐワチラーウット王子。

A



B



C

A　ロシアを訪問したチュラーロンコーン王とロシアのニコライ2世　1897年7月。ロシア訪問は遠交近攻策の一環として行なわれた。前列右端はワチラーウット皇太子。

B　チュラーロンコーン王末期の学校風景

C　チュラーロンコーン王の騎馬像竣工　1908年11月11日。

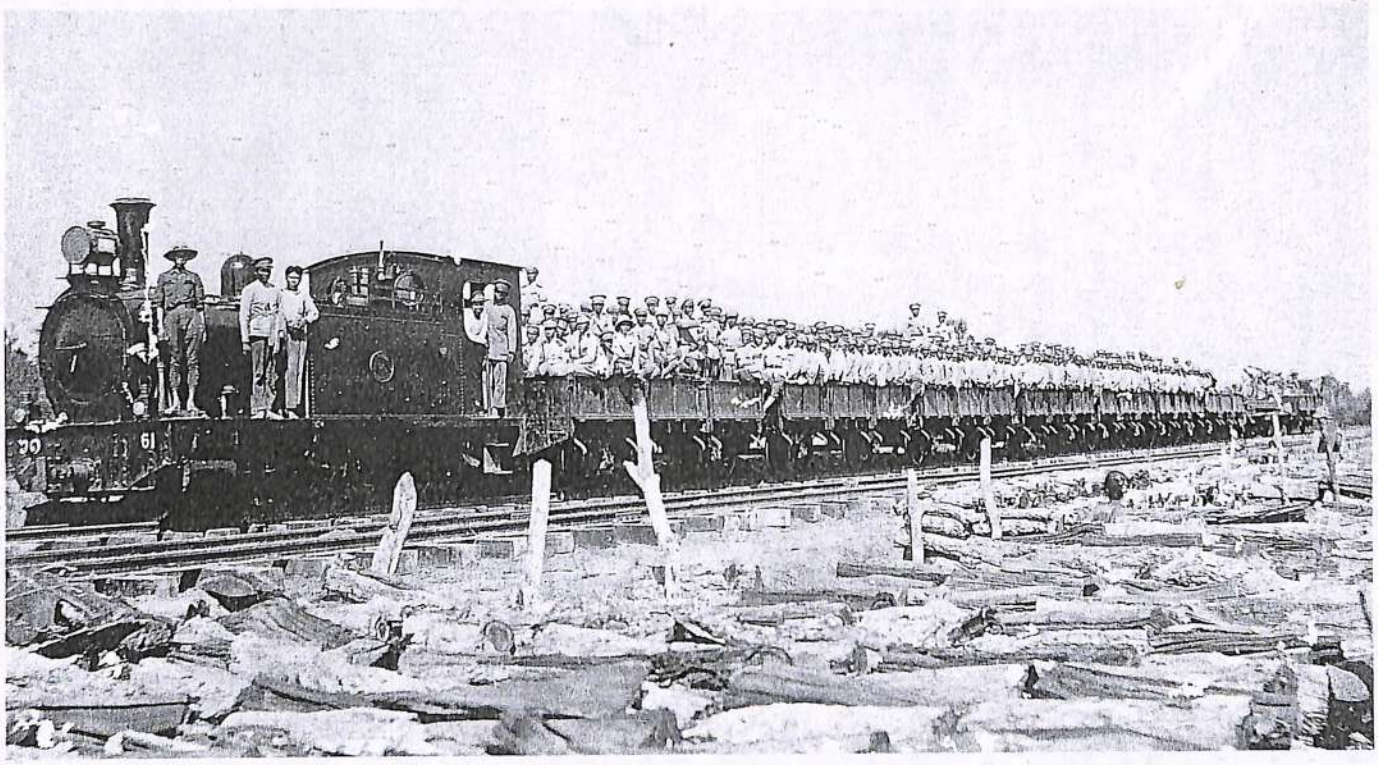
2．タイ近代化と日本

欧米諸国のタイとの不平等条約締結に遅れること40年余，1898年２月，日本との間に日本シャム修好通商航海条約が締結された。日本はタイに欧米並の領事裁判権と関税特権を要求して獲得することができた。しかし，領事裁判権については，タイが主要法典を制定するまで，という条件つきであり，欧米諸国のような無期限の特権ではなかった。タイ政府は法典編纂を急ぐため，日本人の政尾藤吉を法律顧問として雇用した。20世紀に入ると，近代化を進めるタイは，日本人の専門家を雇用し，また日本に留学生を派遣した。しかし，日タイの交流は1910年代から立憲革命までは尻すぼみとなった。

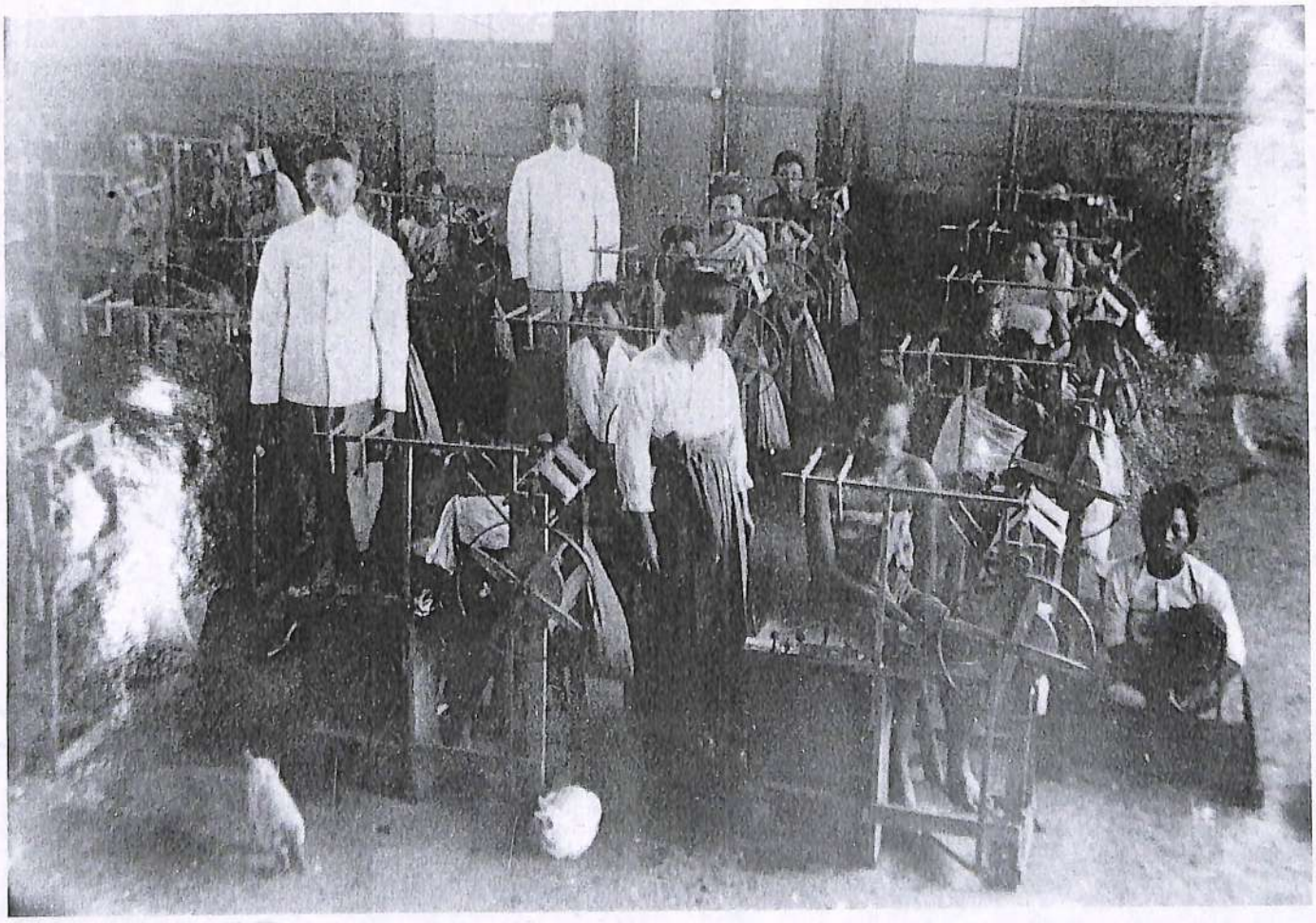
A

B

A　チャクリー宮殿前の政尾藤吉　1897（明治30）年，政藤（中央）はタイ政府に招かれ，司法省の顧問となった。
B　政尾藤吉夫妻（後列左と中列中央）と日本への第１期留学生たち



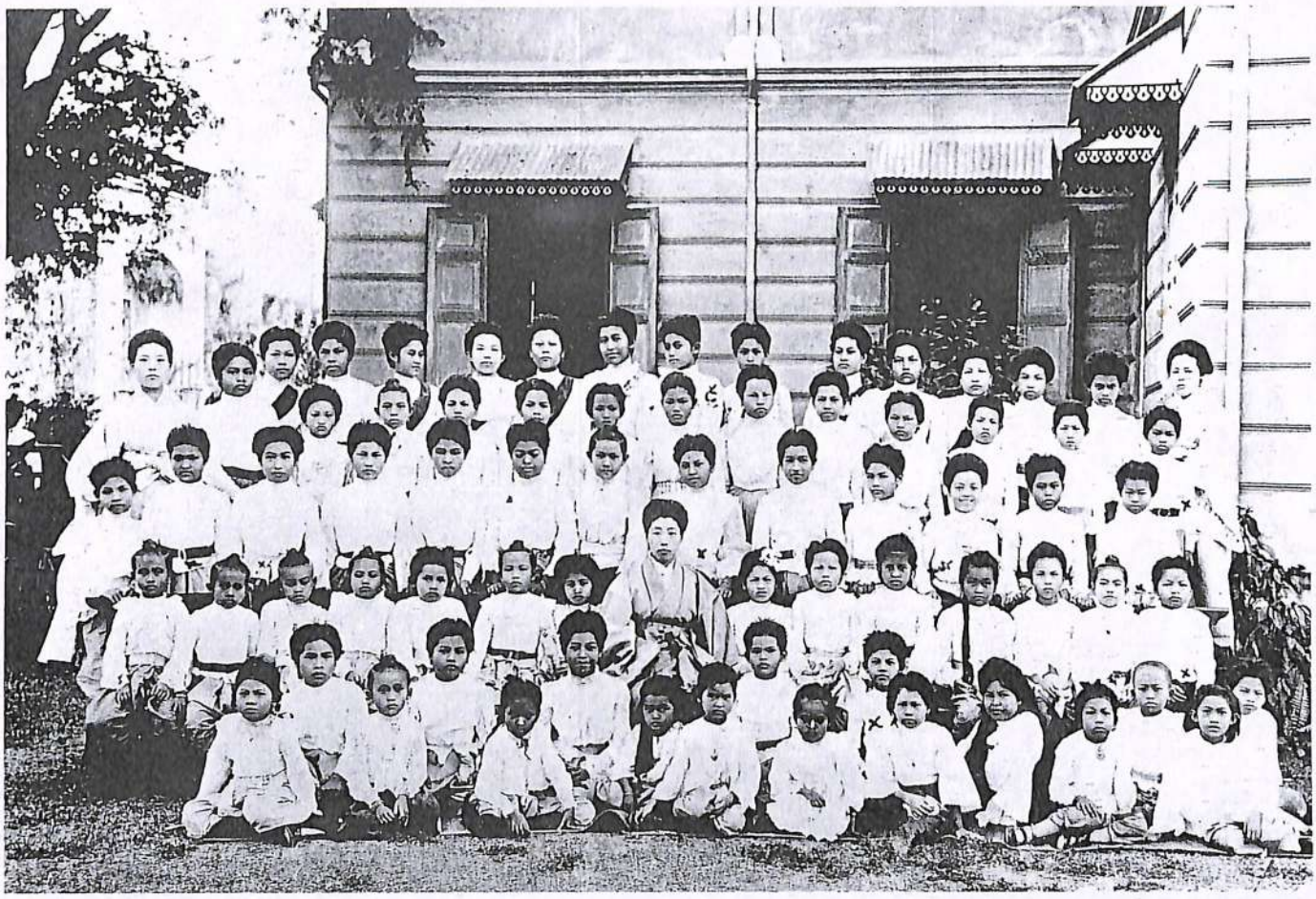
A



B

A　**東北タイの鉄道建設と日本人労働者**　1895（明治28）年，32人の日本人が鉄道建設の工夫として雇われ，はじめての移民として渡タイした。森林を伐採しての難工事で，日本人工夫の多くがマラリアなどの風土病で死亡した。東北タイのゲーンコーイという町に，日本人移民の慰霊碑がある。

B　**日本の養蚕技師の指導**　1902（明治35）年，初代駐タイ公使・稲垣満次郎の進言で，男女十数名の日本人養蚕技師を招き，東北タイで指導に当たらせた。気候風土の違いなどで成功しなかったが，後にタイ・シルクの生産地として発展をとげる基礎となった。座繰機械は日本から運ばれたもの。



C

D

E

C　安井てつ（後に東京女子大学長）と皇后女学校の生徒たち

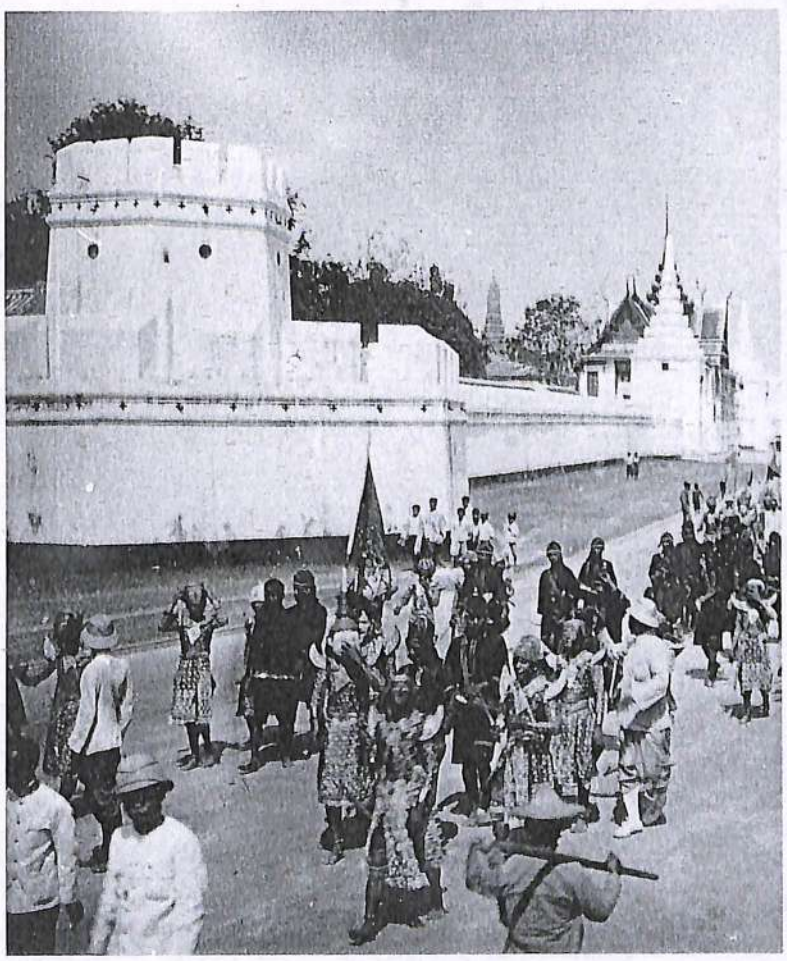
D　タイからの第１期留学生４人の女学生　東京・女子高等師範学校（現お茶の水女子大）で４年間勉強した。

E　タイからの海軍留学生11名　1905～1913年。

3．ワチラーウット王の民族意識啓蒙と民族の栄光

イギリスに9年間留学し，世界の諸事情に通暁していた文人ワチラーウット王は，絶対君主制をより安定的なものにするために，西洋の制度を導入した。しかし，参政権などを求める国民の声に対しては，タイ民族の伝統を見失った西洋の物真似であり模倣主義であるとして断固拒否した。彼の選択的西洋化のなかで，タイ洋折衷の官製国家イデオロギーがつくられた。三位一体的な民族・宗教・国王への忠誠を求めるイデオロギーである。これを国民に教化するためスア・パー部隊を創設し，就学中の青少年を対象に官製ボーイ・スカウトをも開始した。ボーイ・スカウトは今日でも学校教育の必修科目である。同王は第一次世界大戦では義勇軍をフランスに派遣し，国威を発揚するとともに，関税自主権の回復にも成功した。最後の絶対君主プラチャーティポック王は，革命の危険を認識し，1931年4月日本訪問後，アメリカで人民に地方自治への参加を認める構想を発表した。

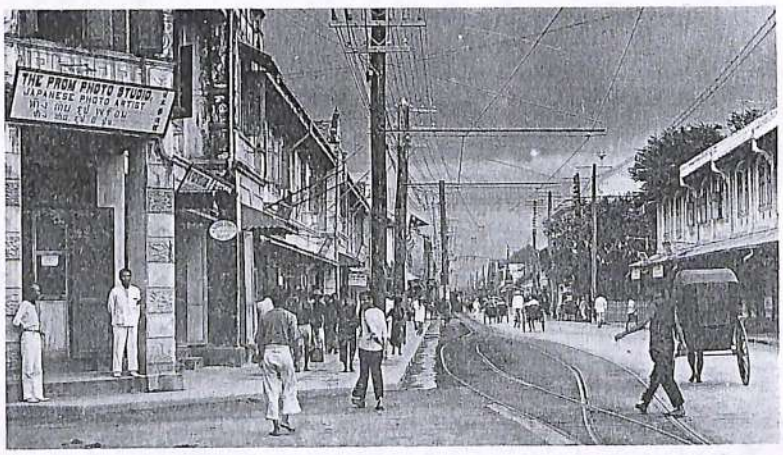
A



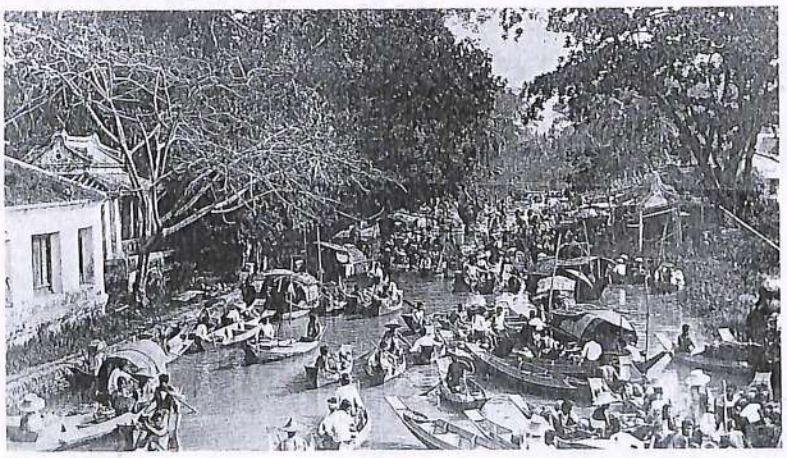
B

A　ワチラーウット王像
B　スア・パー（国土防衛隊）のパレード　ワチラーウット王が1911年に創立した文官から成る国王直属の部隊。「スア・パー」はジャングルの虎の意。

C



D

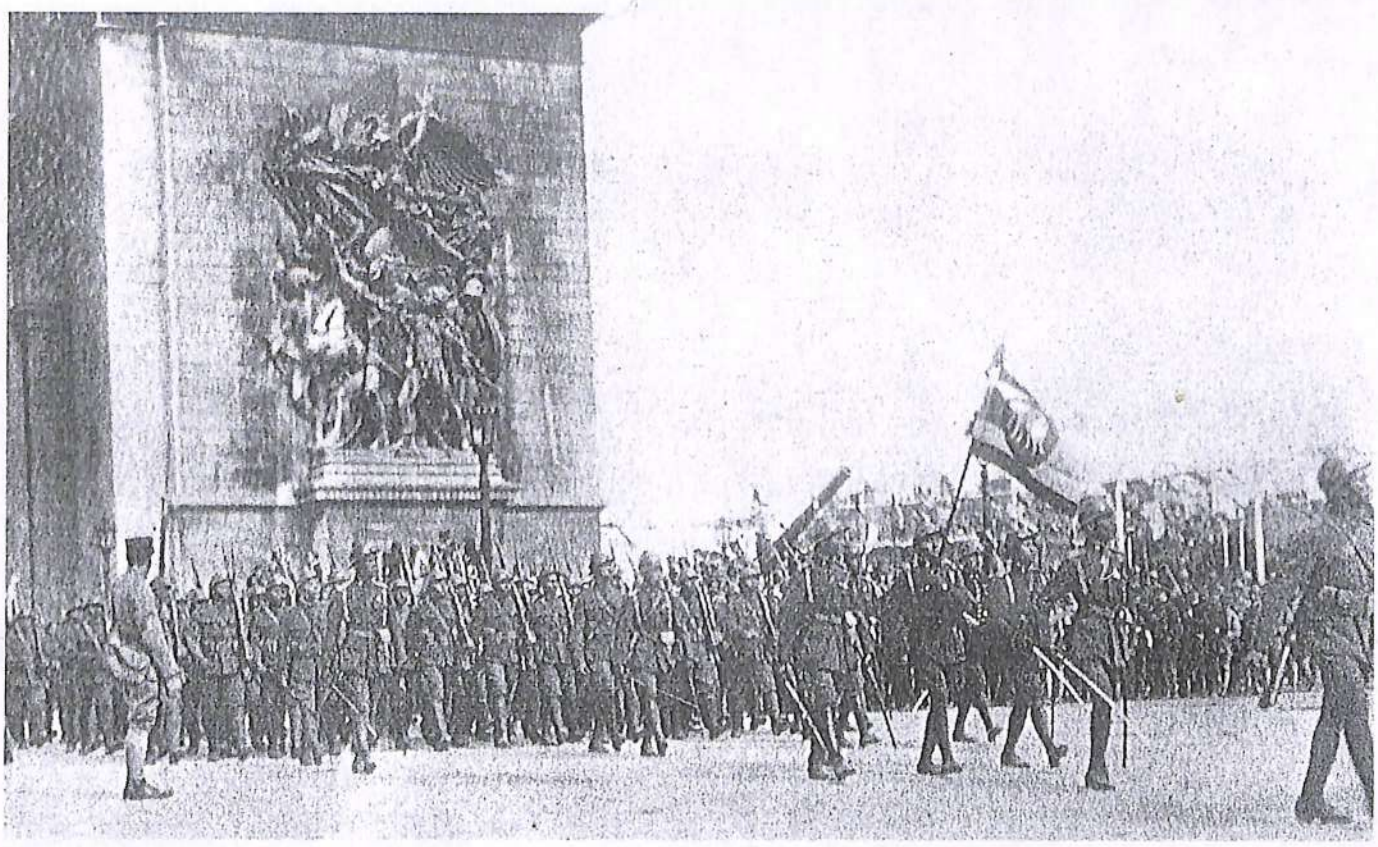


E

C　1910年代初期，ドイツへの留学生

D　1910年代のバンコク　路面電車と人力車，左側に日本人経営の写真館「プロム」が見える。当時，5，6軒の日本人写真館があった。

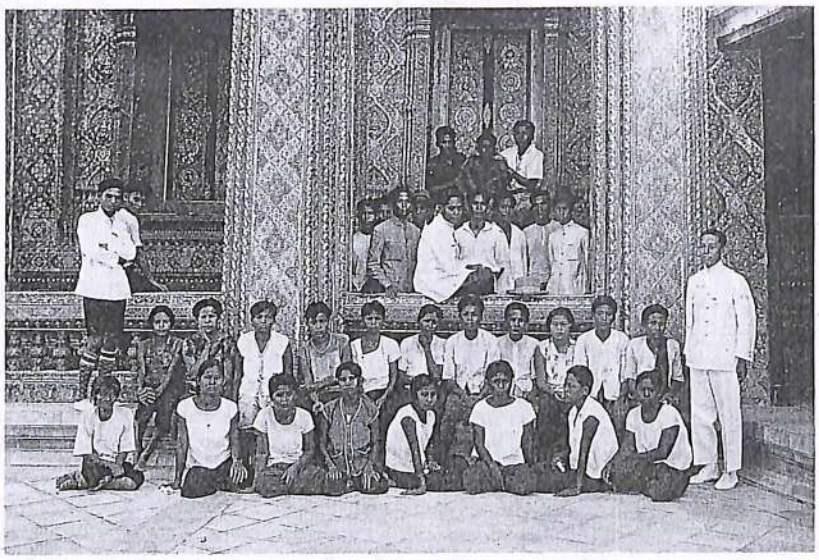
E　1910年代バンコクの水上マーケット　市内を縦横に運河が走り，早朝から船による朝市があちこちで開かれた。



A

B

A　第一次世界大戦で欧州に派遣されたタイ義勇軍　1919年7月14日，パリ凱旋門前の行進。
B　戴冠即位式のプラチャーティポック王　1926年2月25日。

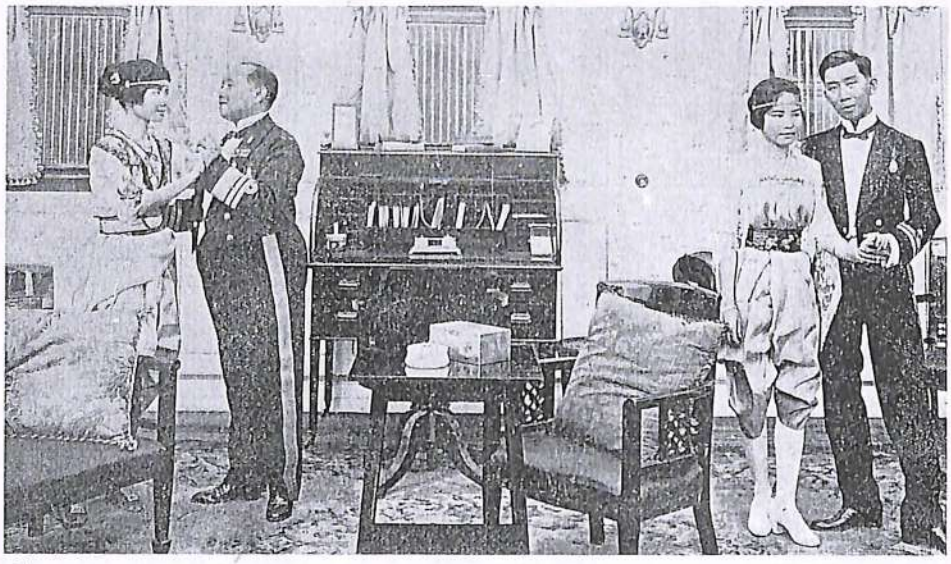


C

D

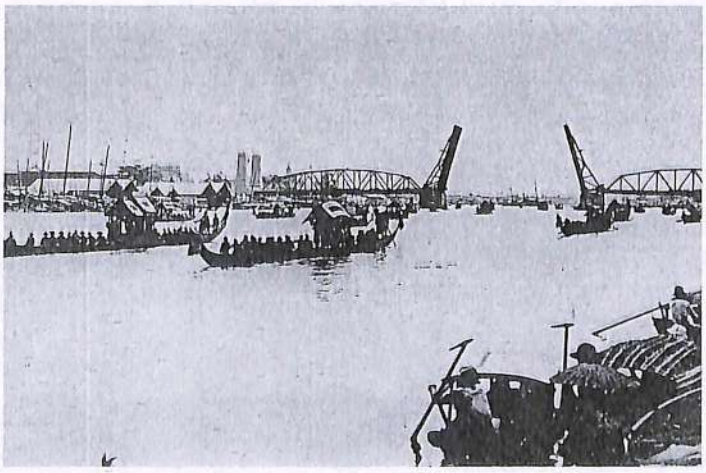
C　三木栄と美術学校の生徒たち　三木は明治30年代に渡タイ，以後30年以上にわたり，美術学校教官としてタイ美術の研究に功績を残した。

D　在タイ日本人による日本人史跡保存会一行のアユッタヤー訪問　右から２人目が三木栄，1926年。



A

B



C

A　芝居を演じるワチラーウット王　自作の小説を演劇化，自ら舞台に立った。この小説は日露戦争に勝利した日本海軍をタイの海軍も見習うべきだという内容だった。

B　訪日したプラチャーティポック王と王妃（右端）　1931年4月。

C　バンコク建都150 周年を記念して一世王橋開通　1932年4月6日。

第3章
立憲革命と民主強国化

人民党によるクーデター

革命を恐れるプラチャーティポック王は，1932年に入ると欽定憲法の発布を計画したが，有力王族の反対のため実現しないうちに，32年6月24日，人民党によるクーデターが生じた。人民党は1927年2月にパリで，留学生など7名によって結成された地下革命組織であり，クーデターに加わった党員は陸軍系列32名，海軍系列21名，文民系62名の計115 名であった。その中心幹部は，官費もしくは私費で欧州に留学した経験をもつエリートである。

人民党の中心的革命思想は，次のように言うことができる。すなわち，権力を独占する特権的身分差別的王族たちは，人民の血税を自己の享楽にのみ浪費して民族の発展のためには用いないので，タイの国力は低い状態に止まり，大国の侮りを受けている。また，国家の要職へも王族身分であるということだけで無能なものが登用され，彼らは民族の直面する重大問題，とりわけ当面の問題である世界恐慌による人民の経済苦境などを，解決する能力がない。そのため人民は，一層飢え苦しんでいる。民族の利益を顧みない特権的王族支配は民族の発展を妨げるばかりか，人民を苦しめる元凶でもある。民族の利益を代表する人民党は憲法を定めて，憲法のコントロール下に王族を置き，また全人民に平等に参政権を与える。政権を獲得した人民党の課題は，長年の王族支配の下で疲弊した民族を再興し，強大化することで世界の文明大国と対等に肩を並べる大国を建設することである。

人民党の革命思想を一言で言えば「民主強国論」もしくは「立憲強国論」であり，民族利益の体現者である人民党が立憲主義を実現して後，民族主義的強国化を図ることであった。

反人民党勢力との抗争

革命目標達成のため人民党は憲法に経過規定を設け，10年間にわたる人民党の権力独占を確保した。民主主義を口にしながら権力を独占する人民党のやり方を反人民党勢力は矛盾したものと見て容認しなかった。反人民党派は，自由に結成された政党が公正な選挙において競争し，選挙結果に従って政権が交代するイギリス型議会制民主主義の早期実現を要求した。人民党の立憲革命で権力を失ったプラチャーティポック王を始め王族も反人民党勢力の主張を支持した。いやそれ以上に，国王自体がイギリス型民主主義の主唱者となった。

反人民党派の複数政党制の要求を人民党政権は認めなかった。ボーウォラデート親王を長とする反対派は，1933年10月11日，ついに武力に訴えて蜂起した。人民党政権はこの反乱者たちの民主化要求に耳をかさず，彼らに憲法破壊者，絶対王制の旧体制への復帰勢力という汚名を着せて2週間で鎮圧した。この後，人民党政権は自己の権力維持の根拠である憲法の重要性をそれまで以上に国民に啓蒙した。このため各県に憲法を模した記念碑を建設させた。

一党専制を維持する人民党との闘いに敗れたプラチャーティポック王は1935年3月に訪問先のイギリスで退位を声明した。

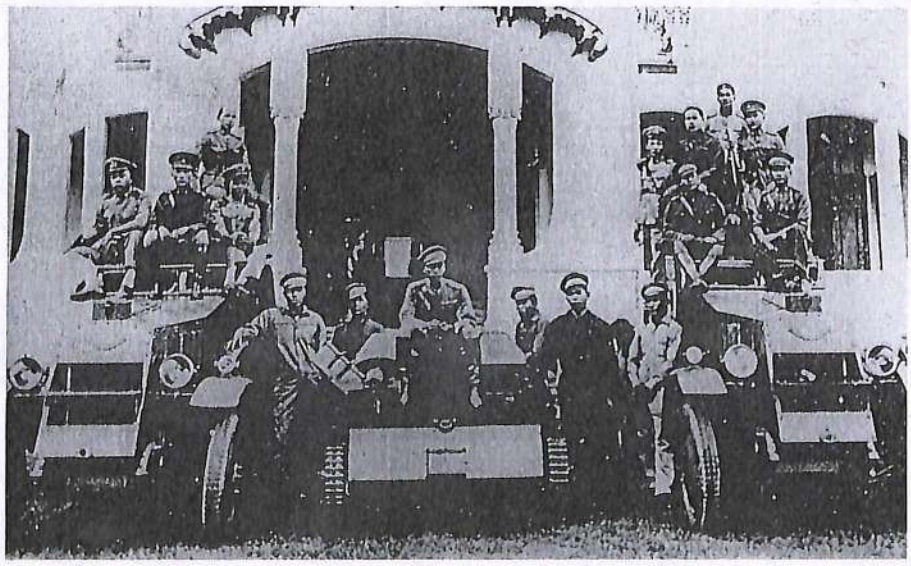
人民党陸軍派

32年クーデター以来，権力の奪取，維持，防御において最も重要な役割を担ったのは，言うまでもなく軍隊であった。そのなかでも陸軍の力が決定的に重要なものとなった。人民党陸軍派のリーダーであるパホンが，1933年6月から38年末まで，その後を承けて同じく陸軍派のリーダーであるピブーンが44年7月まで首相に就任した。彼らは新しいタイ国の建設に力を注いだ。

1．1932年6月24日クーデターと憲法発布

32年6月24日朝5時，人民党はバンコクの騎兵連隊から戦車，装甲車を奪取して武装を固めた後，重要王族のナコンサワン親王などを人質にとった。アナンタサマーコム宮殿前のチュラーロンコーン王騎馬像広場で演習と偽って，ここに集合させていたバンコクの多数の将校や士官学校生を前にパホンが人民党宣言を発表した。これに賛同した将兵も革命の戦力となった。無血のうちに数時間足らずで人民党は，バンコクを制しクーデターは成功した。人民党はプラチャーティポック王に立憲体制下の国王となることを要求し，国王は応じた。27日に臨時憲法が発布されたのち，12月10日に恒久憲法が公布された。

A



B

A　1932年6月24日立憲革命の日，人民党宣言を配布する人民党
B　1932年6月24日早朝のクーデターに人民党が動員した戦車と装甲車

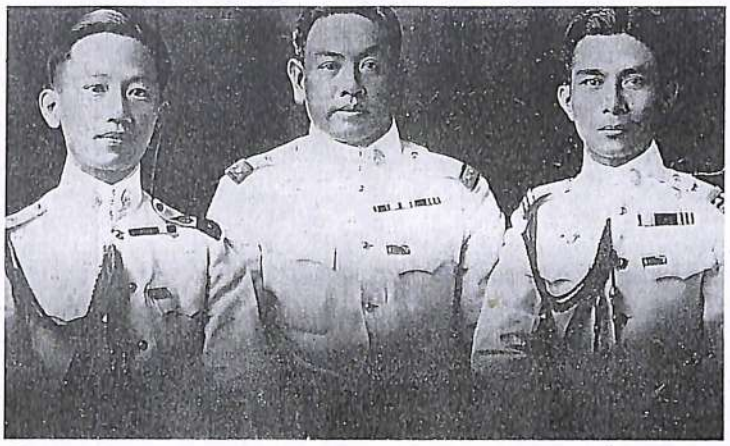
C

D

C　人民党のクーデター司令部のアナンタサマーコム宮殿

D　人民党宣言が発せられたチュラーロンコーン王騎馬像広場　後方がアナンタサマーコム宮殿。（撮影／村嶋英治）

A



B

C

D

E

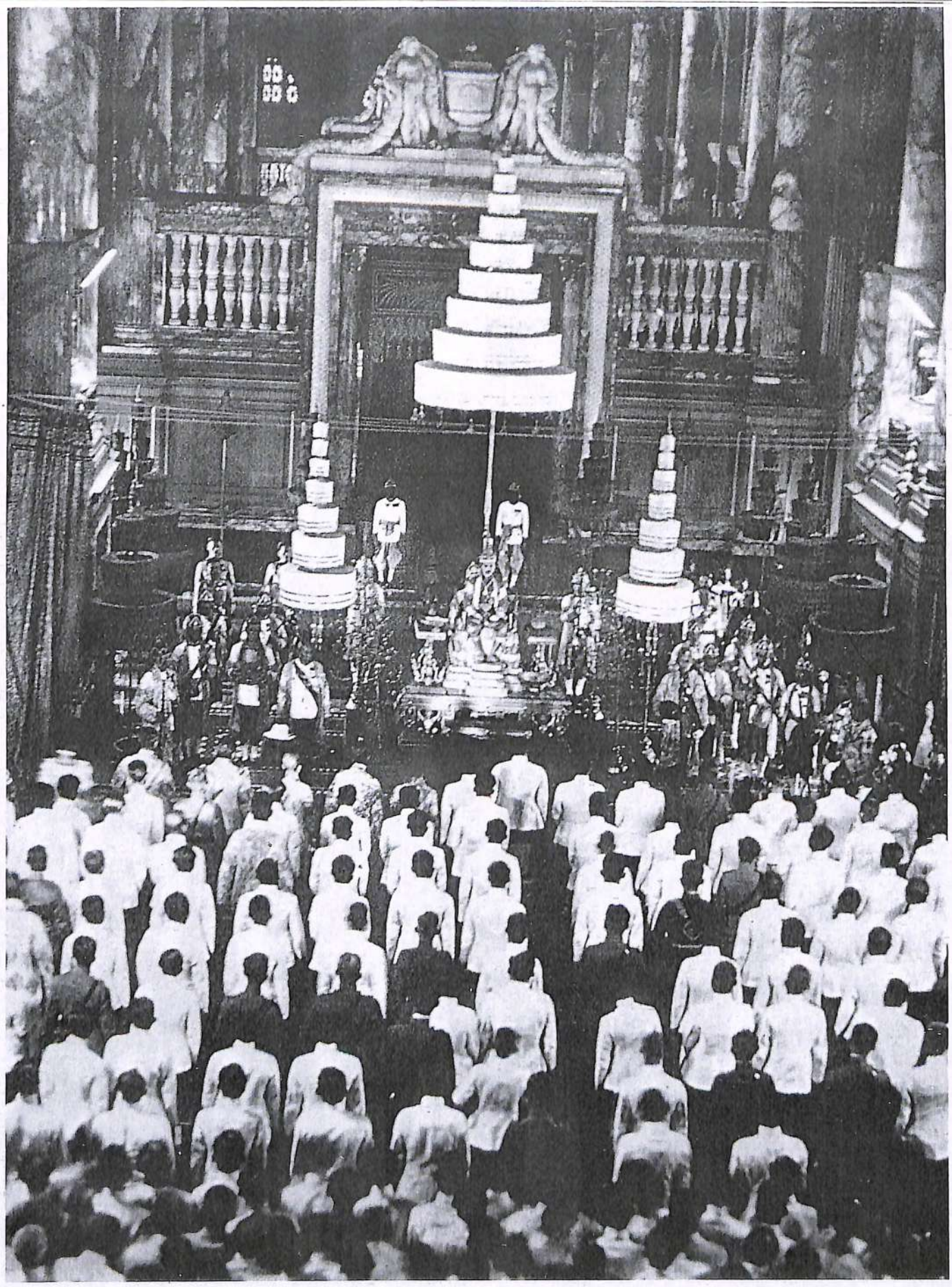
A　人民党宣言をパホンが読み上げ革命を宣言した場所に埋め込まれれている記念プレート

B　人民党指導者のパホン（中央）　クーデター成功後，首相に就任。左側はプラヤー・ソン。人民党指導者の一人。

C　ピブーン　パホンの後を受け首相に就任。

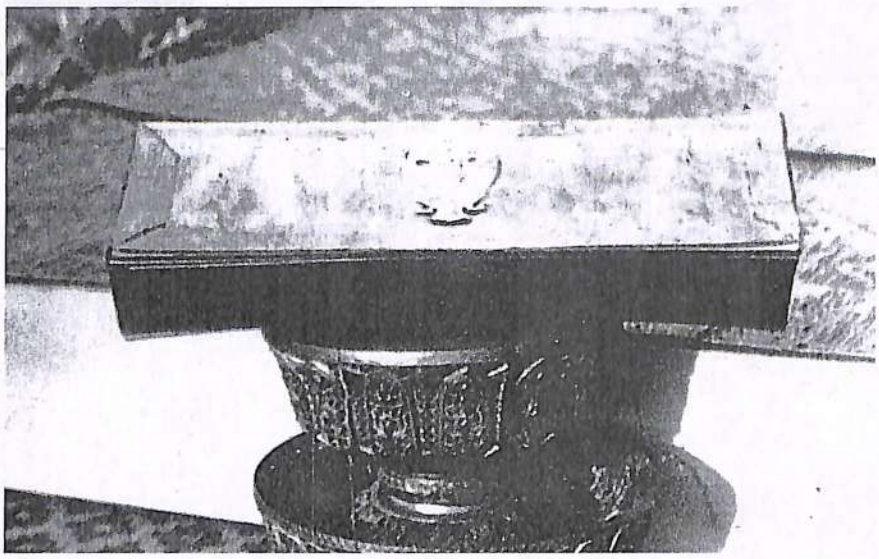
D　プリーディー　人民党指導者。

E　人民党陸軍派メンバー

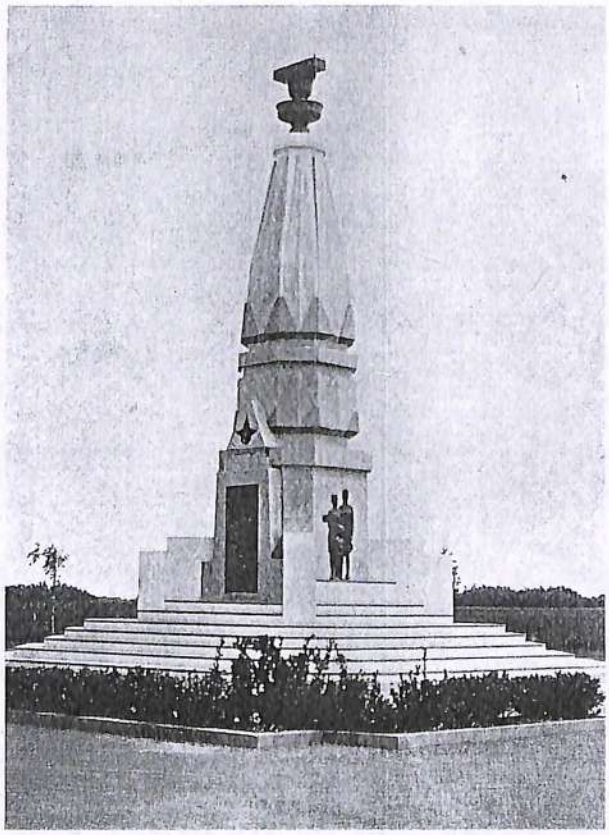


F

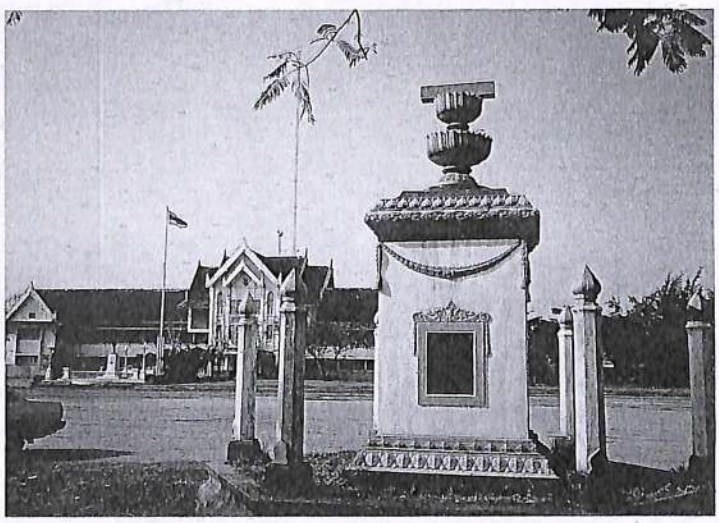
F　恒久憲法発布式　1932年12月10日，アナンタサマーコム宮殿内。



A



B



C

A　恒久憲法正文
B　1933年10月に生じたボーウォラデートの反乱事件鎮圧碑
C　東北タイスリン県県庁前の憲法記念碑　杯の頂に置かれているものが憲法。(撮影／村嶋)

D

D　タマサート大学　人民党の文民派のトップ指導者であるプリーディーによって，1934年に革命後の新しい人材養成のため創立された。

2．日タイの接近

日タイの交流は，1910年代から立憲革命までは低調であったが，1933年６月20日の人民党の２回目のクーデターを契機に再び活発化する。このクーデターで人民党は，巻き返しを図った親英仏的な保守派を政権から追放したので，英仏の介入を恐れて日本に接近したのである。20年余りの空白の後，日本へのタイ人の官費留学も復活し，タイ海軍は軍艦の新建造の多くを日本で行なった。タイから議員やジャーナリスト・作家の視察訪日が相次ぎ，著名作家クラープ・サーイプラディットは，東京都下の御岳を舞台とした名作「絵の裏」を著している。

シャムの青年

士官學校へ

武士の道に一路精進

君バルシンレヤチーア

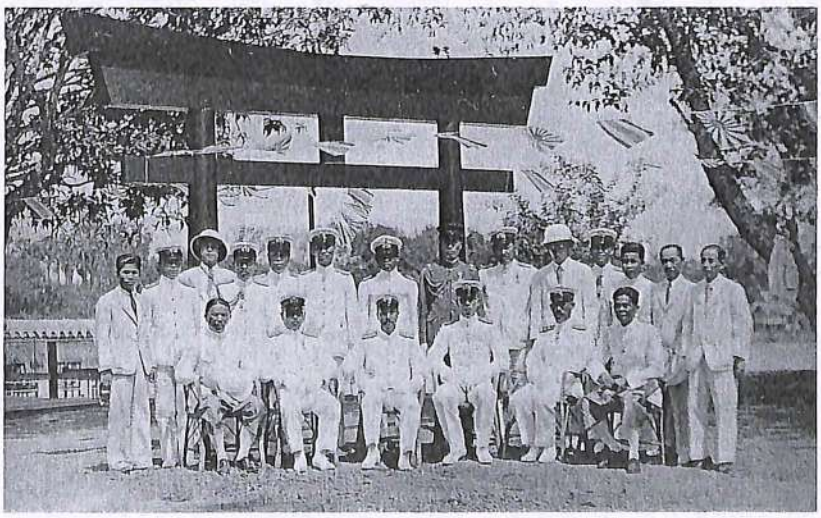
國際聯盟の風の中で敢然とたゝ一國、わが日本に好意を示して一景を乗棚した友邦シャムの陸軍からはるゝ〳〵わが士官學校へ候補生が入校した、この候補生の名はアチャレンシルバ君、シャム國の鴻師の子に生れ神童といはれてゐるのを同國の陸軍大臣が聞き込み特陸相の口添へで同國士官學校に入學

昭和五年春同國陸軍省から拔擢されて日本へ留學、先づ正則中學で日本語の勉强にいそしんだ結果、こんど近衛工兵大隊付士官候補生として目出度くわが士官學校本科第一中隊一年に入學したもので、毎日わが候補生と一緒に用兵作戦や日本武士道の研究に努めてゐる

國産代表 金線バタ

同君が特に感激してゐるのは今入隊を命ぜられた隊は畏くも殿下の御勉學あらせらるゝ第一隊であることで、入校後の成績わが候補生に劣らず、シャム陸のため氣を吐いてゐる

A



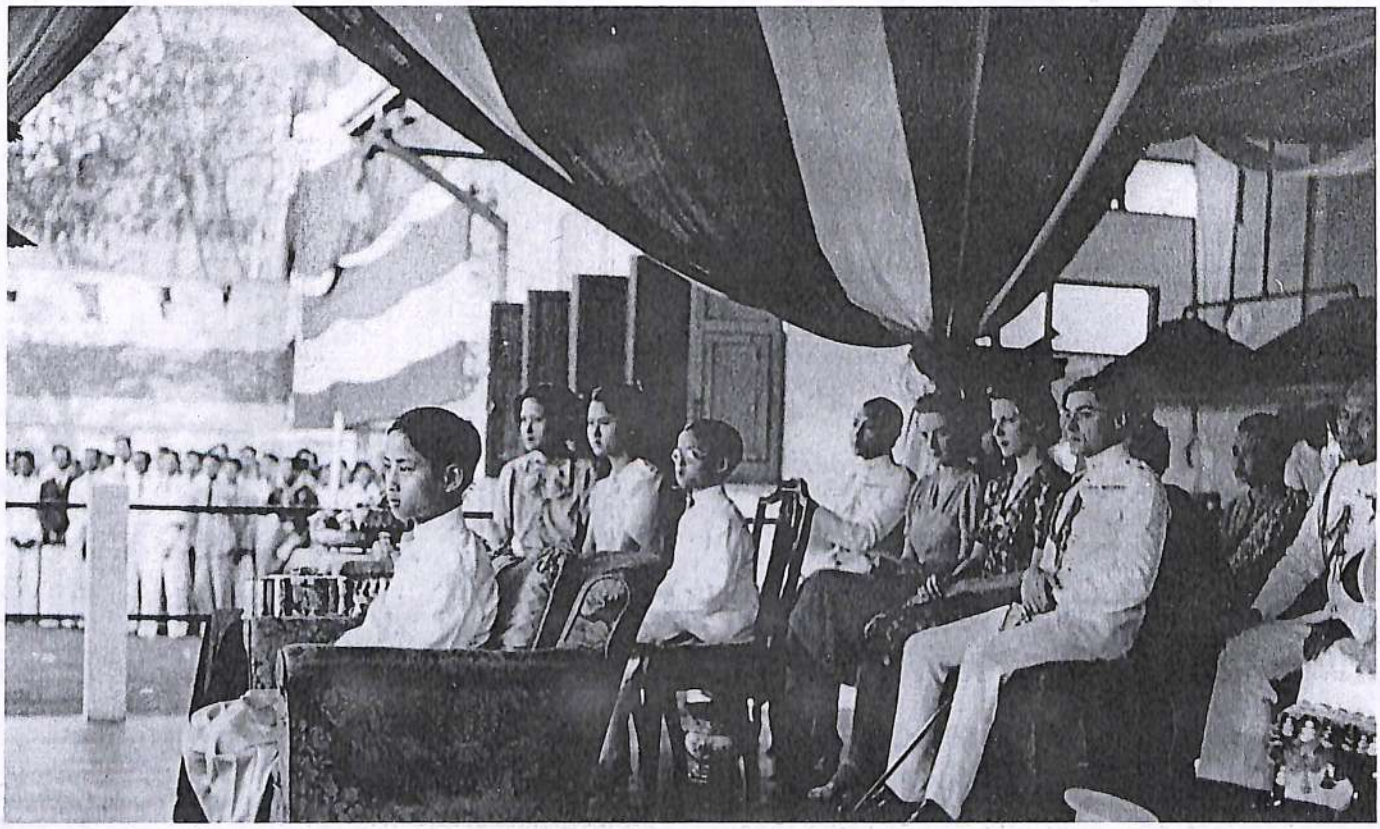
B

A　日本陸軍士官学校に入学したタイ青年
1934年９月，タイ政府の官費派遣だった。

B　訪タイした日本練習艦隊の将兵　1936年，日本海軍の練習艦が日本より運んできた鳥居と祠によりアユッタヤーの日本人町（１７世紀前半）跡に山田（長政）神社を開く。

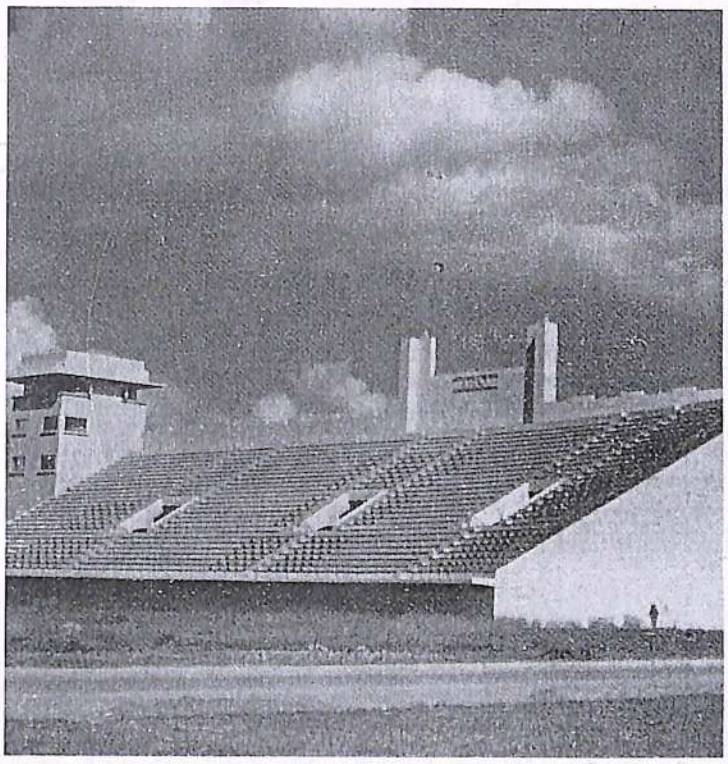
3．新しいタイの建設

人民党政権は義務教育指定地域を全国に拡大し，国民への教育普及を重視した。不平等条約を改正するために必要な全法典の施行を急ぎ，1937年末までに平等条約の締結に成功した。租税についても大改革を実施し，貧富を問わず一律に全ての人民から徴収していた人頭税を廃止した。華僑などの経済支配を打破するために，「タイ・イズム」を掲げて，いくつもの国策会社を新設した。

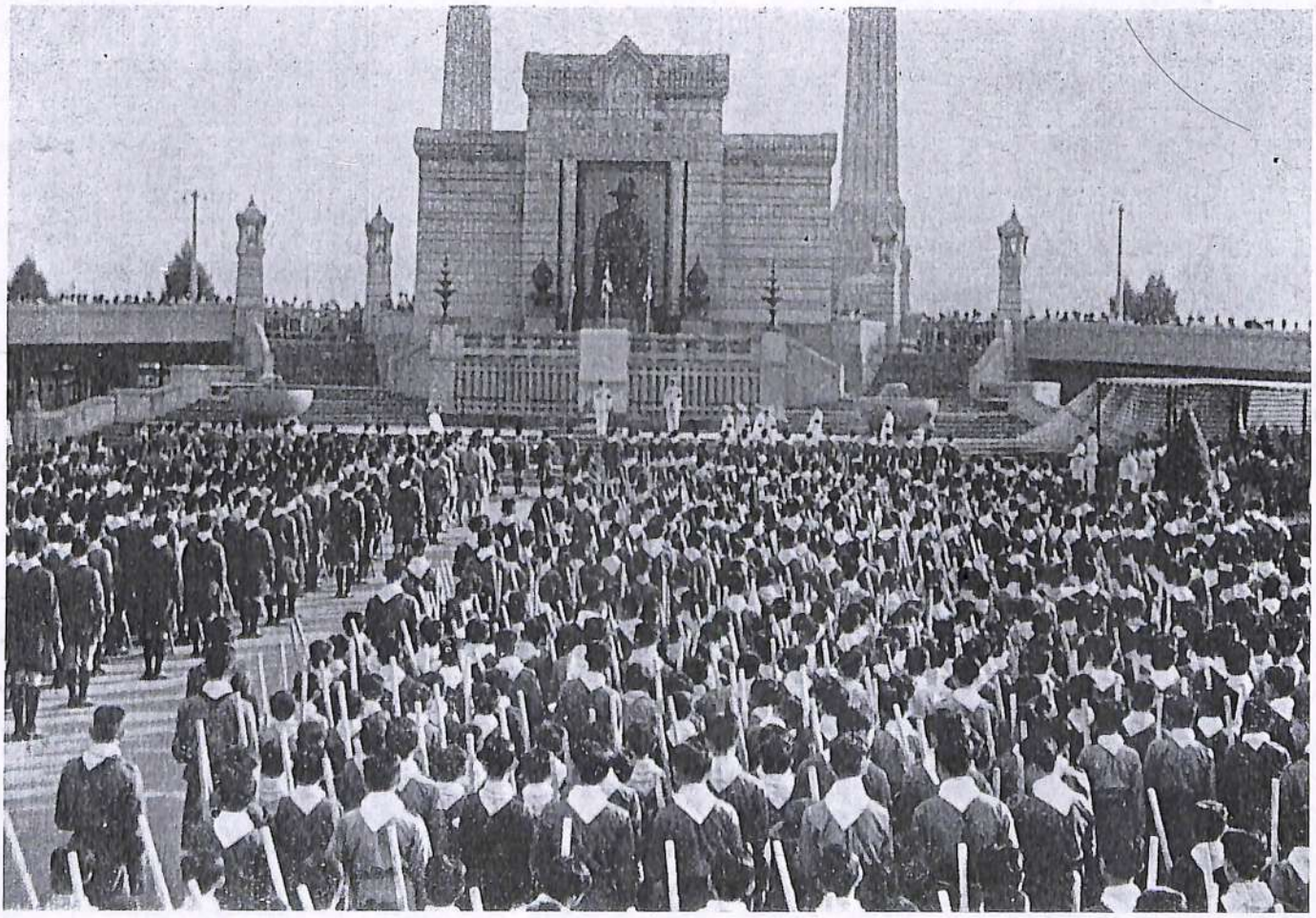


少年王アーナンタマヒドン王　写真は1938年末スイスからタイに一時帰国した時のもの。後ろの眼鏡の少年はプーミポン王子（現国王）。

A



C

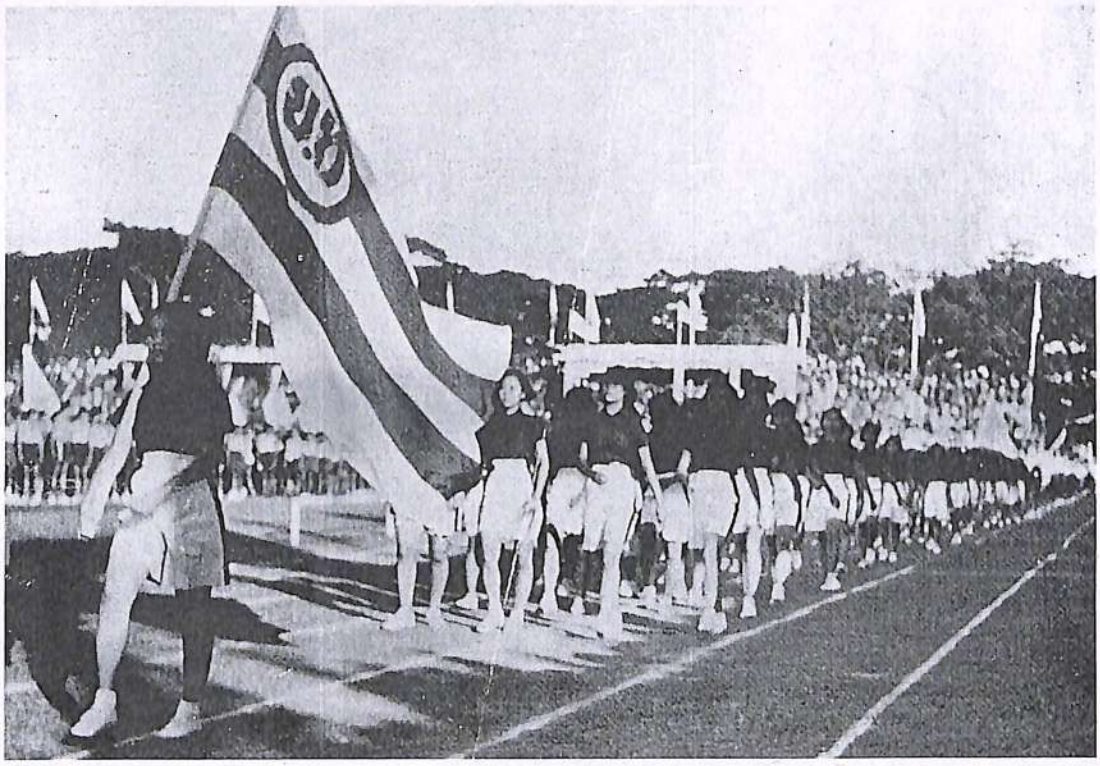


B

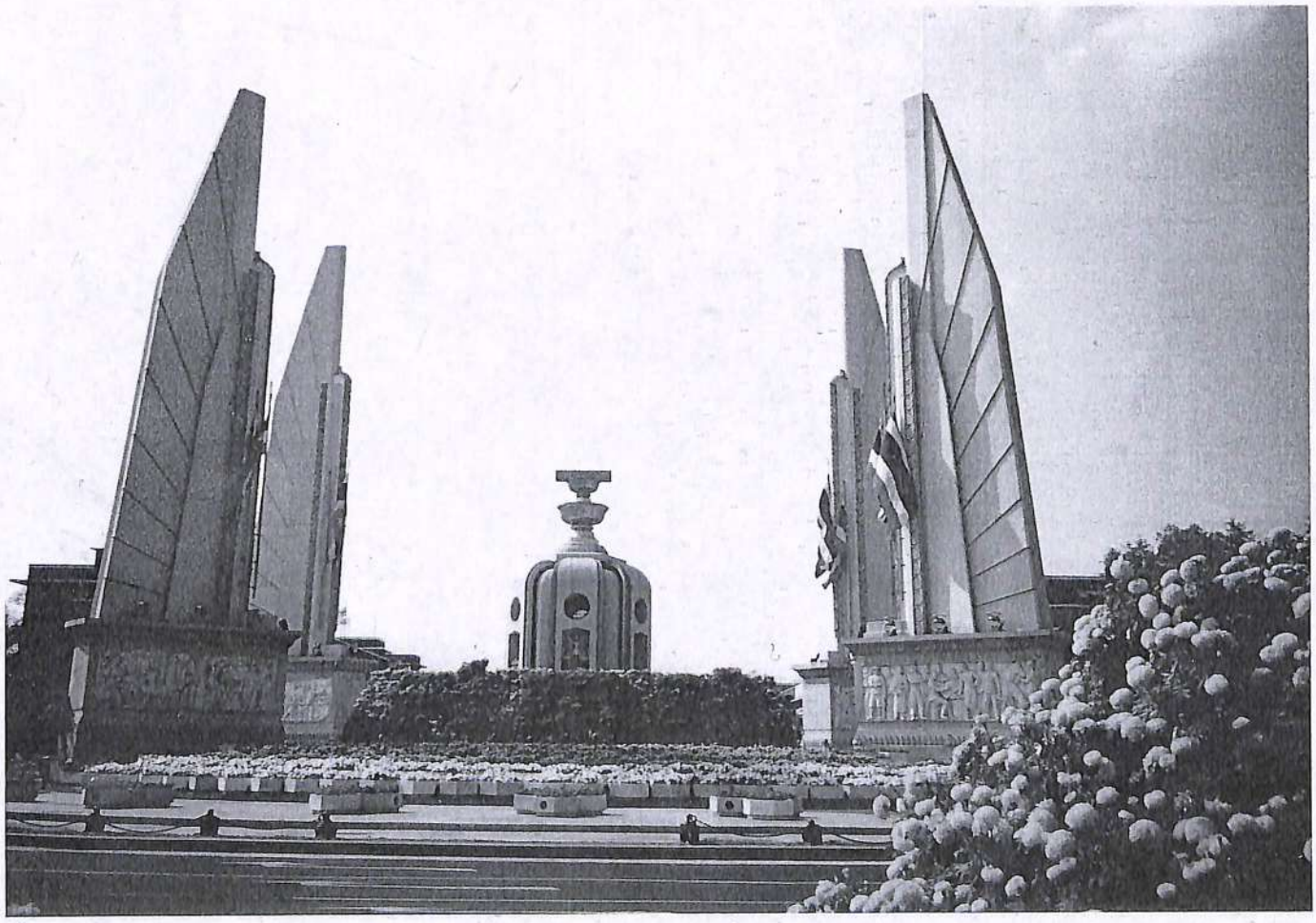
A　憲法記念祭でのビューティコンテストで選ばれたミス・シャム　1938年。

B　ボーイスカウトの宣誓式　1938年，タイのボーイスカウトは，官製の愛国少年運動として始まった。バンコク一世王橋前。

C　スポーツ振興のため建設された国立競技場



D



E

D　国立競技場での選手入場パレード
E　民主記念塔　1940年6月24日の革命記念日に竣工した。(撮影／村嶋)

4．日中戦争とタイ華僑の抗日運動

タイ華僑は1925年の５・30運動以来，抗日運動を断続的に行なってきたが，1937年７月７日に始まった日中戦争では，本国の抗日戦争支援のための募金，日貨ボイコット，帰国服務などさまざまな抗日運動を行なった。抗日運動に邁進していた華僑たちは，その指導者だった蟻光炎の暗殺の背後には華僑弾圧を強めていたピブーン政府，および日本があるものと考えた。

A

A　中央軍特訓班華僑隊　日中戦争時，タイの華僑青年は抗日のため帰国して軍隊に投じた。

B

C

B　蟻光炎の葬儀　中華総商会主席蟻光炎は，1939年11月，一人の華僑によって暗殺された。
C　泰華英烈館　抗日戦に参加して死亡したタイ華僑出身の将兵の記念館。戦後，バンコクに建設された。

第4章
失地回復と「大東亜戦争」

中立政策と対フランス独立運動

1939年9月1日，欧州で第二次世界大戦が勃発すると，タイは第一次世界大戦時と同様に直ちに中立を表明した。同時にタイは英，仏，日に対して不可侵条約の締結を提案し，40年6月12日に英仏との間に不可侵条約を，日本との間には友好関係の存続及相互の領土尊重に関する条約を締結した。タイの安全保障にとって重要な3大国との条約により，タイの中立政策は完成したかに見えた。

ところが，それまでは現存国土が大国間の戦乱に巻き込まれないようにと，内向きの防衛ばかりに考えを巡らしていたタイ指導者は，1940年6月後半以降，国際情勢が急変するにともない，長年の宿願であり，立憲革命の重要課題であった失地回復の実現に向かって具体的な歩みを踏み出した。タイ人にとって第二次世界大戦は，何よりも失地回復のチャンス到来という面から，意味をもったと言うことができる。

急変した情勢とは，一つはフランスがドイツに屈服したことであり，もう一つは日本が仏領インドシナへの軍事進駐を要求し始めたことである。タイの失地回復という大悲願の成就にとって，日本の存在はそれを助けるどころか，横取りしようとする競争相手，妨害的存在であるとさえ，タイ指導者には映った。

日本が40年7月27日に決定した「世界情勢の推移に伴う時局処理要綱」は欧州大戦という好機に便乗して，東南アジアの資源獲得のため，武力南進しようという内容であった。東南アジアのイギリス勢力打倒のためには，先ず仏印，タイを日本軍の前進基地として獲得しなければならない。日本側から見れば，仏印とタイの価値は等価である。日本は両者に対して40年8月に東亜新秩序建設に加わるように申し入れている。

タイの仏印失地を日本に横取りされる可能性ばかりか，タイの中立を侵され，日本陣営への加入を強制される危険性に直面することになったタイのピブーン首相の反応は，抗日的なものであった。9月11日にピブーンはフランスに失地返還要求を申し入れたが，メコン河を国境にするという提案の理由を河川という自然国境を設けて，侵略者に備えるためであると説明している。また，同じ頃ピブーンは，失地を回復してタイ族の大国を建設する以外には他国への従属化を免れる方法はないと語っている。ピブーンの念頭にある侵略者やタイを従属させようとする国は，日本の他にはあり得ない。

どうしてピブーンは日本陣営に参加して，失地回復を計ろうと考えないのであろうか。それは日英戦争の最終勝者の見通しが立たないからである。対立する大国の間にあっては，安全第一に中立策をとり，最後の勝者を見極めてのちに勝者側につくのがタイの小国外交の伝統である。ピブーンは日英に対して中立を維持しつつ，フランスとの直接交渉によって失地回復を実現できると考えていた。9月11日にタイはメコン河を国境とする国境改訂案をフランスに提案し，かつ仏領インドシナの主権者に変更がある場合は，タイがフランスによって失った全失地をタイに返還するという保証を求めた。さらに，25日に2度目の申し入れを行なった。これらをフランスは拒絶。ピブーンの期待は裏切られた。フランスの強気の理由は，フランスが日本軍に仏印進駐を認めた引換えとして，日本が仏印の主権尊重を約したからであった。

失地回復のため国内世論を煽っていたピブーンは，引き返すことはできない。仏領インドシナのタイ族（このなかにはラーオ人はもちろんクメール人までも含んだ）にフランスの支配に反抗し，自由と平等の国，タイ国に加わって，タイ族の一大国家建設に参加するように呼びかけ，ベトナム人にも

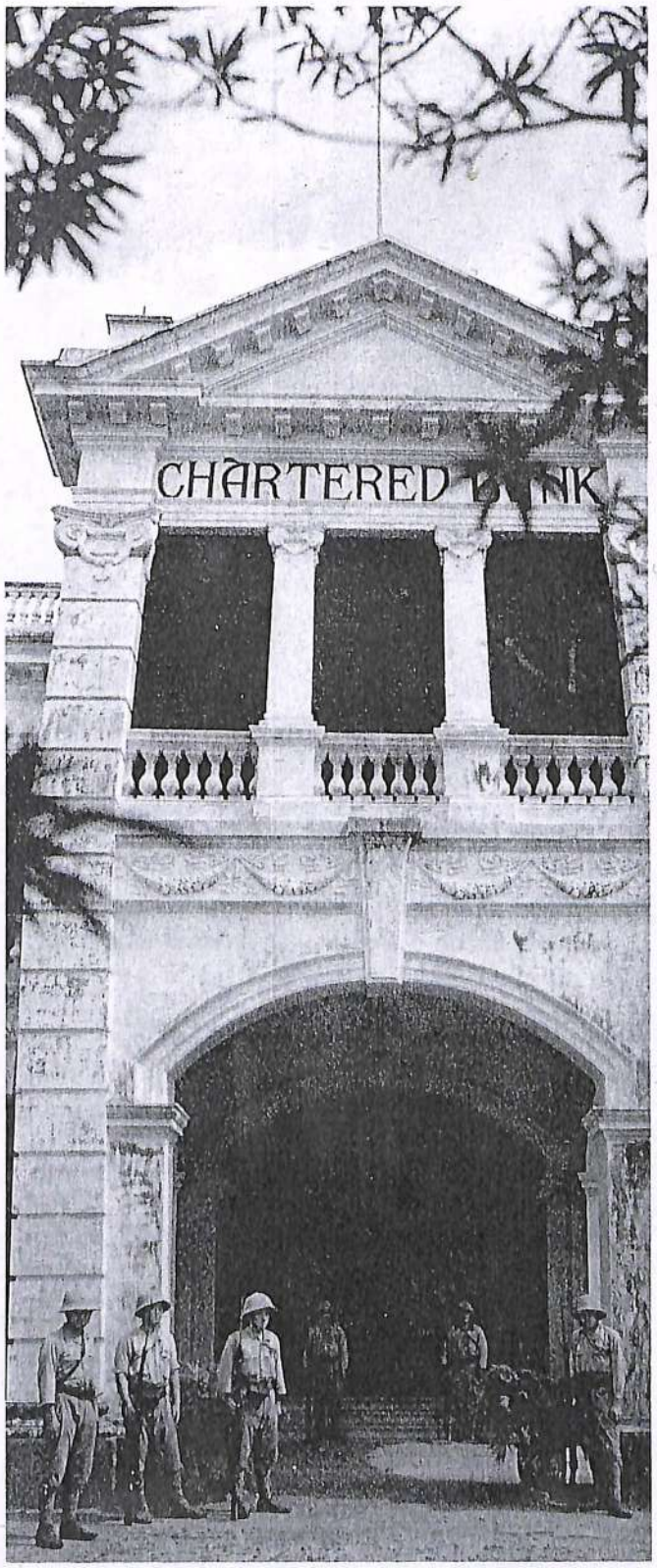
対仏独立闘争を呼びかけた。仏印の被支配者の蜂起が，仏印軍を釘づけにすることを狙ったものであった。同時に単独では仏印軍を屈服させるだけの実力はないタイは，日，独，英，米のどの国であれ，フランスに圧力を加えてくれることを歓迎し，日本に対しては，タイは日本寄りと思わせ，英に対しては親英的中立と思わせるように積極的に働きかけた。

タイ仏印紛争と日本の調停

武力南進のためにタイを抱きこみたい日本は，タイの宿望である失地回復問題をそのために利用することを40年８月から検討していたが，タイの「接近」に11月には口頭ながら密約が成立したと理解した。

40年11月28日に，仏印機のタイ爆撃でタイ仏印紛争は本格化し，明けて41年に入ると，タイ陸軍もカンボジア，ラオスに侵攻した。タイ軍は陸戦では健闘したが，海戦では１月17日朝，チャーン島の戦いで海軍力の半分を失った。潮時と見た日本は，タイ・フランス双方に調停を申し入れた。タイは直ちに応じ，フランスは日本の圧力で渋々受け入れた。イギリスのタイ仏印紛争介入を排除して，日本を調停者として両者に認めさせたことは，武力を背景とした日本の外交的勝利であった。１月31日，サイゴンに停泊中の日本軍艦名取上で休戦協定が調印された。

41年１月30日決定の『対仏印，泰施策要綱』に示されているように調停における日本の関心は，これを契機としてタイを日本主導の「大東亜共栄圏」に参加させ，イギリス攻撃の利便のためにタイに軍事的経済的協力をさせることであった。東京における調停会議では，日本はタイにメコン河西岸，およびカンボジア西部の失地を回復をさせる，というタイにとっては満足できる案を示し，渋るフランスをなだめすかして，



日本軍による米英企業の接収　タイ国内で経済活動を行なっていたイギリス・アメリカ系の企業は，次つぎに接収され，活動を停止した。写真はバンコクのチャータード銀行を接収し，警備する日本軍。1941年12月12日。（提供／毎日新聞社）

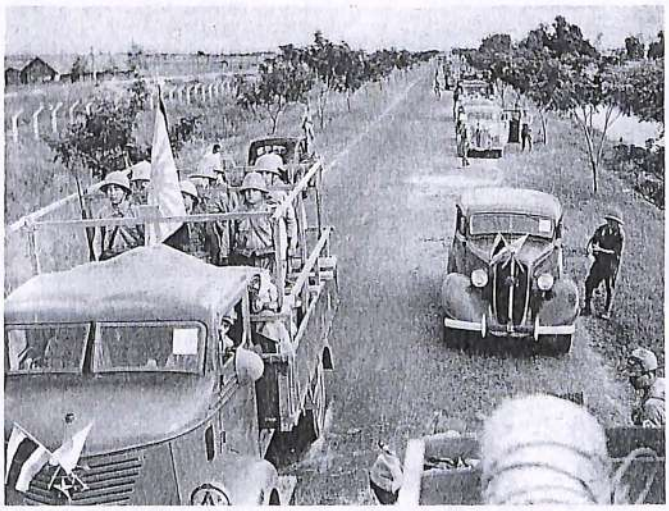
2か月の交渉の後，3月11日に調停条項の仮調印にこぎつけた。一部とは言え失地を回復し，国民的宿願の実現に成功したピブーンの威信は高まった。彼は回復した一県に自分の名を冠し，少将から一足飛びに元帥に昇格した。ピブーンは大国フランスに勝利したことを記念して，バンコクに戦勝記念塔を建設した。戦勝記念塔は40年の革命記念日にオープンした民主記念塔とともに，今日に至るまでバンコクの2大モニュメントを成している。

調停交渉の過程で日本は，2月22日に直接ピブーンに軍事協定を切り出した。日本は前年11月の口頭での「密約」の文書化を求めたのである。しかし，調停成功後に話し合いたいと上手にかわされて，結局そのままとなってしまった。日本側がそれ以上に積極的に進めなかった理由は，この頃からイギリスとの戦争は，アメリカの参戦を必然的に招くという見方が支配的になり，イギリスのみを相手とする楽観的武力南進論が後退したからであり，またタイ経済のイギリス依存の大きさが再認識され，まずこの問題についての解決策を示さなければ，タイを日本寄りにすることは困難であると認識されたからでもあった。

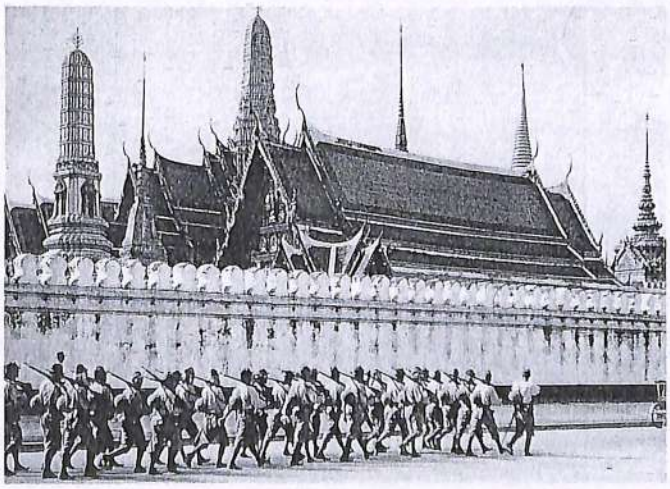
日本の武力南進論に対して

41年半ばに独ソ戦が始まると，日本の武力南進論は再び勢いづいた。7月2日の御前会議は，対英米戦争を辞せずと決定した。7月末に日本軍の南部仏印進駐が開始された。南部仏印にはカンボジアも含まれていた。タイの隣国であるカンボジアにまで日本軍が進出し，タイをはさんでイギリス領を窺うようになると，タイの独立維持は風前の灯となった。

タイ政府は9月2日に世界平和を祈念するアピールを発表した。9月11日にはピブーン政権は「戦時におけるタイ人の義務を定める法律」を施行して，タイ人はタイ国を不法に侵す敵にあらゆる方法で抗戦すべし，抗することが不可能の場合にも，敵を妨害することに努めるべし，敵を利する器具，物資，建造物などは誰が所有者であるかを問わず破壊すべし

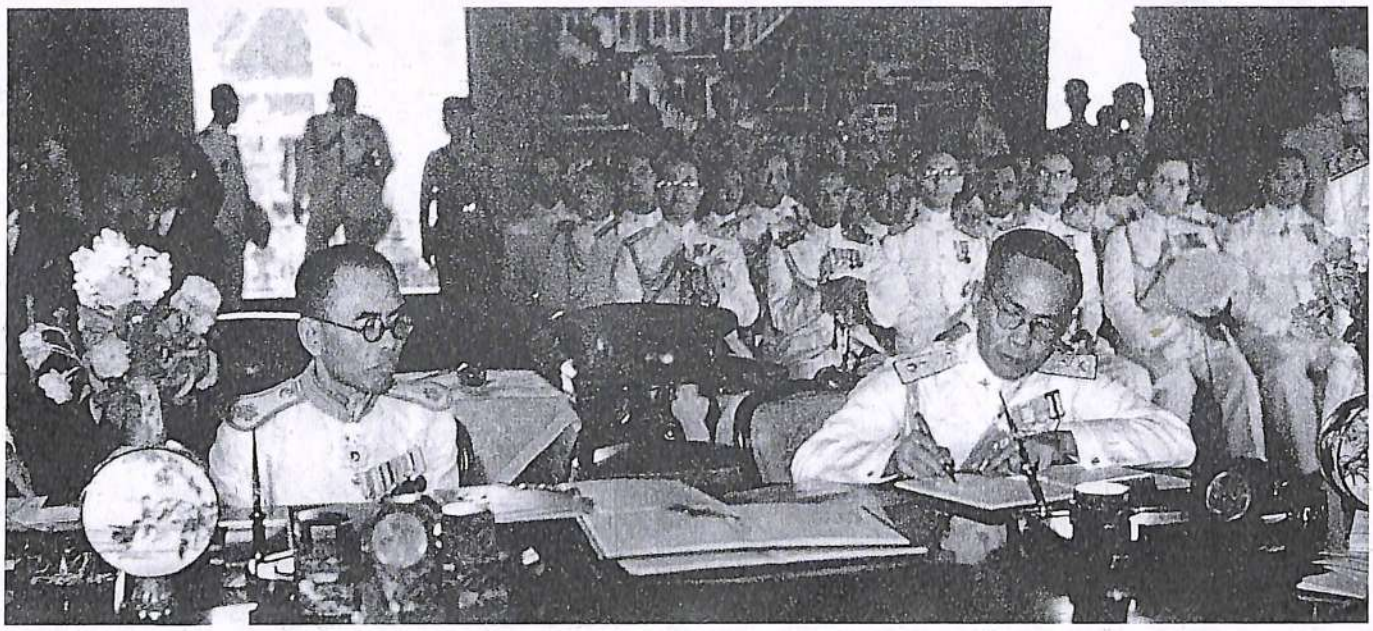


A



B

A　バンコクをめざして進む近衛歩兵第5連隊 1941年12月9日，ドーンムアン街道。
B　バンコク市内に入り，ワット・プラケオ寺院前を行く日本軍　1941年12月22日，市街の入り口では在留邦人が日の丸を手に迎えたが，タイ人は外国軍の進駐を歓迎せず，日本への反感は強かった。（A B提供／毎日新聞社）



と定めた。義務違反者には死刑・終身刑の重罰を規定した。同時に政府は次の声明を発表した。タイ民族は厳正に中立を守り，他の国を侵害することはない。故に同様の態度を他の国もタイにとってほしい。もし他国に侵略された場合，それがどのような大国であろうとも，タイ民族は屈従せず，自由と独立のために最後の一人まで戦い，民族の名を歴史に残す方を選ぶ，と。外国に屈従したくはないというタイ人の当然すぎる気持を駐タイ日本陸軍武官も理解を示し，「泰国は完全なる自主独立国家たることを欲し，第二の満州国や汪政権たることを欲せざることは過去も現在も変化なし。又何れの国家とも同様に泰国も亦自己保全と自己発展とを欲求しあることは過去も現在も変化なし」と10月24日に大本営に電報している。彼は今後のタイの態度を決める要素は，タイの国益，世界情勢，日英の力関係であろうと分析した。

日本軍の占領・タイの抗戦と協力

41年12月8日に日本が起こした戦争を，タイでは当時の呼称通り「大東亜戦争」（ソンクラーム・マハー・エーチヤ・ブラパー）と呼んでいる。この日早朝，日本軍は海からは南タイ6か所とバンコク近くに上陸，陸からはカンボジア国境から中部タイに進駐した。政府の焦土抗戦の呼びかけに応じて南タイでは軍，警察，青年の自警組織（ユワチョン・ターハーン）が勇敢に抗戦し，タイ人に183 名の死者，上陸した日本軍は約141 名の死者を出した。（なお，「大東亜戦争」を通じてのタイ軍人の戦死・戦病死者数は計5957名）

日本軍がタイ領通過交渉を開始した12月7日の夜，ピブーン首相は抗日作戦検討のため幕僚をともなってカンボジア国境にあった。8日朝バンコクに帰った彼は，日本の圧力に屈して「日本国軍隊のタイ国領域通過に関する協定」締結に応じた。

カンボジアからの日本陸軍の第15軍下の近衛師団は，9日午後にはバンコクに入った。同時に中部タイの主要地点にも進攻した。15軍の使命はタイの安定を確保して，マレー方面作戦を容易にすること，並びにビルマ攻略の準備であった。15軍司令官の飯田祥二郎中将も，9日15時にバンコクのドーンムアン空港に到着し，その日のうちにピブーン首相兼国軍最高司令官と会見した。15軍の任務である「タイの安定確保」とは，実質はタイ軍の抗日的動きを封じるための占領に他ならなかった。15軍はチュラーロンコーン大学に司令部を置いた。10日正午過ぎに，マレー沖海戦でイギリス極東艦隊は，日本機によって壊滅。タイ側が最後に期待していたイギリス軍の支援もあり得ないものとなった。選択の余地をなくしたピブーン首相は，日本の求める「同盟条約仮調印書」に11日に署名した。この時点のタイ側の態度は，抗しがたい圧倒的な力で進攻してきた日本軍を前に，取りあえず自存のために緊急避難したものと言うことができる。それはピブーンを補佐した有力官吏が日本を「山上から突然落下してきた大岩」にたとえ，これに逆らって押し潰され，タイの独立を奪われるようなことをするなと関係官吏に注意していることにも示される。

しかし，12月21日に「日本国タイ国間同盟条約および付属秘密了解事項」が調印される頃にはピブーンは豹変していた。同盟条約は，タイ国は日本を「あらゆる政治的，経済的及軍事的方法に依り」支援すべきことを定めたが，その見返りとして付属秘密了解事項には「日本国はタイ国の失地恢復の要

日タイ同盟条約の締結　1941年12月21日，バンコクのワット・プラケオ寺院で調印するピブーン首相（右）と坪上大使。（提供／毎日新聞社）

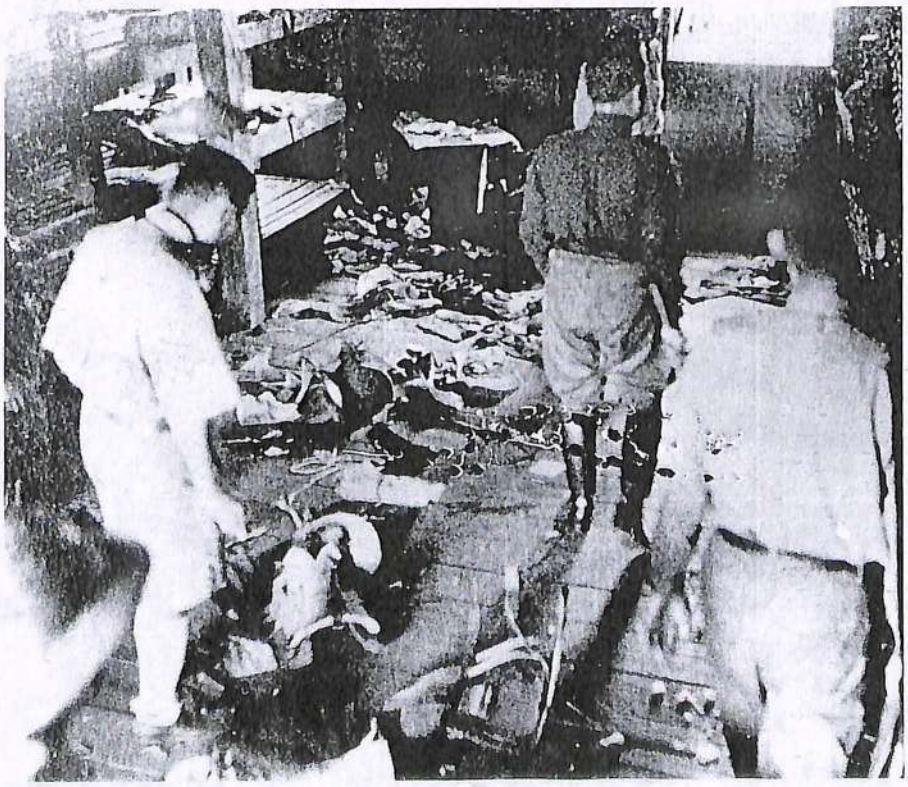
求の実現に協力すべし」と規定されていた。ピブーンは枢軸国優勢という戦況に便乗して日本に協力することで，イギリスに失った失地なども回復し，タイを東南アジアにおける中心的大国にすることを夢想するように変わっていた。ピブーンは日本軍のマラヤ，ビルマ進攻のため積極的に協力した。タイを通過する日本軍が必要とする物資供給，鉄道輸送における全面的な協力，さらにはビルマ進攻のための道路建設など。彼は12月22日には，蒋介石宛に電報を発し，アジア人の共通利益のために対日和平を呼びかけた。「アジア人のアジア」を唱える日本軍は，在タイの華僑，ビルマ人，インド人などの集会を組織して対日協力を表明させた。在タイ・インド人のインド独立連盟の支部活動や在タイ・ビルマ人の独立義勇軍参加者募集や訓練をタイ政府も支援した。42年1月3日には，同盟条約に基づいて「日泰協同作戦に関する協定」が調印された。

42年1月25日には，タイ政府は自発的に英米に宣戦を布告した。ピブーン首相はイギリス領ビルマのシャン州への外征を熱望した。しかし，戦勝に驕った日本は容易に認めず，先ず開戦時に日本軍に抵抗し，日本将兵を戦死させたことを謝罪するように求めた。42年5月5日に「日泰両軍協同作戦に関する追加協定」が調印され，タイ軍のシャン州外征を日本軍は承認した。タイの外征軍は，6月にはシャン州から重慶軍を駆逐し，同地の占領に成功するが，日本側はタイ軍占領地域についてさえ，タイ領土への帰属を認めるか否か，はっきりした態度表明をしなかった。

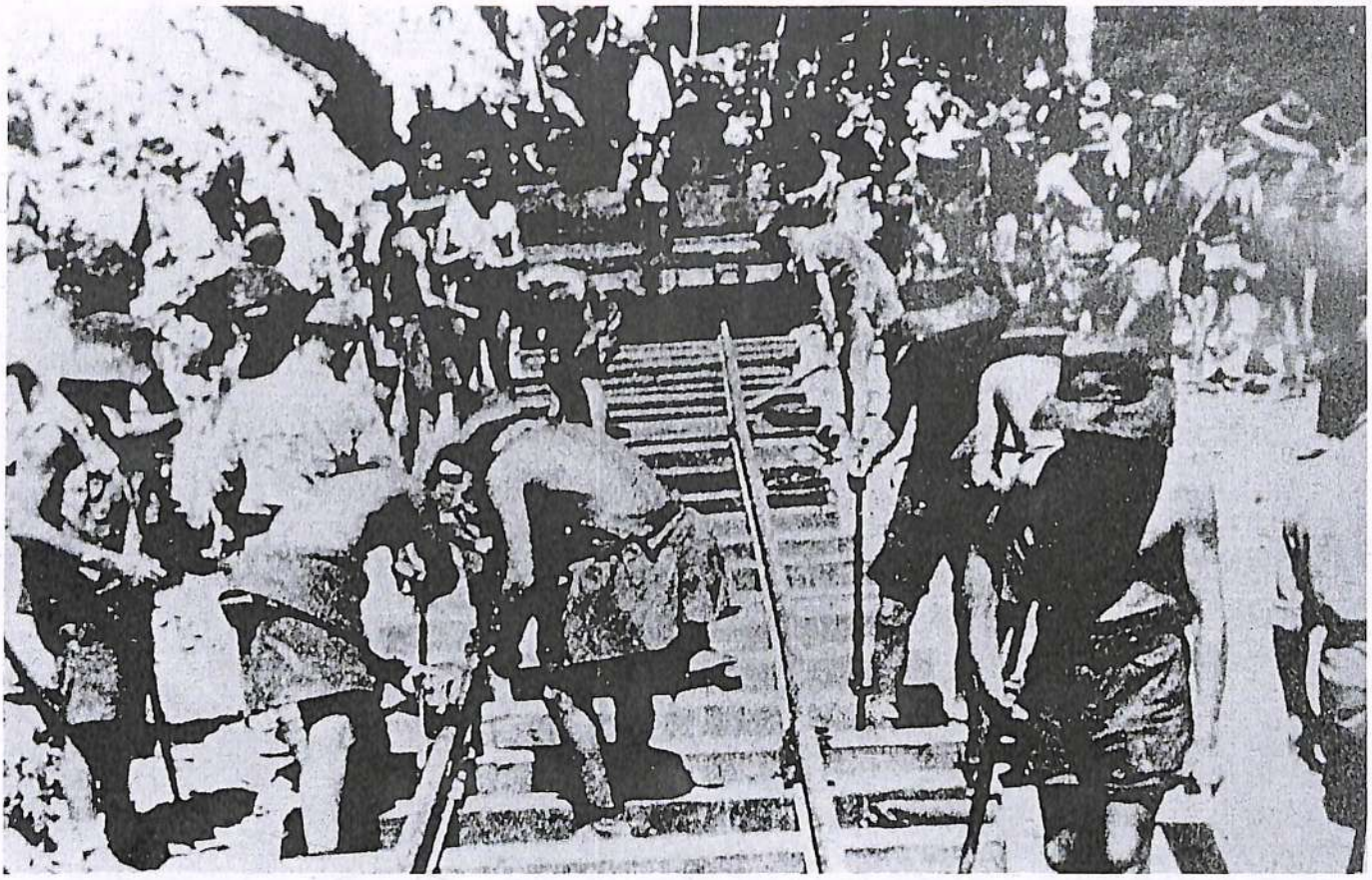
日本軍の経済政策ー資源・労働力の収奪

日本はタイ米を安価に獲得するために，42年4月にタイ・バーツを大幅に切り下げさせ，開戦当初，日本軍がタイ国内で接収した連合国側の資産（敵産という），たとえば船舶やイギリス系企業の所有であったチーク材などを一方的に利用してタイ側の返還要求に応じず，またタイ側には使い道のない特別円と引換えに膨大なタイ・バーツを日本軍に提供させた。日本軍はタイ側に提供させたバーツをタイでの日本軍の支出，たとえば在タイ日本軍の食料費，日本軍の道路，飛行場，泰緬鉄道などの建設経費（資材や雇用した労働者の賃金など）として用い，戦時で物不足状態にある狭小なタイ市場に多額のバーツを投じたために，タイ経済は急速なインフレに見舞われた。

在タイ日本軍は，当初進駐した15軍が42年3月にビルマに去り，その後は泰緬鉄道建設のための鉄道連隊を除けば，バンコク



開戦当初日本軍に荒らされた南タイ・パッタニーのタイ軍人の家　1941年12月。



のルンピニー公園に駐屯した小部隊のみとなった。しかし，ビルマなどに移動する部隊がしばしばタイを通過した。

幻想から対日不信へ

ピブーンが，日本の力に頼ってタイを対外的に膨張させようという幻想から醒めたのは，42年後半のことである。その頃は，日本軍に緒戦の戦勝酔いの余韻が未だ残っていた。タイ指導者を失望させた主原因は，日本が驕ってタイを軽視していたからである。日本の負け戦になる以前の42年後半よりタイ側は対日不信を強め，日本離れを起こしたのであった。積極的に対日協力をする理由も意欲も失なったタイ側は，日タイ同盟条約を根拠にした日本の協力要求に対して，面従腹背の態度で最小限の協力をするだけとなった。嫌々ながらでもタイが最小限の協力をした理由は，軍事的に日本に太刀打ちできないという対日恐怖からであった。タイは日本のタイ内部への介入を警戒して防御壁をつくり，対日不信からくる守りの姿勢に終始するようになったのである。ピブーンは日本をタイ国力の対外的拡大膨張に利用しようと考えただけであり，当初よりタイ内部のことについては日本の介入を許さないという態度は一貫していた。タイ国内の政治，経済，文化などが日本の影響下や支配下に置かれることは，彼の最も警戒したことであった。

42年5月13日に各省庁局に，次いで県と郡に対外関係委員会を設置させ，それぞれに管轄事項や管轄地域において日本人がタイに不利益を与える行為（たとえばタイ人用の衣料生産に不可欠な綿花を日本商人が横取り的に買いつける商行為とか，日本人の不法行為とか）をしていないかを監視させ，そのような行為の防止方法を各レベルの会議で講じさせるとともに，首相に報告させている。

広がる反日感情

日本はタイとの間に42年10月28日，文化協定を締結したが，日本文化，なかでも日本語がタイに広まることを恐れて，ピブーンは官吏に日本語学習をしないように指導した。また，日本側が文化協定により，タイで日本の文化普及宣伝を行なうことにも消極的に抵抗した。

生の日本軍人と日常的に接する庶民間では，対日不満が爆発することもあった。42年12月18日夜には，泰緬鉄道のタイ側の始点であるバーンポーンの宿営地の寺院境内で，タイの仏教文化に無知な日本兵が上座部仏教の沙弥（しゃみ）を殴ったことから，タイ人鉄道建設労働者が日本兵を襲撃して2人を殺害し，また同時に同地のタイ警察署前で，他所から事

泰緬鉄道の建設　建設工事に従事するイギリス・オーストラリアの捕虜たち。

件取締のために派遣されてきた日本兵のトラックを警察官が銃撃し，4人の日本将兵が死亡するというバーンポーン事件が生じたが，この事件は，その代表的な事例である。タイの文化に対する日本兵の無知や，また，あたかもタイ人を占領地の住民のごとく扱う横暴さなどが事件の原因であった。

泰緬鉄道の建設

なお，415kmに上るタイ・ビルマ間の泰緬鉄道の建設は，42年10月1日に正式に始まり，43年10月25日に完成したが，1200万人日の労働力を費やした。平均すれば毎日3万人余りの労働者が働いていたことになる。日本軍の鉄道連隊の指揮監督の下に日本兵に加え，白人捕虜，日本の占領地のジャワやマレーから連行した労働者（華僑を含む），日本軍がタイ政府に募集を依頼して雇用した労働者などが用いられた。最後のタイプの労働者は，タイ政府がタイの中華総商会に募集任務を転嫁して，中華総商会が募集した中国系の人々である。食糧補給や医療施設も十分でない状態で，山中の工事を最短期間で完成させようとしたため，苛酷な過重労働が強制され，かつ不運にも数年周期でタイ・ビルマを襲ってくるコレラの発生期とも重なったため多数の死者を出した。「死の鉄道」という悪名を残し，捕虜の管理者多数が戦争犯罪の責任を問われた。

大東亜会議をボイコット

43年半ばから戦況が日本の守勢となると，タイ側の日本離れは加速され，6月10日には，ピブーン首相は首都を中北部タイのペッチャブーンに移転することを決意し，その実行を開始した。日本軍から離れたところに政府を置くことで行動の自由を得ようという目論見からであった。7月4日に東条首相がタイの対日協力を確保し，増大させるために訪タイして，タイ軍が占領中のサルウィン河東岸のシャン2州に加え，1909年にイギリスに失ったマライの4州をタイに帰属させることを約束した。しかし，すでに遅きに失して，その効果は一時的なものに過ぎなかった。9月にイタリアのバドリオ政権が連合国側に投降すると，ピブーン首相もバドリオ同様のことをするのではないかという疑念を日本側にもたせた。その疑念は日本政府が起死回生の最重要国策として，大東亜共栄圏内の各国首脳を招いて11月に開催した大東亜会議にピブ

連合軍捕虜の墓　（撮影／三留理男）

ーン首相が頑なに出席を拒んだことでさらに増大した。43年12月には，バンコクへの英米軍の空襲が本格的に始まった。44年に入ると，ピブーン首相は1月末には，シャン州国境から重慶側の中国軍との連絡を始めた。中国軍に内応して，日本軍への抗戦を行なおうとする寝返り工作であった。イギリス軍が反攻を開始してビルマ方面の戦況が悪化し，タイの国内情勢も不安定になると，日本軍は在タイ戦力を増加させた。

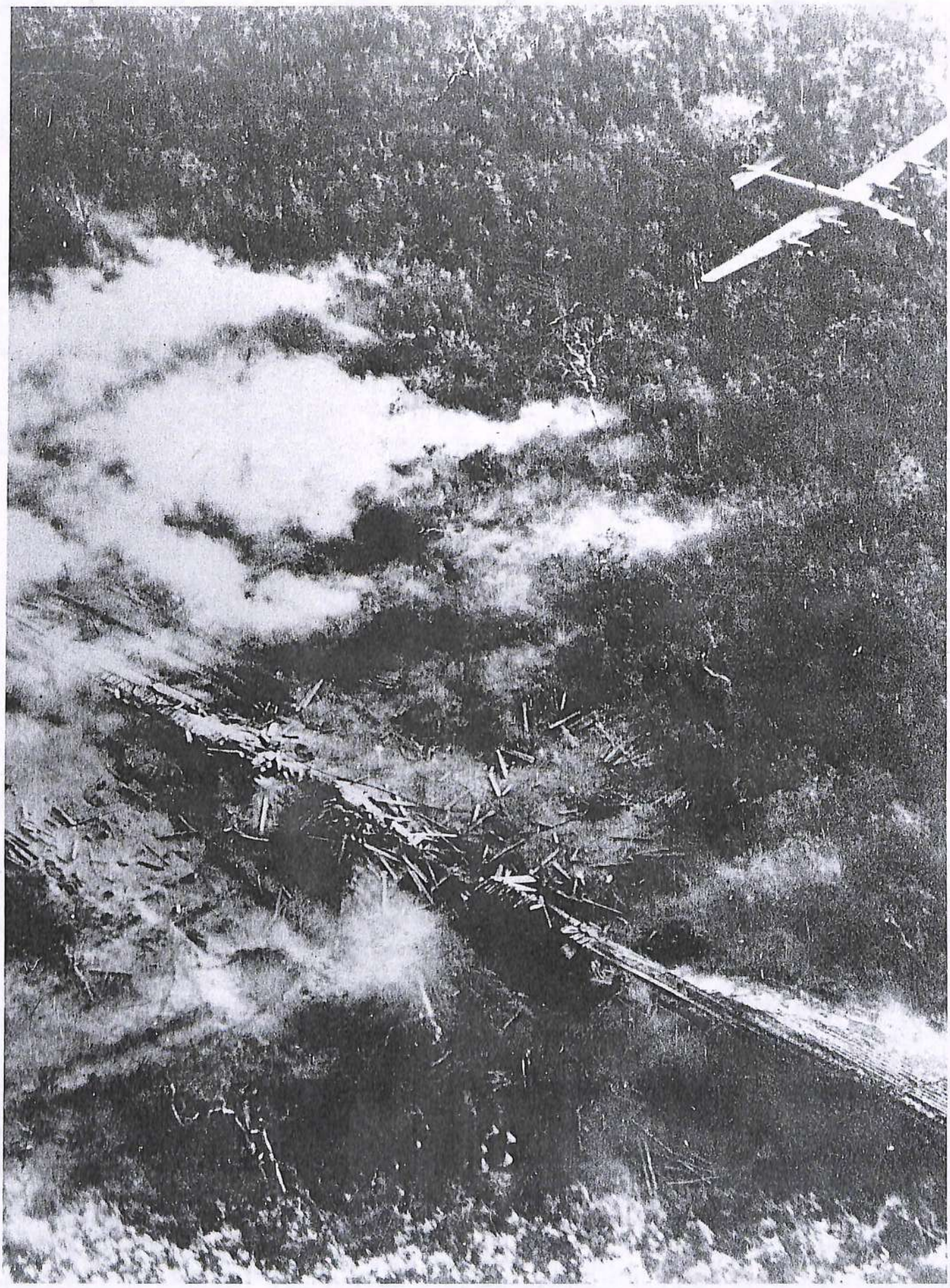
バーンポーン事件に象徴される対日感情悪化のなかで，日本軍は43年1月に，在タイ部隊を監督する駐屯軍司令部（中村明人司令官）を設置した。43年後半，戦況悪化とタイ指導者の動揺という状況は，日本軍をして44年1月1日に独混第29旅団をバンコクで編成させることになった。44年12月20日にタイ駐屯軍は，野戦軍に衣がえされて第39軍となった。さらに45年7月16日には第18方面軍へと発展した。日本の敗戦時には，在タイ日本軍は，ビルマから後退してきた部隊などをも加えて10万人を超えていた。

41年12月8日の日本軍タイ進攻後，対日協力の是非をめぐって閣僚は分裂した。32年立憲革命に決起した人民党の文官派リーダーであり，ピブーン首相にならぶ有力閣僚であったプリーディー蔵相は，ピブーンのオポチュニスト的対日協力への豹変に批判的であった。連合国側の経済実力を熟知するプリーディーは，枢軸国は最終的には生産能力の高い連合国に敗れると確信していた。ピブーンは目先の利害に囚われて，長期的国益を見失っていると彼は考えた。ピブーンは閣内統一のためプリーディーを閣外に放逐して，摂政の一人に祭り上げた。摂政の地位に就任したプリーディーは，秘かに連合国側との連絡の道を求めた。プリーディーの命で43年7月14日にバンコクを出発し，重慶にたどり着いたサグアン一行が連合国側，および在英米のタイ人抗日グループとの連絡に成功した。

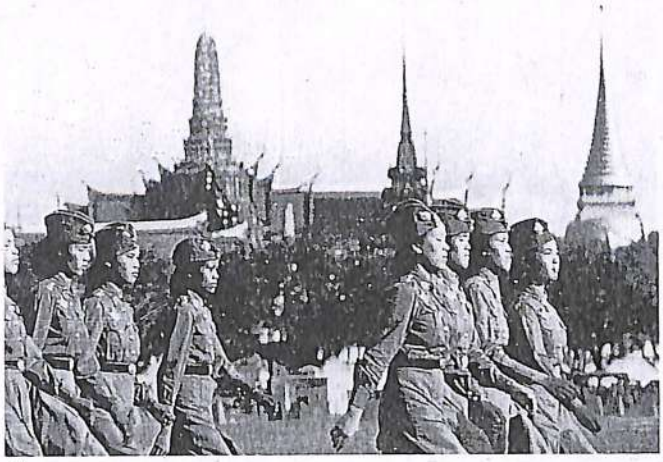
「自由タイ運動」

アメリカでは日本軍のタイ進攻直後から，公使のセーニー・プラモートが中心となって公使館員・留学生から成る抗日運動を組織し，イギリスでも同様な運動が組織された。タイ内外のこれらの運動は，「自由タイ運動」と呼ばれる。44年3月15日の夜間に，英軍機から英軍によって訓練された3名のタイ人自由タイ員がタイ国内に落下傘によって降下したのを手始めに，英米軍によって訓練された自由タイ員が次々にタイに潜入した。

プリーディー摂政の国会議員への影響力は増大し，国会は44年7月にピブーン首相が提出した緊急勅令の法律化を拒否した。国会は事実上ピブーン政権への不信任を表明したのである。ピブーン首相は形式上辞表を提出した。彼はこれまでもそうであったように，武力で議員たちを圧迫して再任されることを期待していた。しかし，日本軍の中村司令官がピブーンの武力行使を牽制したことも一因となって，ピブーンは再任工作に失敗。プリーディー摂政の推す人民党文民派のクアン・アパイウォンが首相に任じられた。ピブーン首相時代末期に，日タイ関係は極度に険悪化し，さらに政変の最中である7月30日に，南タイのラノーン市で日本の駐屯部隊が，誤解から同市の軍・警察を武装解除し，タイ側に19人の死者を出したラノーン事件が発生した。クアンはこのような険悪な関係をつづけることは，日本軍のタイ武力処理を招きかねず，タイの独立維持のためには，かえってマイナスであると判断し，日本に協力できることは，ピブーン時代のようなサボタージュはせずに協力する方針に転換した。抗日の自由タイ政権は，表面的にはピブーン政権以上の親日政策を採った



連合軍の空爆で破壊した木橋　1945年2月22日，タンビュザヤット（現ビルマ領）の南16kmにあった60m余の木橋。

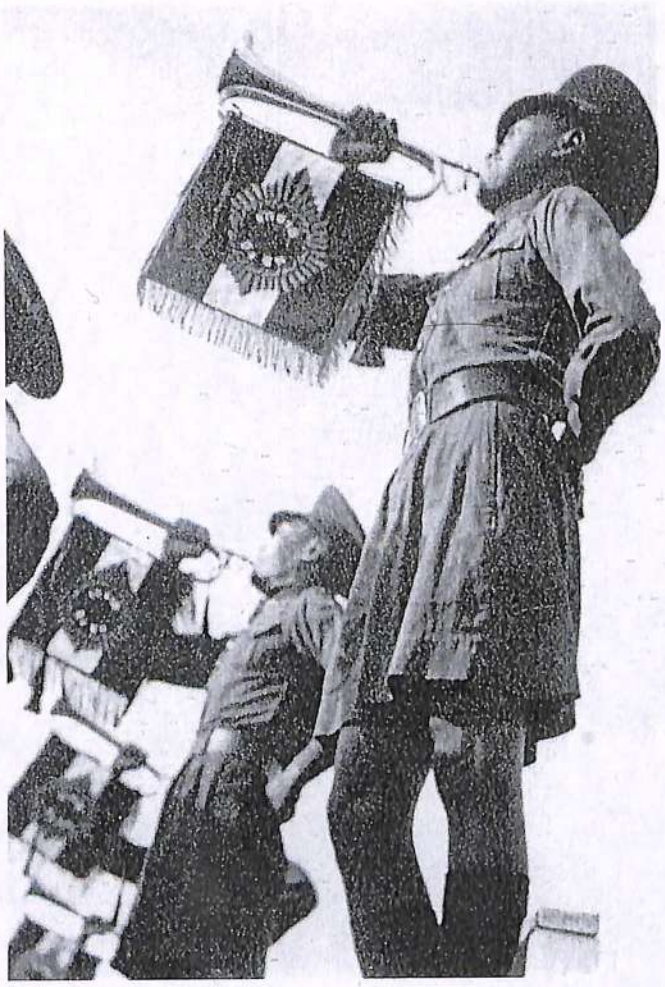


A

のである。

一方，裏面ではプリーディーをトップとする自由タイ運動は，内務省の県知事ー郡長ー村長ー村民ラインや文部省の県視学官ー教員ラインを通じて国内の組織を全国に急速に拡大させた。45年に入ると，英米軍人もタイ国内各地に建設された自由タイキャンプに潜入し，自由タイ組織に加わった住民に軍事訓練を施した。また，自由タイが建設した秘密飛行場を利用して英米軍によって武器も援助された。秘密飛行場は空挺部隊の侵入を容易にする。日本軍は45年６月に入ると，本格的に秘密飛行場の調査を開始した。また同時にタイ軍の日本軍への攻撃に備えてバンコク市内にも陣地を構築した。イギリスのマラヤ奪還作戦に呼応して，タイ国内に自由タイ部隊や自由タイに加わったタイ正規軍が日本軍に対して戦端を開くのは，時間の問題であった。正に危機一髪であった。幸い，８月15日の日本の敗戦により，両国軍の衝突は免れた。

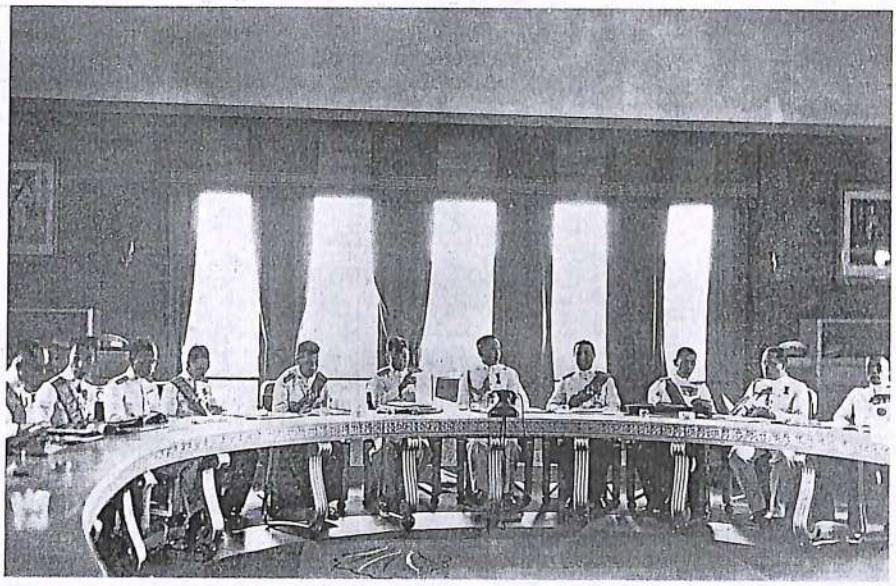
日本敗戦の翌日，８月16日にプリーディー摂政は，タイの対英米宣戦布告が無効であることを宣した平和宣言を発表した。アメリカは自由タイの活動を評価してタイは日本の占領下にあったとしてタイの宣戦に非を問わなかった。９月に日本軍の武装解除とタイの事実上の占領のため，イギリス軍が進駐した。タイに大きな権益をもつイギリスは，アメリカほど簡単にはタイを許さなかった。イギリスは多量のコメを無償で提供することをタイに強制的に合意させた後，46年１月１日に締結した協定で戦争状態を終結した。



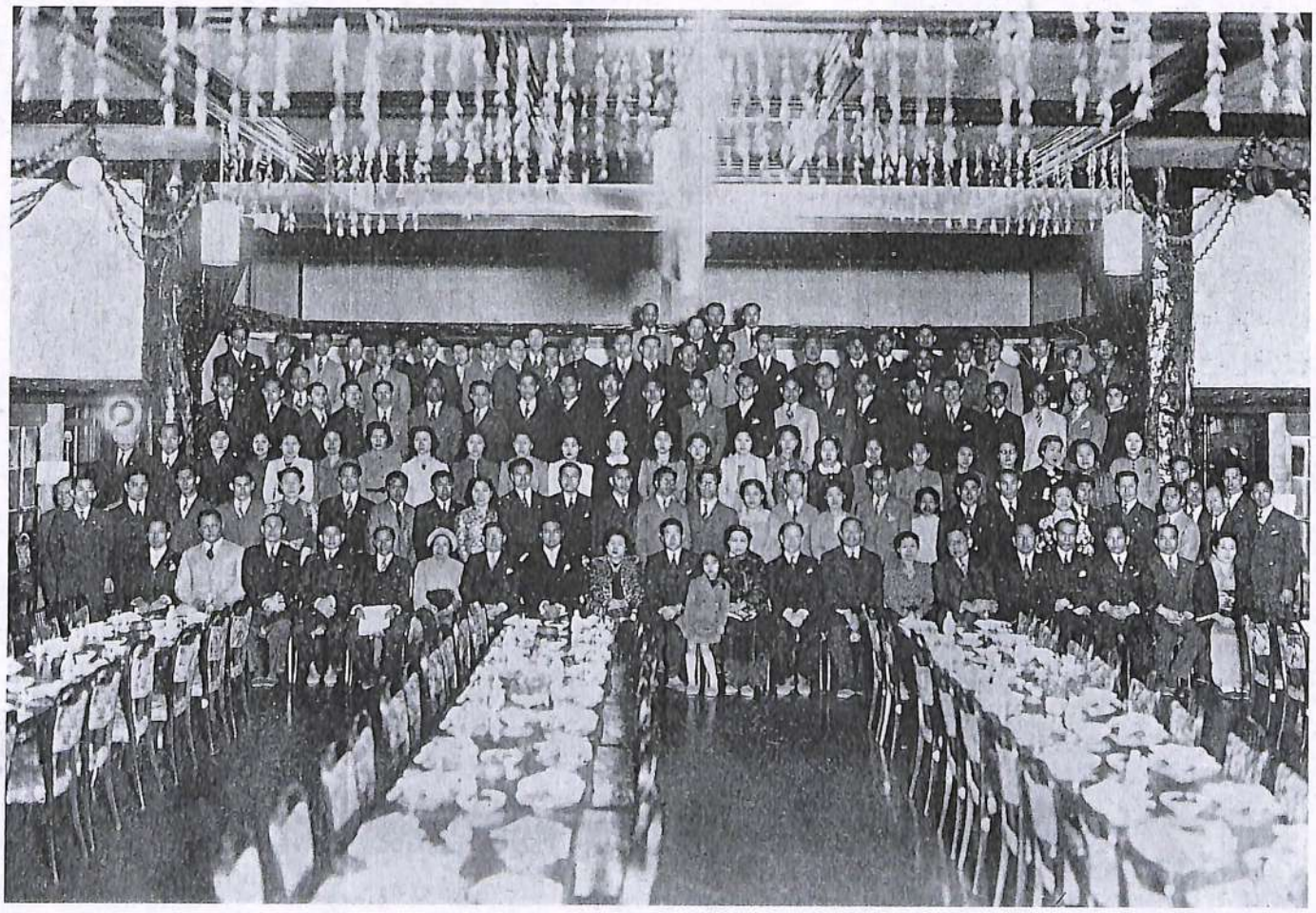
B

A　タイの女子青年運動「ユワナリ」の行進
B　「自由タイ」のラッパ手　（ＡＢ提供／毎日新聞社）

1. 民族意識の高揚と失地回復



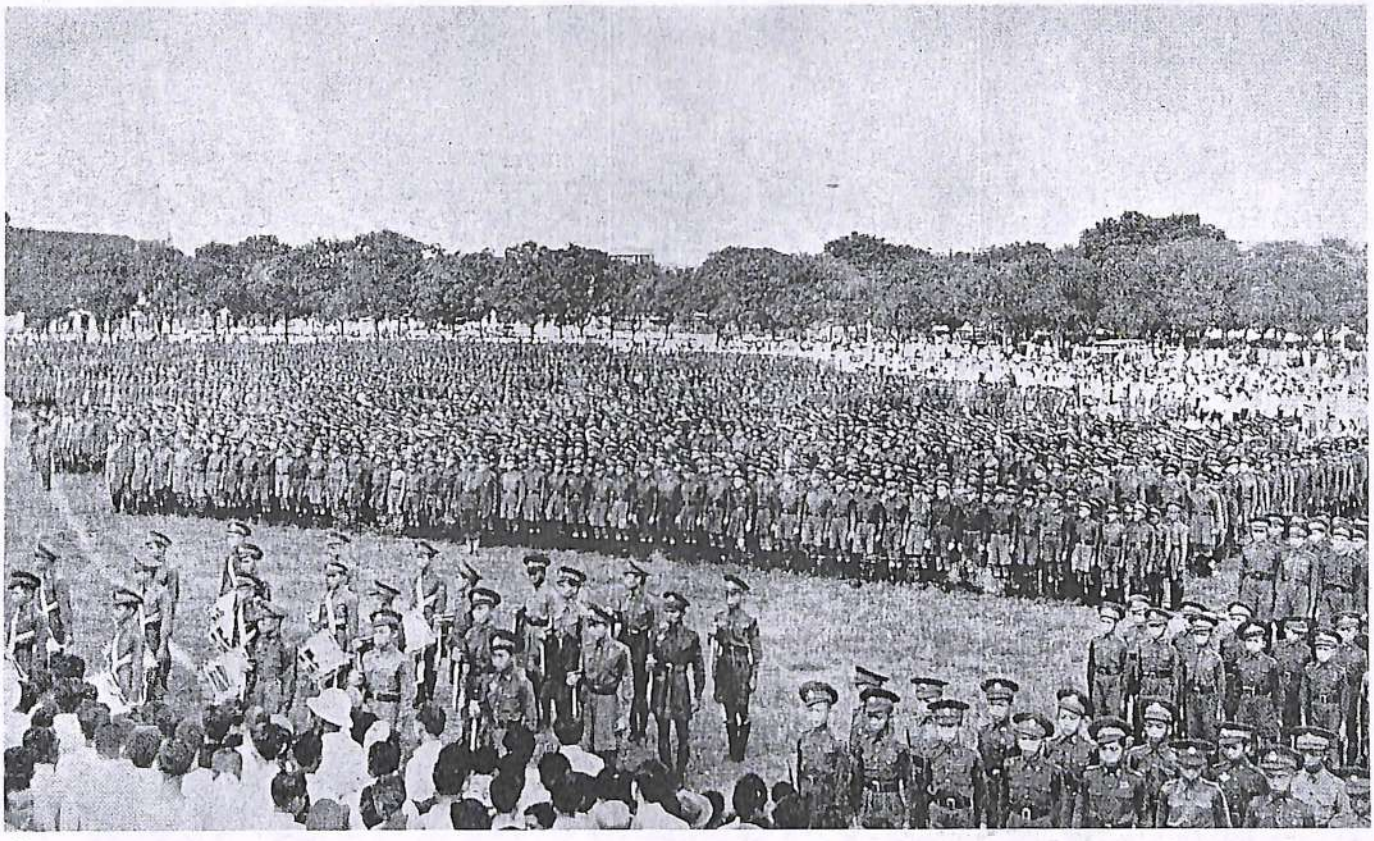
A



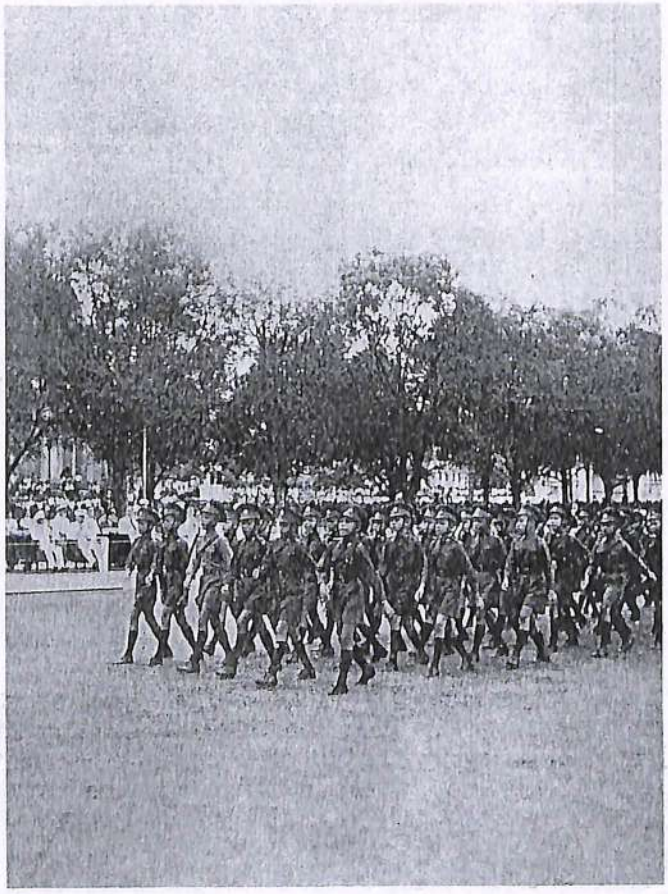
B

A　ピブーン内閣閣議

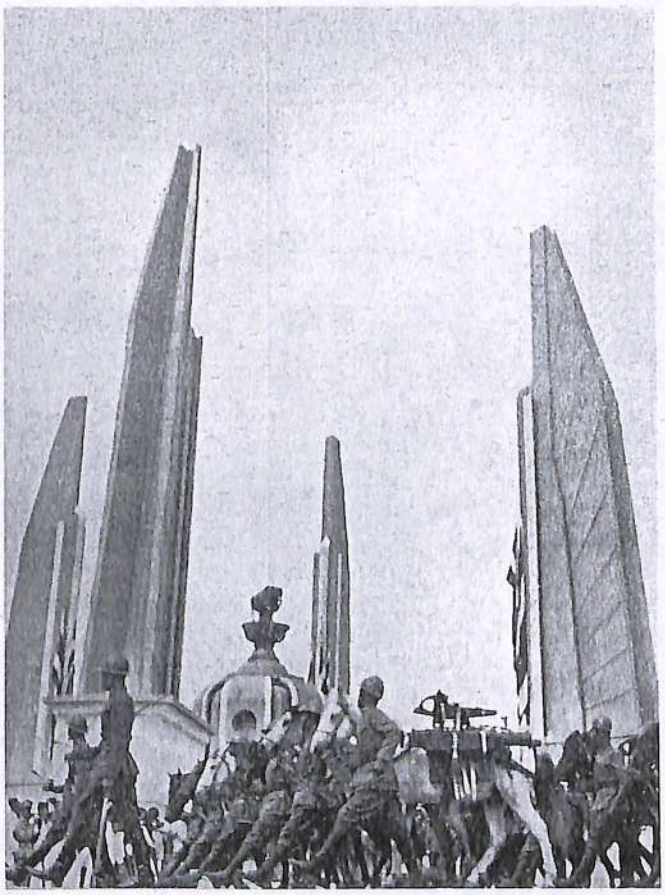
B　在日タイ人留学生　1941年初頭。



C



D

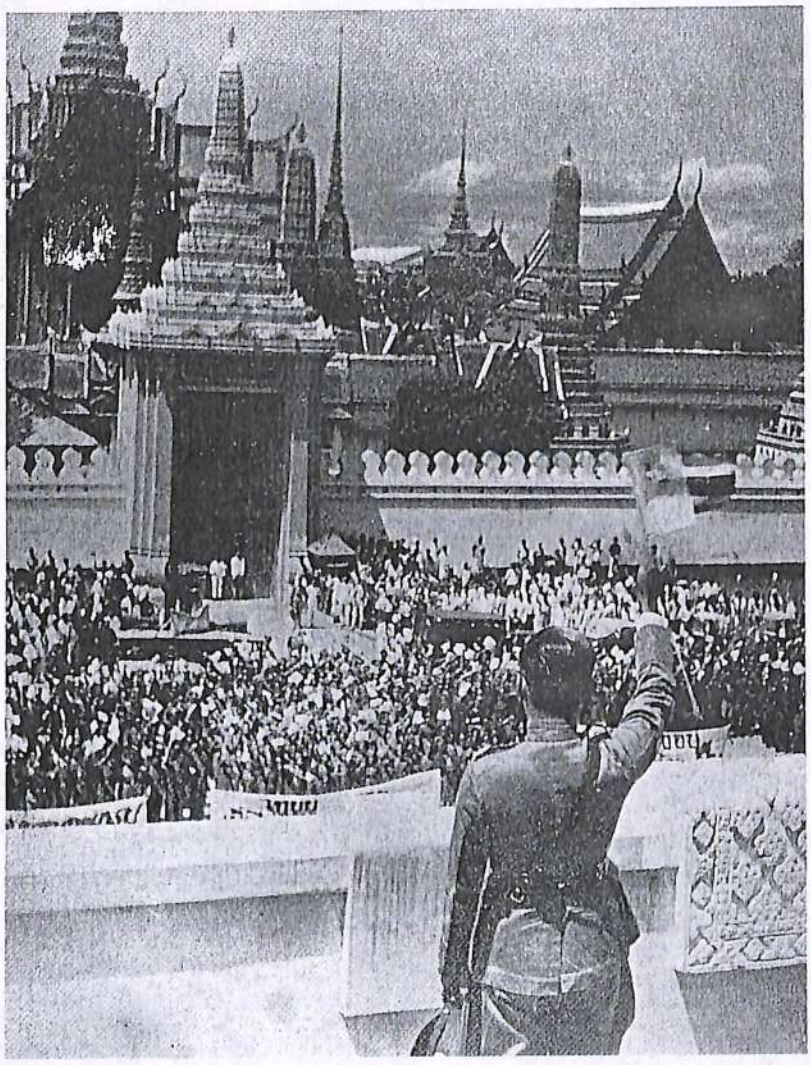


E

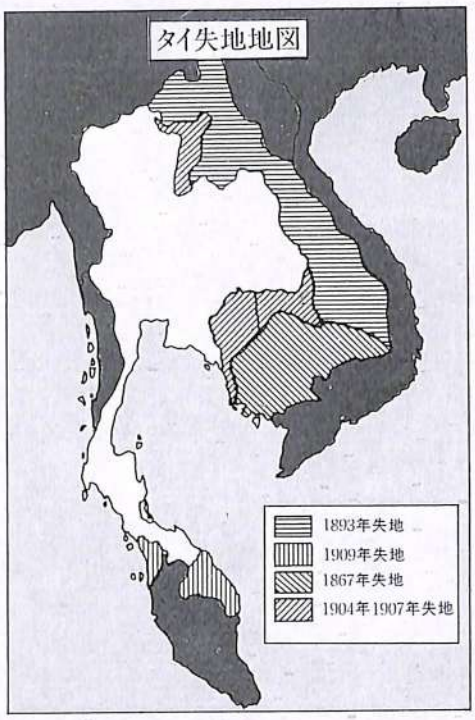
C　ヒットラーユーゲントに倣って組織したユワチョンターハーン（軍青年団）の年次大会 1940年。

D　行進するユワチョンターハーン（軍青年団）1940年6月24日の革命記念日（ナショナル・デー）に際して，25日のパレード。

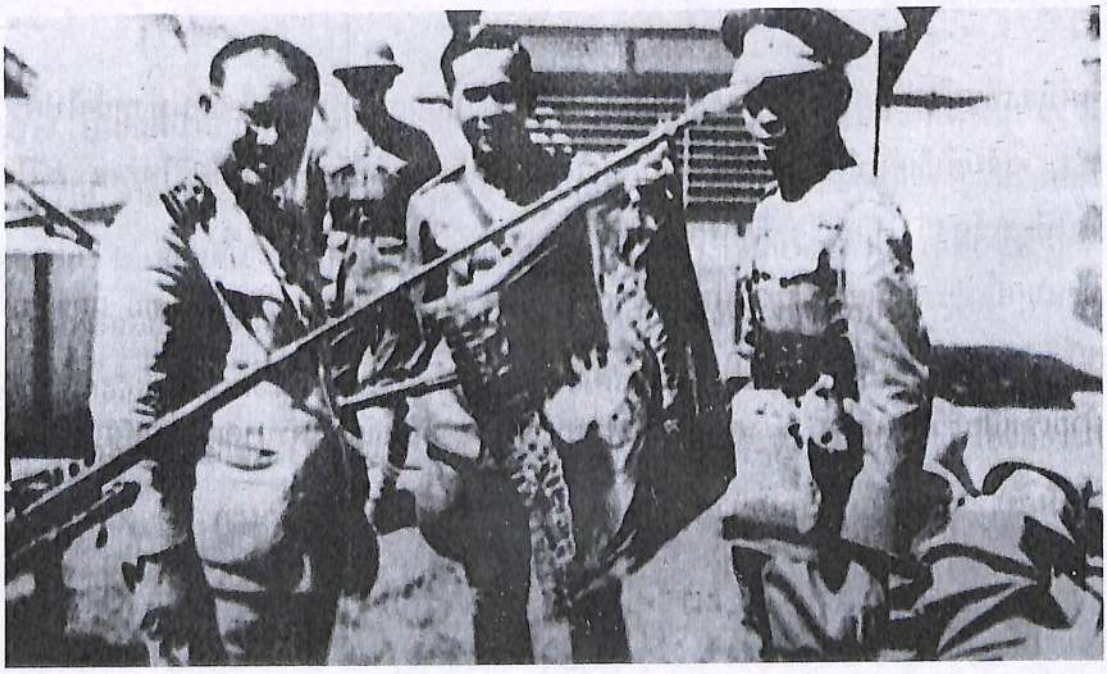
E　タイ陸軍の行進　1940年6月24日，革命記念日にオープンした民主記念塔でパレード。



A



B



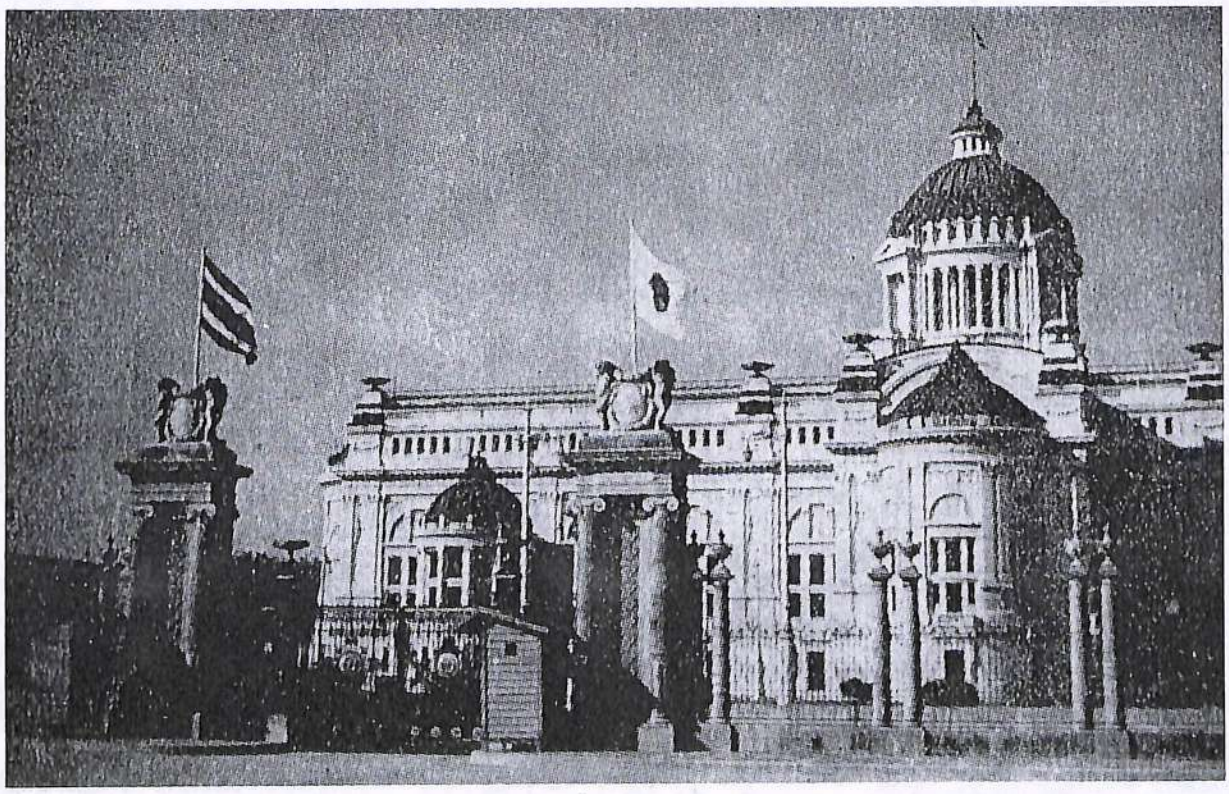
C

A　失地回復を求める学生のデモ行進に応えるピブーン首相　1940年10月8日。

B　タイ仏印紛争時のフランス軍捕虜　1941年1月16日，アランヤプラテートから東北に20kmほど入った仏領インドシナ（カンボジア）での戦闘で投降した仏軍捕虜。

C　捕獲したフランス軍旗　1941年1月16日，仏領インドシナ（カンボジア）の戦闘で捕獲した仏軍旗。

D

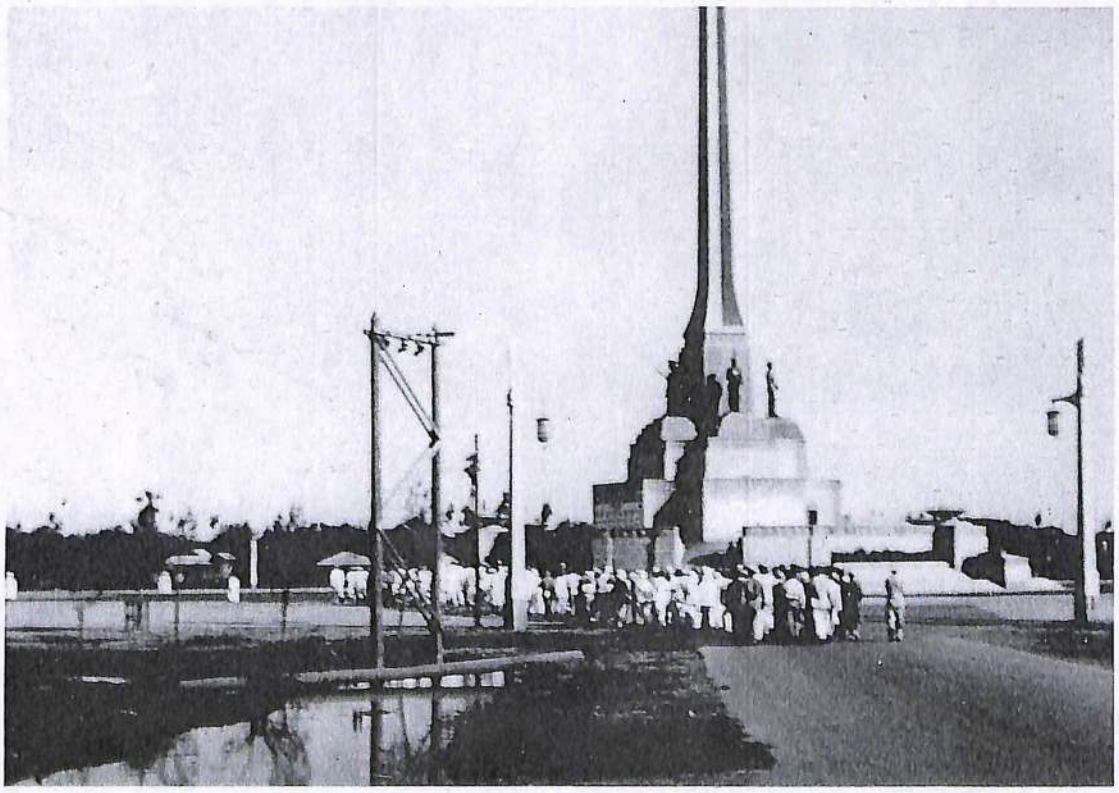


E

D　タイ仏印紛争の休戦協定調印　1941年1月31日，サイゴンに停泊中の日本軍艦名取の上でタイ・仏代表が休戦協定に調印。

E　国会議事堂に翻る日タイ両国旗　1941年3月12～14日，日本のタイ仏印紛争調停により失地の一部を回復したことを感謝して，国会議事堂に日タイ両国旗を掲げる。

A



B

A　調印する日本・タイ・フランスの代表
1941年7月5日，5月9日に東京で署名した「タイ・フランス間平和条約」，日仏および日タイ間の「保障及び政治的了解に関する議定書」の批准書交換。写真は松岡外相（中央），タイのプラヤー・シーセーナー駐日公使（右），フランスのアンリ駐日大使（左）。

B　タイ仏印紛争勝利を記念した戦勝記念塔

2．日本軍のタイ進駐―抵抗と協力

日タイ協会の日本語学校卒業記念写真　1941年。

A

B

C

ＡＢＣ　日本軍の南タイ上陸時にタイの独立を守るため抗戦した軍人，警察官，青年団の記念碑　それぞれチュムポン（A），プラチュアップ（B），ナコンシータマラート（C）に建てられている。(撮影／村嶋)

D

E

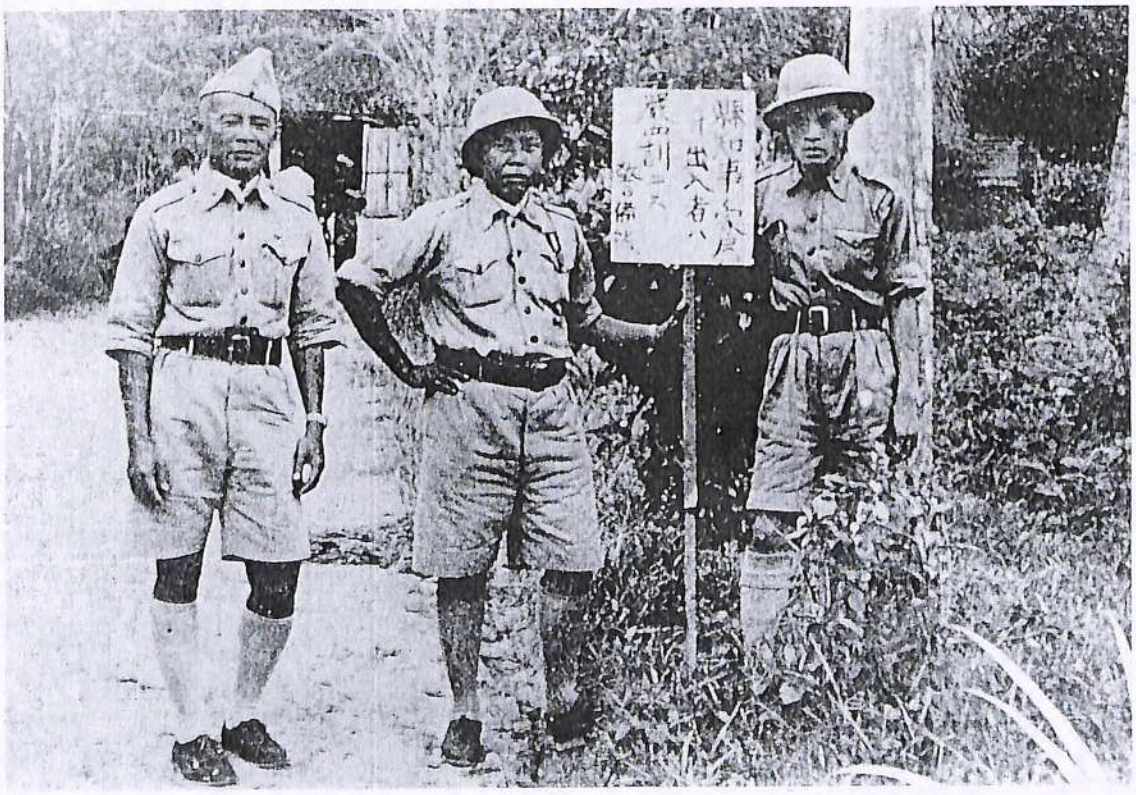
F

D　タイ進駐時に日本軍が作成したポスター

E　バンコク入りする日本軍司令官　1941年12月9日15時，カンボジアよりバンコクのドーンムアン空港に到着した第15軍司令官飯田祥二郎中将と15軍参謀長諫山春樹少将。第15軍の任務は「タイの安定確保」（タイ占領）とビルマ攻略の準備だった。

F　15軍司令部の日本軍参謀たち　指令部はバンコクのチュラーロンコーン大学に置かれた。

A



B

A　南タイのパッターニーに上陸して，イギリス領マラヤに進撃する日本軍

B　日本軍に対する注意の立て札　「県知事ノ家屋ニ付，出入者ハ厳罰ニス　警備隊」と日本語で書かれている。日本軍の略奪に対する抵抗だった。

TH-10

JAPANESE EMBASSY
BANGKOK

As a result of to-day's conversation, we have fully agreed upon regarding the following points:

I. Japan and Thailand shall enter into the offensive and defensive alliance.

2. Thailand shall give to Japan the military co-operation necessary for that purpose (including the permission of passage by the Japanese forces through the Thai territory and giving of all necessary facilities for the said passage as well as immediate execution of measures to avoid every possible conflict which may arise between the Japanese and the Thai forces.)

3. The particulars for the execution of the paragraphs I, and 2, above shall be agreed upon between the competent authorities of the two countries.

4. Japan shall guarantee that the independence, sovereignty and honour of Thailand be respected and she shall co-operate with Thailand in the recovery of the latter's lost territories.

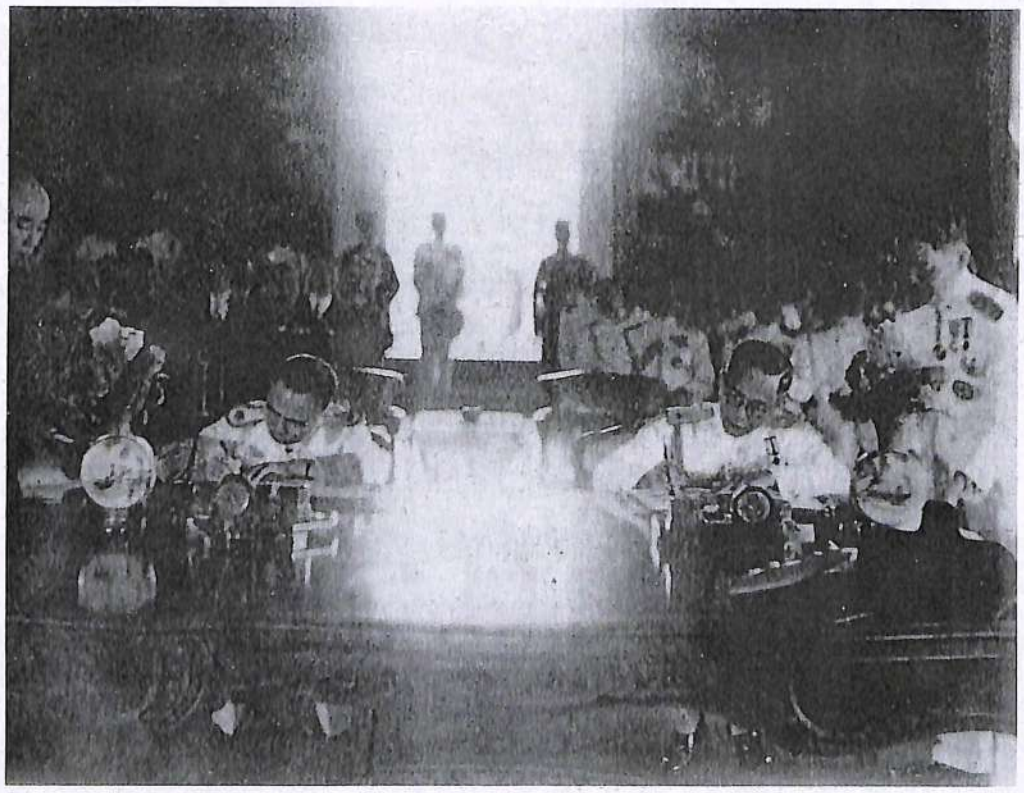
5. The present agreement shall be confirmed at a later date by the formal documents between our two Governments.

DECEMBER 11TH, 2601, T. Tokkan

DECEMBER 11TH, B.E. 2484 P. Pibulsongkram

N. Sakonji
Col. H. Tamura
S. Asada
T. Yoshida,
Nai Pan Panasenda

C

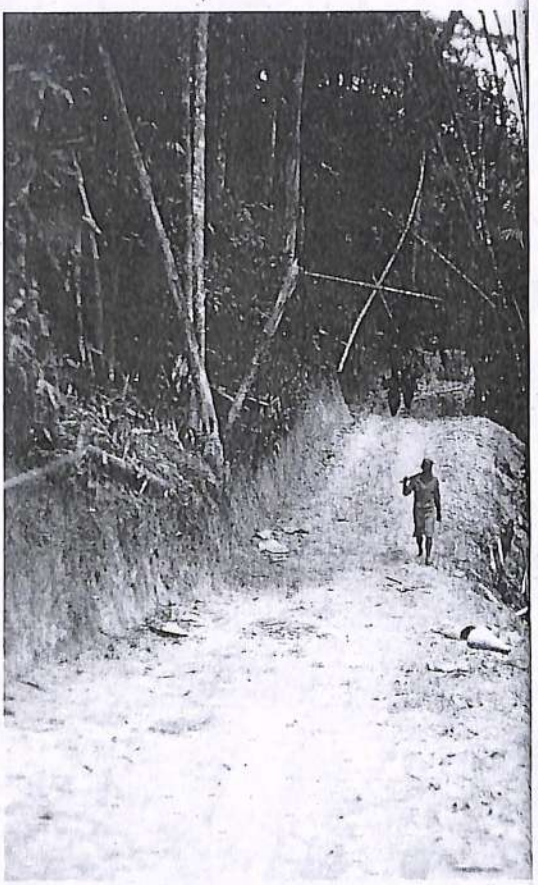


D

C　日タイ同盟仮調印書

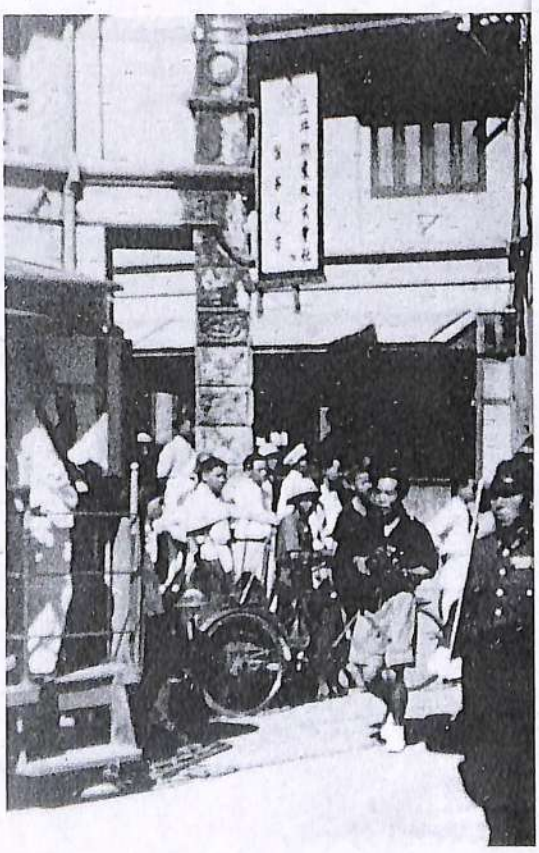
D　日タイ同盟条約に調印　1941年12月21日。

A



C

B



E

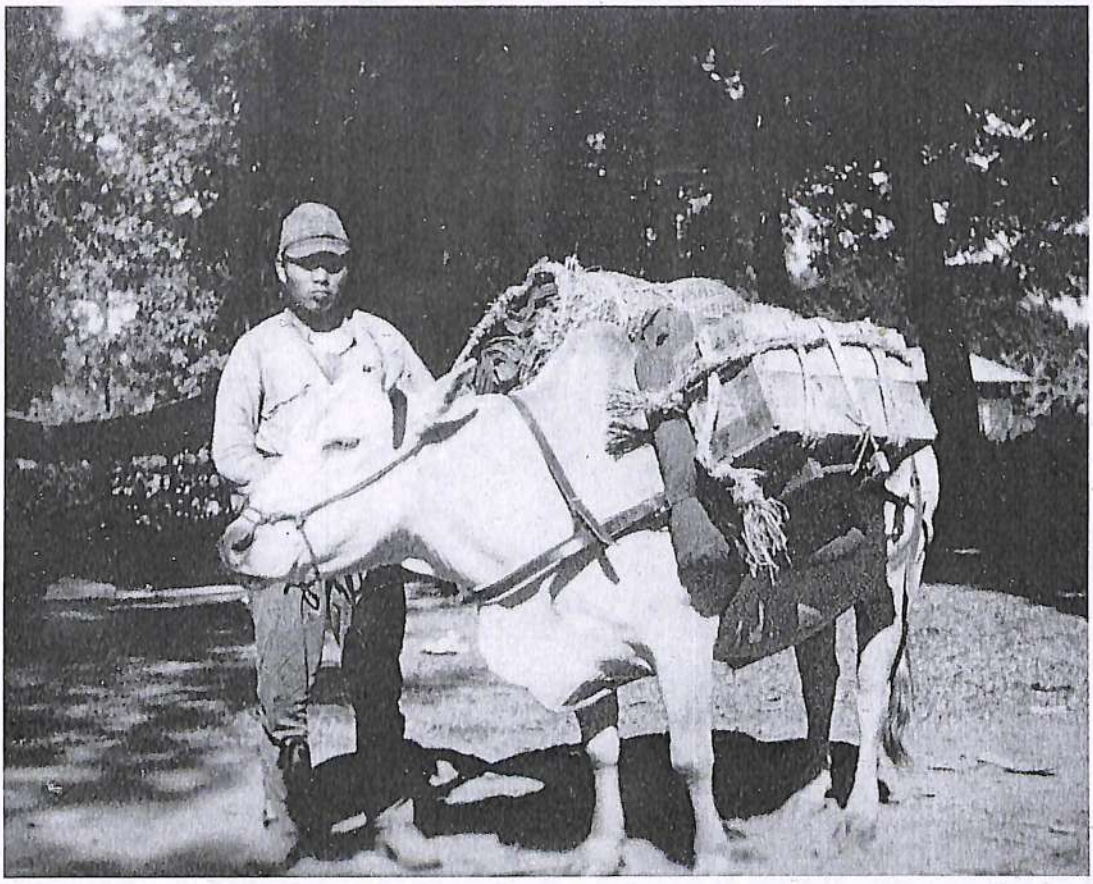
A　ビルマ独立義勇軍の訓練　日本軍は，タイでビルマ人を募集してビルマ独立義勇軍を組織した。ビルマ侵攻の準備の一つだった。

BC　道路建設に協力するタイ当局　日本軍のビルマ侵攻のため，ブルドーザーを用いて道路を急造した。ピサヌロークからメーソット方向の道路。

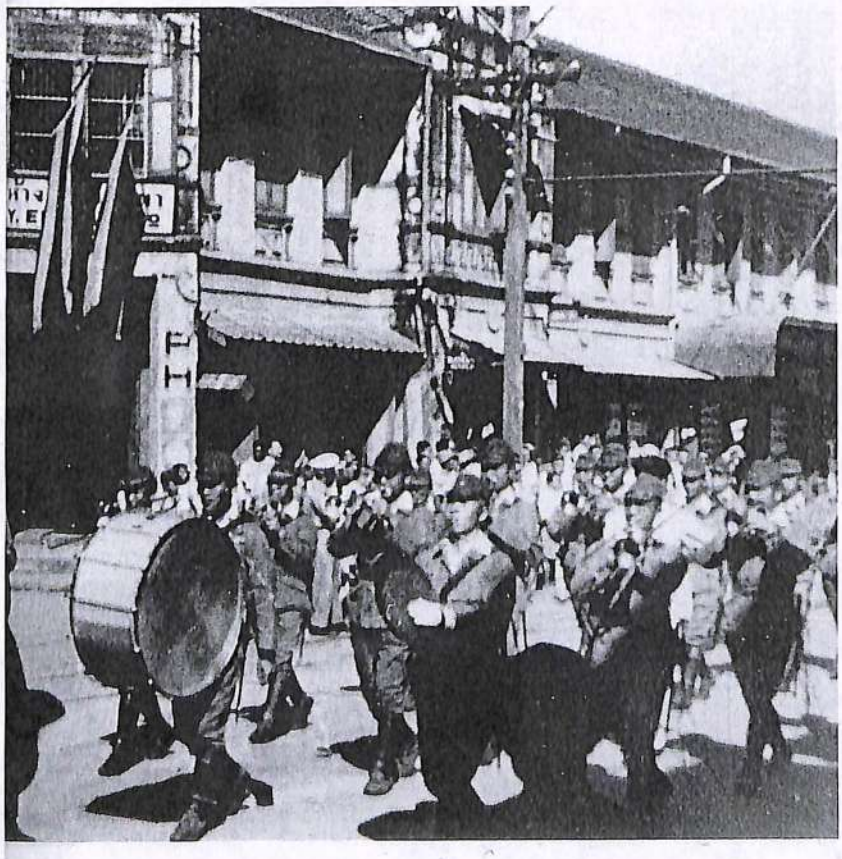
D　牛を用いてビルマに向けて弾薬を運ぶ日本軍

E　バンコクのニューロードを行進する日本軍楽隊　1942年。

F　戦争時のタイの新文化運動　女性は着帽。



D



F

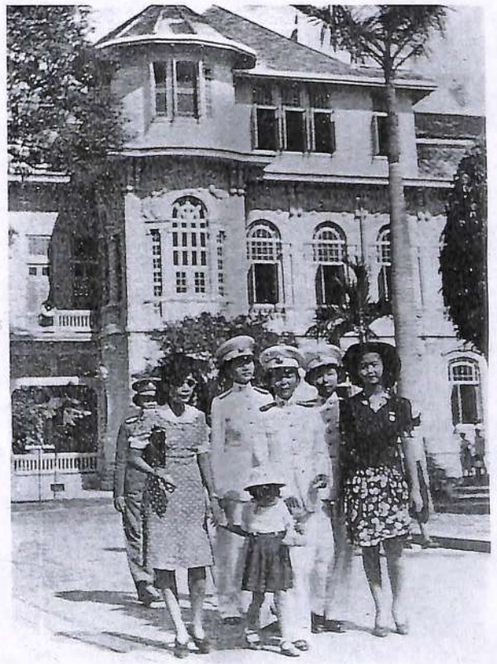
A

C

D

B

E



F

A　ビルマ独立義勇軍の訓練　日本軍は，タイでビルマ人を募集してビルマ独立義勇軍を組織した。ビルマ侵攻の準備の一つだった。

BC　道路建設に協力するタイ当局　日本軍のビルマ侵攻のため，ブルドーザーを用いて道路を急造した。ピサヌロークからメーソット方向の道路。

D　牛を用いてビルマに向けて弾薬を運ぶ日本軍

E　バンコクのニューロードを行進する日本軍楽隊　1942年。

F　戦争時のタイの新文化運動　女性は着帽。

A

B

A　訪日したタイ代表団　日タイ同盟条約締結祝賀使節団として来日した，左からパホン元首相，タムロン，ワニット。1942年4月，明治神宮。

B　訪タイした日本代表団　広田弘毅元首相が団長。1942年7月，ワット・プラケオ寺院。

C

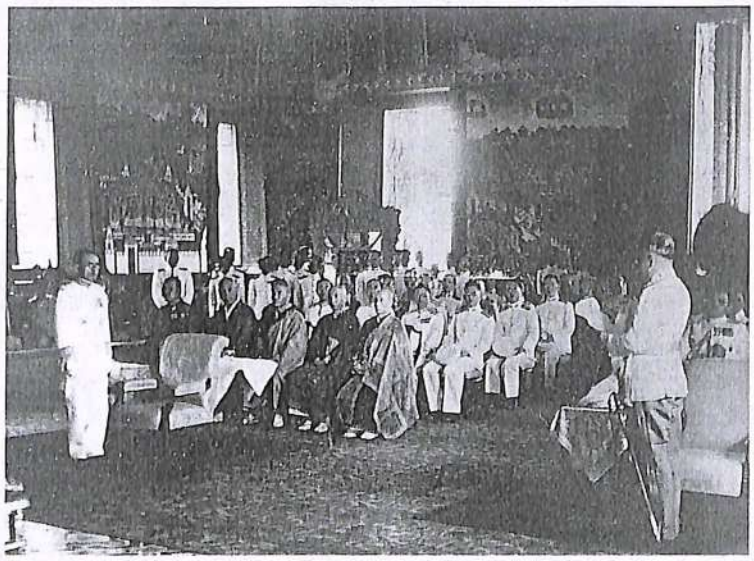
D

E

C　着任後，ピブーン首相と初会見するタイ国駐屯軍司令官・中村明人司令官　1943年2月12日。

D　日本陸軍のタイ駐屯軍司令部の置かれた中華総商会　バンコク・サートン通り。（撮影／村嶋）

E　軍用道路を建設するタイ政府　1943年4月，日本軍に協力して建設する北タイのラムパーン・チェンラーイ間の軍用道路。



A

B

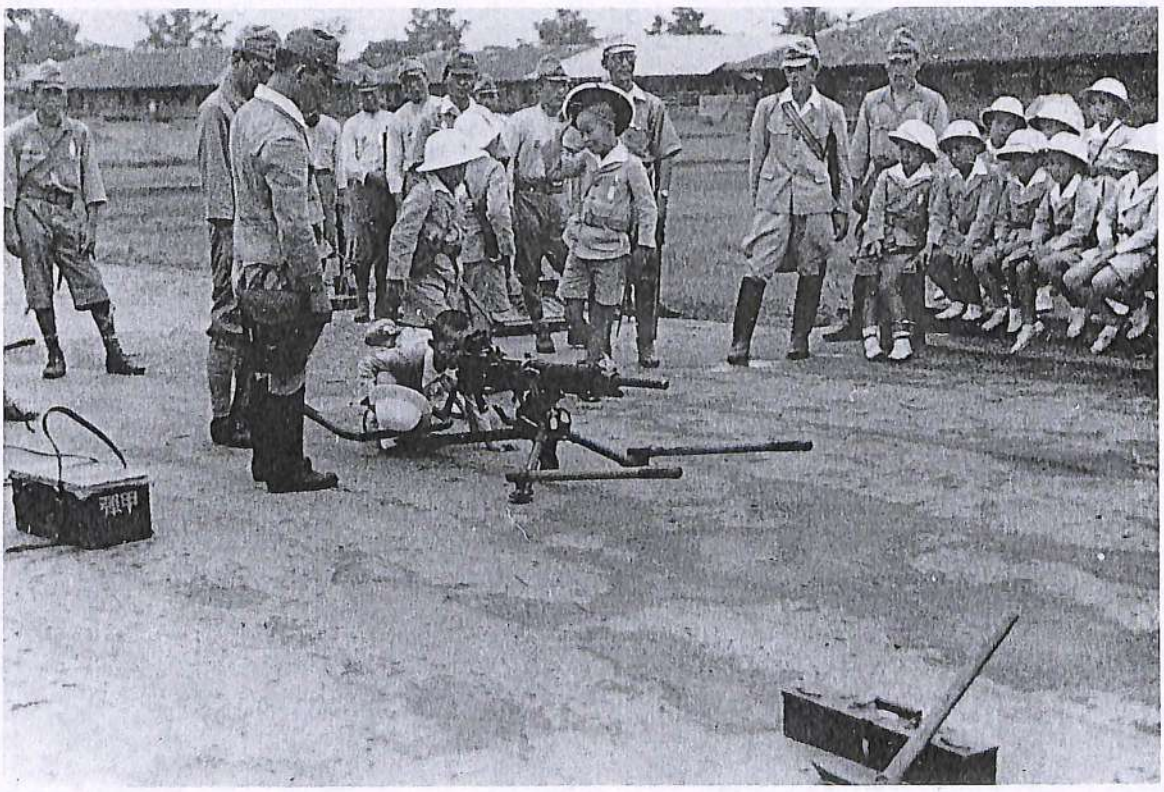
C

A　**タイ政府，日本に仏舎利を寄贈**　1943年6月，ワット・プラケオ寺院で。仏舎利は東京・増上寺に安置されたが，戦後，連合軍により，タイに返還された。

B　**タイの対日協力確保のため訪タイした東条英機首相**　迎えるのはピブーン首相。1943年7月3日。翌日，日本はシャンの2州とマライの4州のタイ領編入を約する。

C　**東条首相訪タイ歓迎宴**　1943年7月4日。

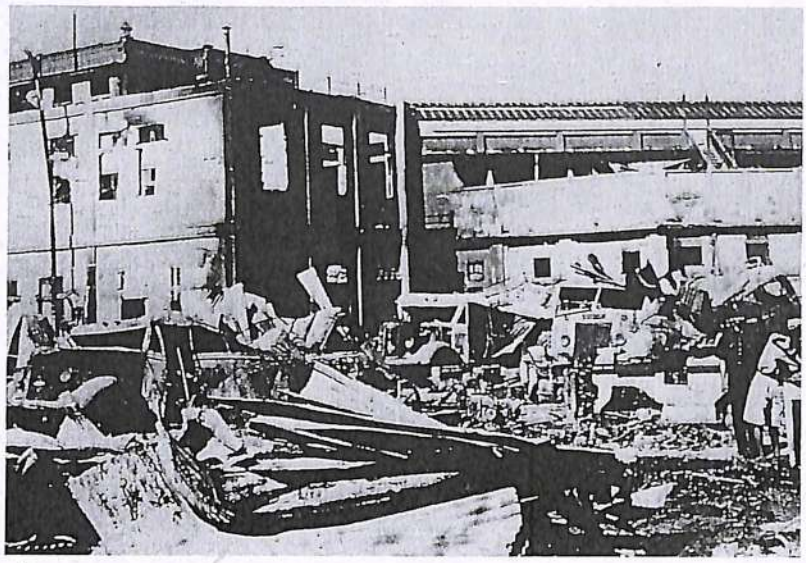
D



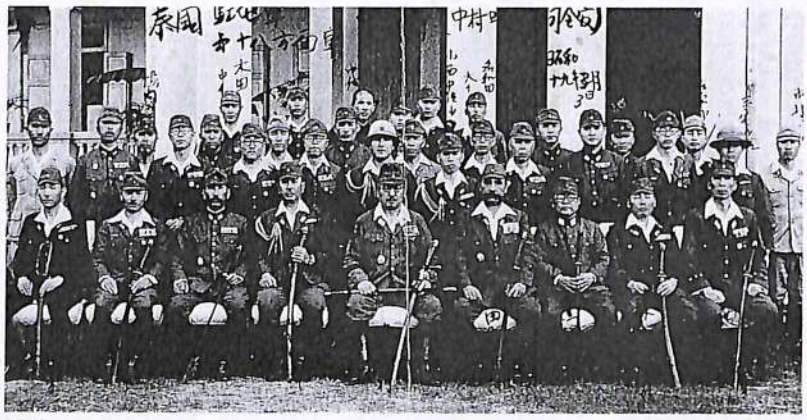
E

D　1943年時の在バンコク日本人の結婚式　大義神社はタイ駐屯軍司令官・中村明人中将によって建てられた。

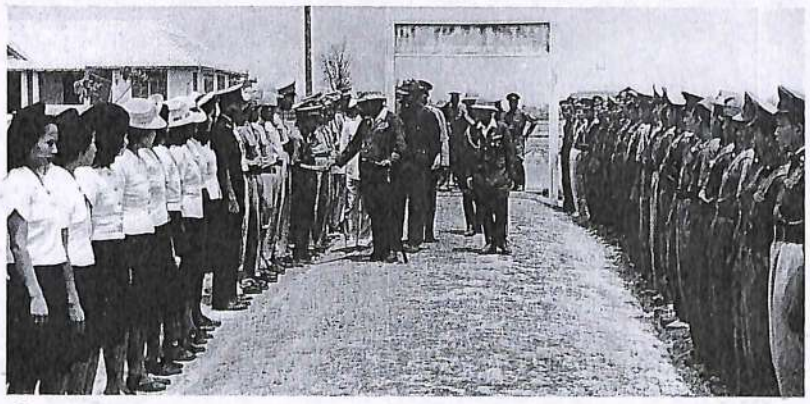
E　日本人児童の一日体験入隊　バンコクのルンピニー公園に駐屯した日本軍のタイ派遣独立混成第29旅団独立歩兵第162大隊〔外池（とのいけ）部隊と称す〕に日本人学校の生徒約100人が参加，行進や銃剣道，機関銃訓練などを行なった。



A

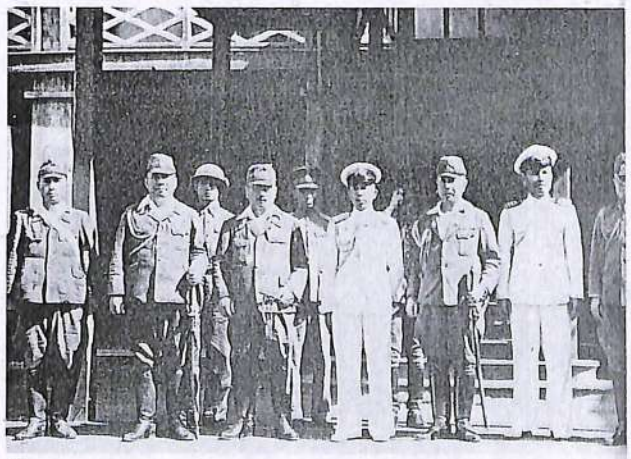


B



C

D



E

A　英米軍のバンコク空襲　1944年1月12日夜の爆撃により破壊されたバンコクの人家。

B　タイ国駐屯軍司令部の陣容　1944年3月3日撮影。

C　東北タイを視察中の中村明人タイ国駐屯軍司令官　1944年3月31日。

D　クアン・アパイウォン内閣成立のお祝いにクアン首相（中央でお辞儀をしている人）を訪問した中村明人司令官　1944年8月8日。

E　ラノーン事件の謝罪にシン国防大臣を訪れた中村明人司令官　1944年8月。前月7月30日に生じた日本軍によるラノーン県の軍警察の強制武装解除と県庁舎占拠事件は日本軍の誤解から生じたものだった。

F

G

H

F　日本駐屯軍幹部とクアン・アパイウォン内閣の閣僚の交歓風景　1945年。

G　盤谷日本国民学校の児童たち　1945年，バンコク。

H　バンコク中央郵便局付近，空襲の跡が見える　1944年。

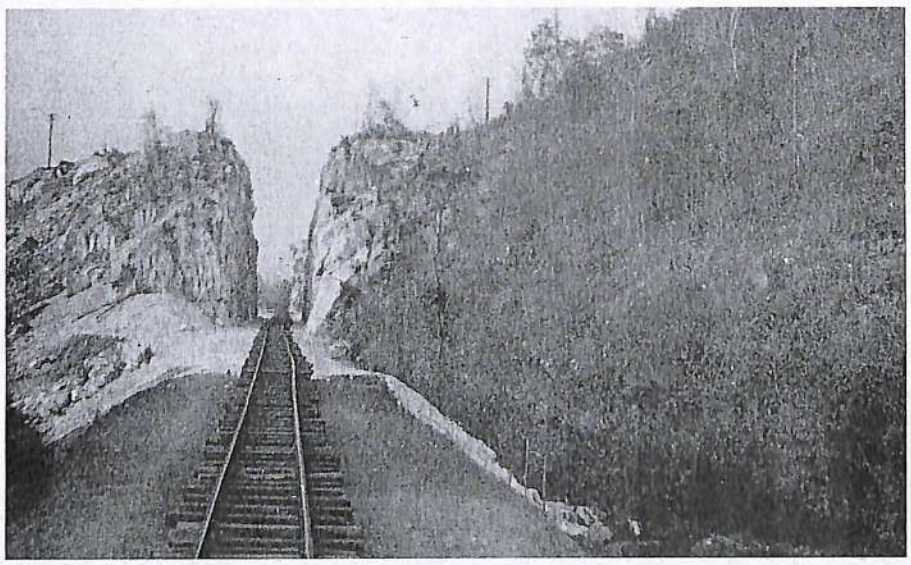
3. 泰緬鉄道の建設

A

B

A　白人捕虜を使役して泰緬鉄道の建設現場
B　泰緬鉄道建設のため伐採する白人捕虜

C



D

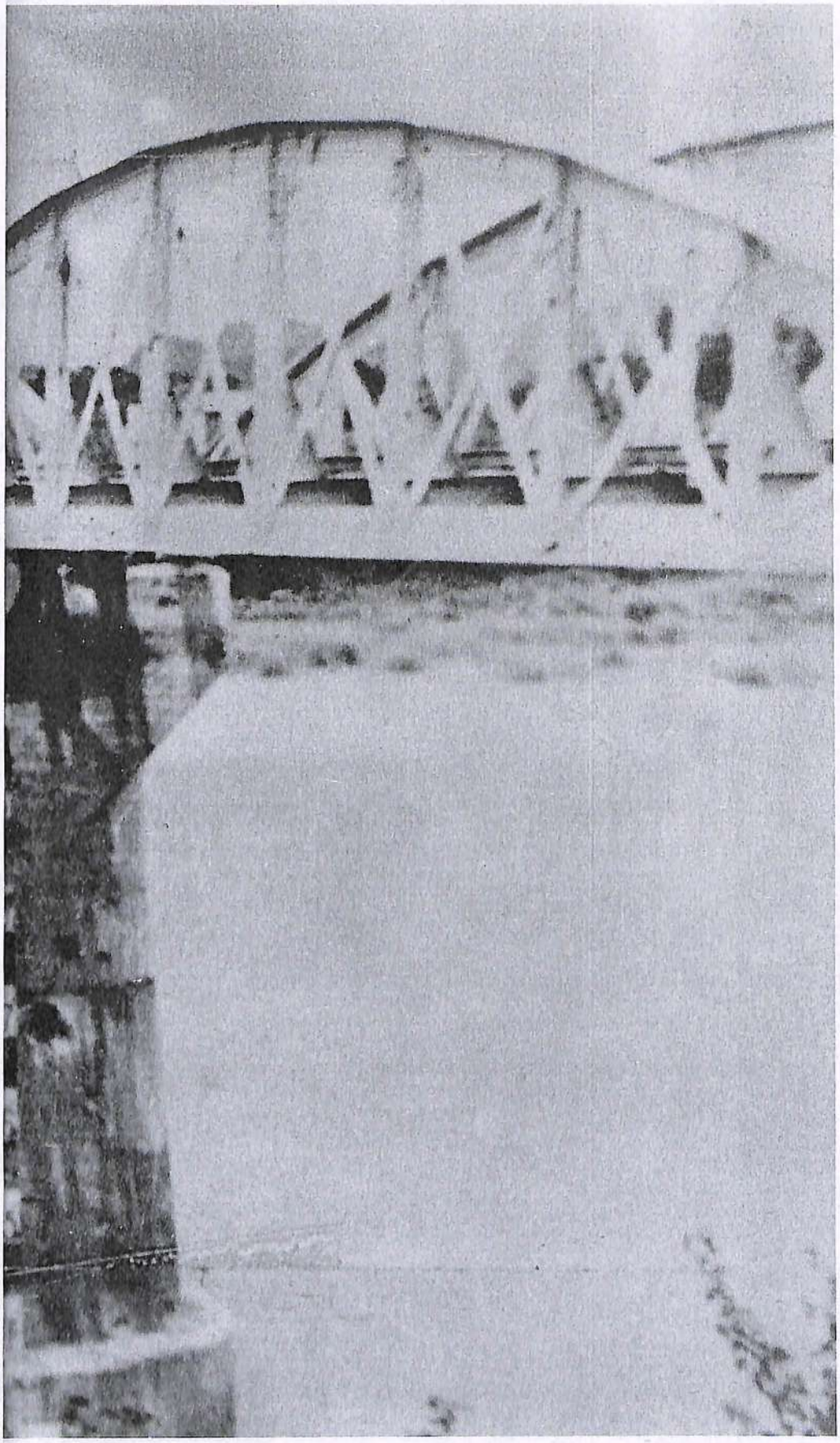
E

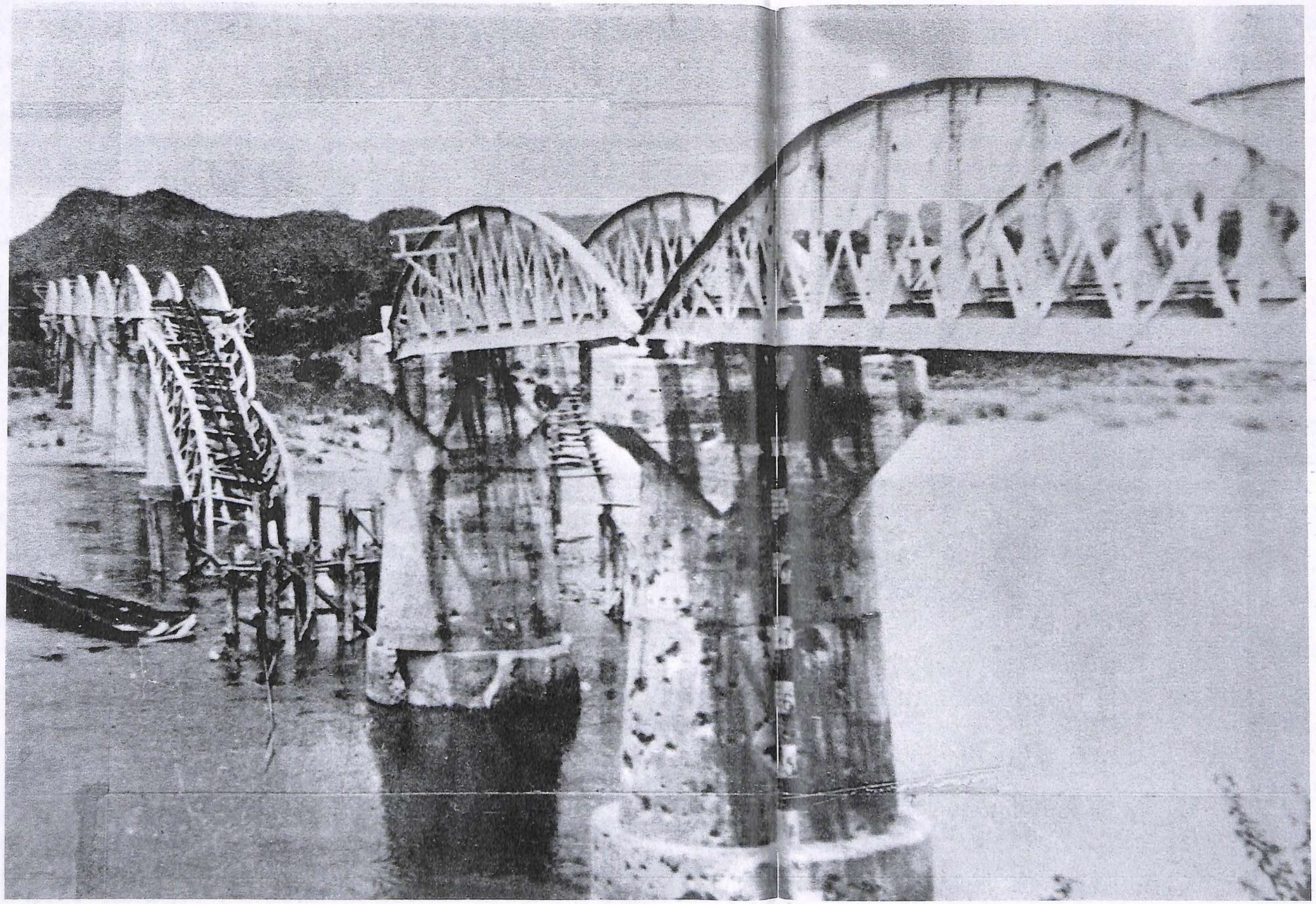
C　泰緬鉄道建設に使用した白人捕虜　ペップリーの捕虜収容所。

D　泰緬鉄道の路線

E　泰緬鉄道建設部隊と現地の少数民族

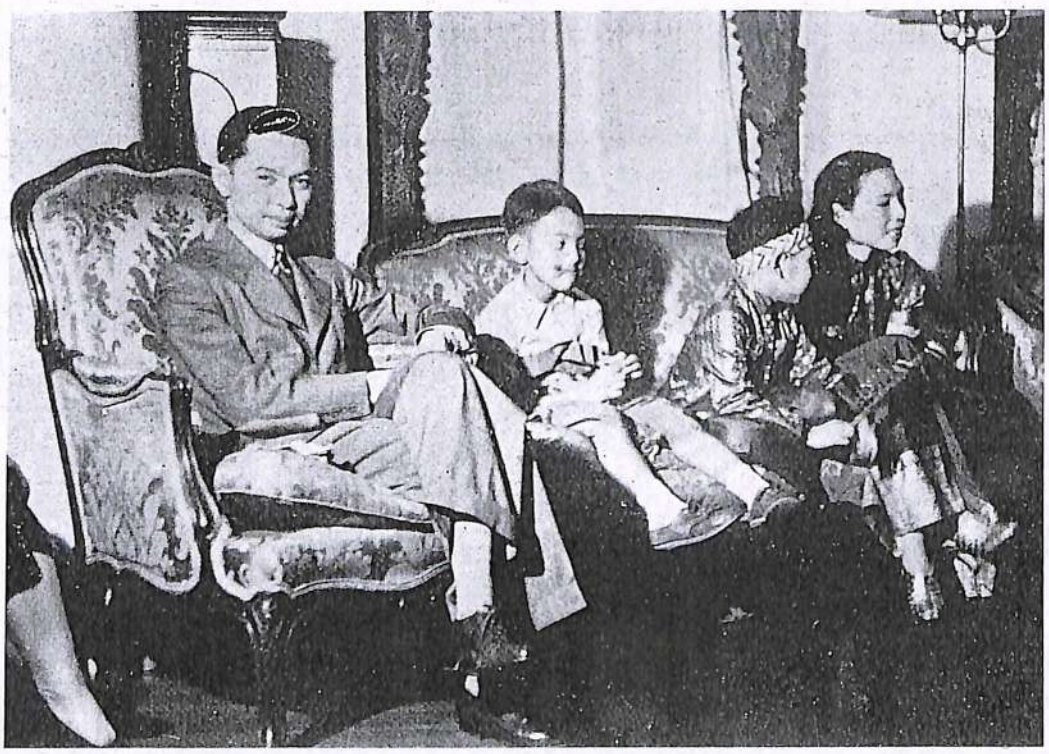
泰緬鉄道のメークローン河の鉄橋　通称クワイ河鉄橋。連合軍の爆破で破壊された。激しい銃撃の後が残っている。後にこの橋は映画『戦場にかける橋』で知られるようになった。1945年10月撮影。



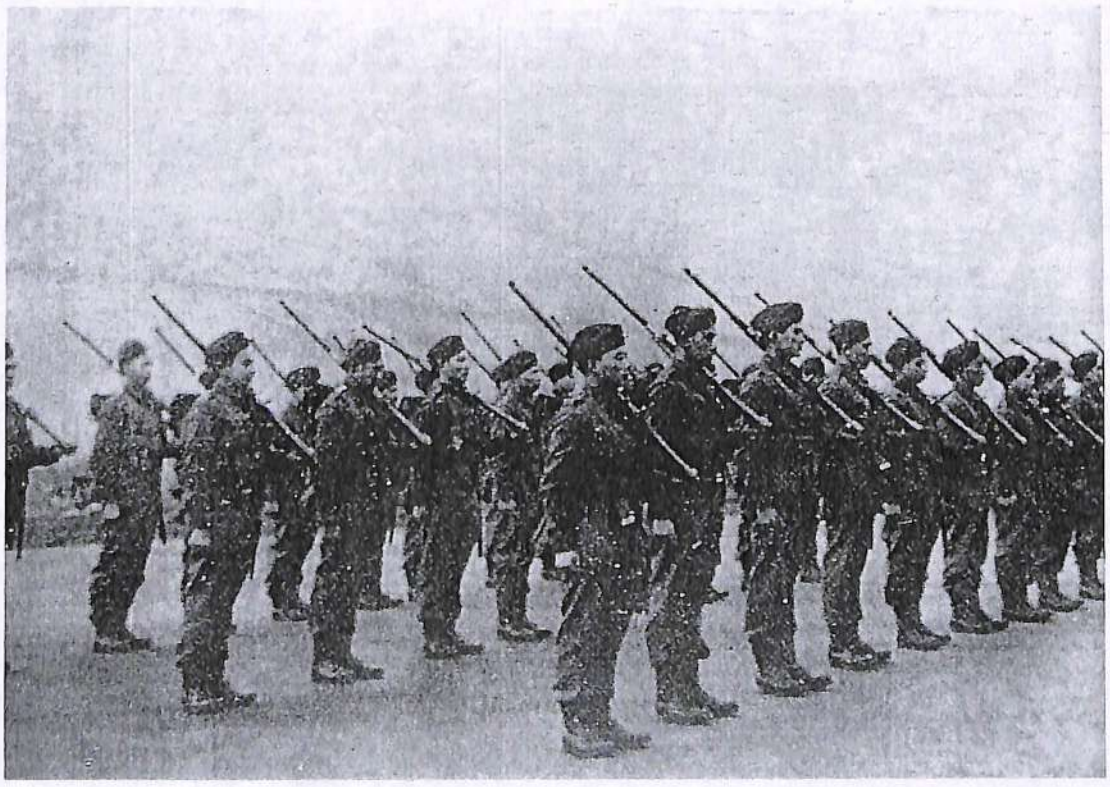


泰緬鉄道のメークローン河の鉄橋　通称クワイ河鉄橋。連合軍の爆破で破壊された。激しい銃撃の後が残っている。後にこの橋は映画『戦場にかける橋』で知られるようになった。1945年10月撮影。

4. 抗日「自由タイ運動」と終戦



A

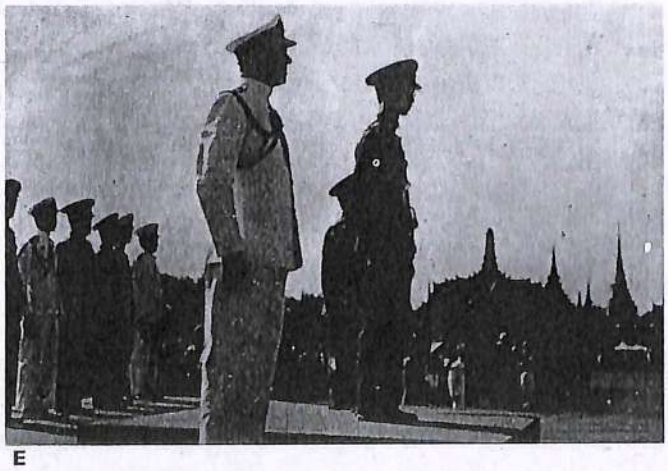


B

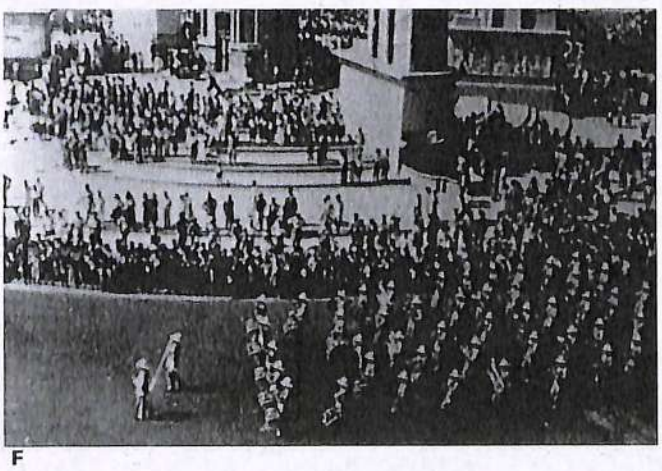
A　アメリカにおける「自由タイ」運動の指導者セーニー・プラモート
B　開戦後，イギリス軍に志願して訓練を受ける「自由タイ」

C

D

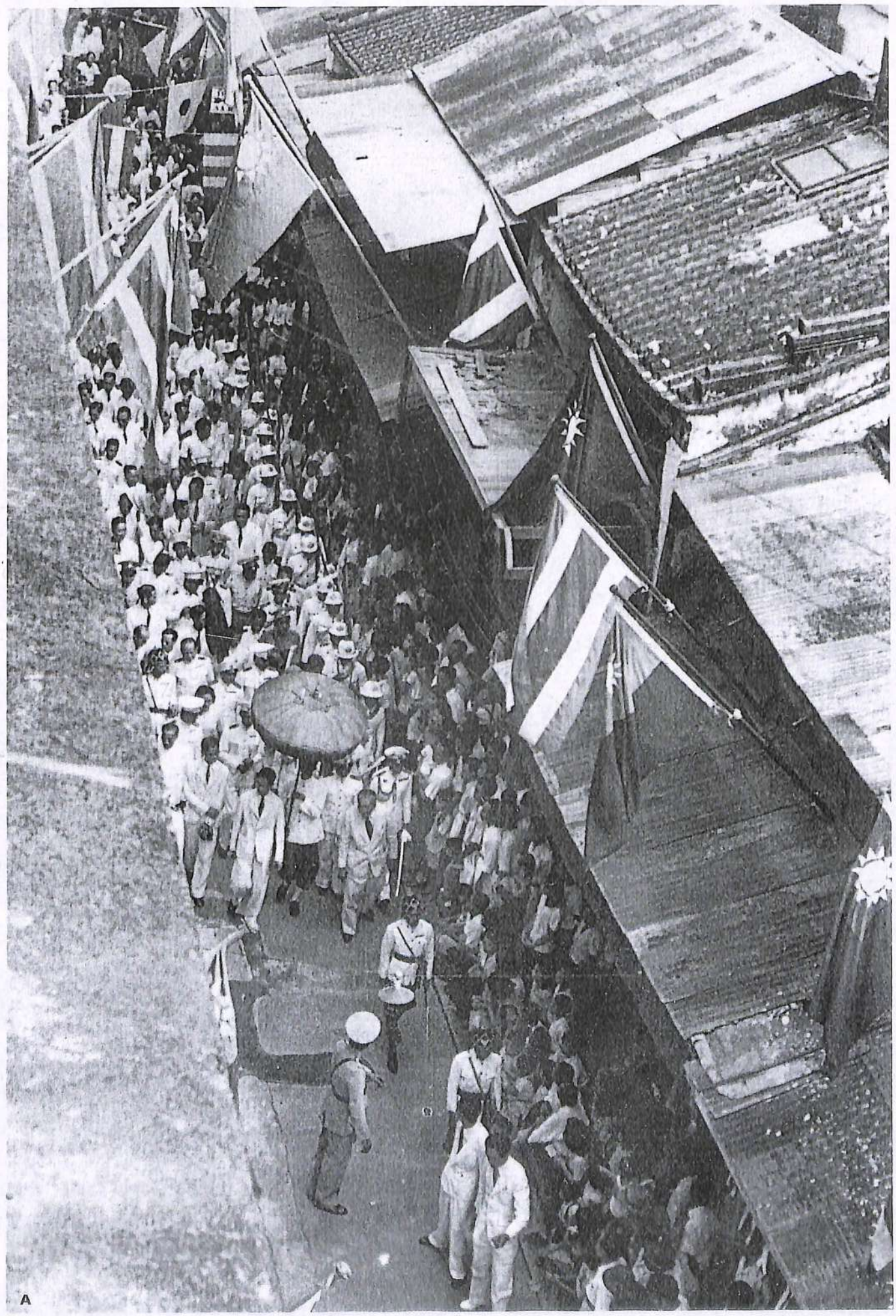


E



F

CD　「自由タイ」のバンコク行進　1945年9月25日。
EF　「自由タイ」軍を閲兵するイギリス軍マウントバッテン司令官とアーナンタマヒドン王　1946年1月19日。



A

B

C

A　8世王，タイ人と華僑の親善友好関係回復のため中華街（サムペン）を訪問　1946年6月3日。

BC　日本の敗戦後，タイ政府が日本の文民を強制収用したバーンブアトーン・キャンプ　クリーク沿いにニッパヤシの家々が連なっていた。立っているのはタイの警備兵（B）。キャンプでは碁，将棋，手芸，演芸，絵画など，さまざまなクラブができた。写真Cは子どもたちのための絵画指導。1946年。

A

B

A　バーンブアトーン・キャンプ　タイの商人からキャンプの食糧を買うタイ人官吏とそれをとり囲む日本人。食糧や必需品はタイ国によって賄われた。1946年。
B　メーホーンソーン県の日本兵戦没慰霊碑
(撮影／村嶋)

第5章
タイの戦後50年

相次ぐ軍事クーデター

戦後のタイ政治は，プリーディーをトップ指導者とする「自由タイ」グループによって牛耳られた。国会が国内法として成立させた戦争犯罪者法によって1945年10月，ピブーン元首相らが逮捕された。成人になったアーナンタマヒドン王は，45年12月にスイスから帰国した。プリーディーは46年３月，国会の圧倒的支持を得て首相に任じられた。

反プリーディー派の議員は，クアンを党首とする民主党を結成し，プリーディー与党派も３つほどの政党を結成した。1933年に人民党が形式上解散して以来，タイは無政党の状態がつづいてきたが，戦後の政治的自由化のなかで多数の政党が結成されたのである。途中，軍事クーデターによる中断はあるが，これ以降今日に至るまで多数の小党分立とその間の連合政権の形成がタイ政治の特徴をなしている。

プリーディー首相在任時の46年６月９日に，アーナンタマヒドン王が王宮内の寝室で額を銃で打ち抜かれて死亡するという怪死事件が発生した。即日，王弟のプーミポン現国王が王位継承者として国会の承認を得た。国王の死亡原因究明を野党は要求して政争は激化した。ピブーン退陣以来，文民政権から冷遇されてきた陸軍は，原因究明を口実として47年11月８日に軍事クーデターを敢行した。ピブーンは国軍司令官に復帰し，クアンが首相に就任した。48年４月には，ピブーンはクアン首相に辞職を強制し，首相にも復帰した。以後57年９月に，陸軍司令官サリット元帥がピブーン政権打倒軍事クーデターに成功するまで，ピブーンは長期政権を維持した。対日協力者であったピブーンの政権復帰を英米が許したのは，アジアへの冷戦の広がりのなかでピブーンの反共姿勢を評価してのことであった。ピブーン政権は50年６月に朝鮮戦争が勃発すると，９月には国連軍に参加して派兵することを声明。アメリカとの間に，同年９月に経済技術協力協定，10月に相互防衛援助協定を締結。1954年の東南アジア集団防衛条約にも参加した。この条約に基づいて組織された東南アジア条約機構（ＳＥＡＴＯ）の本部もバンコクに置かれた。タイは東西冷戦のなかで積極的に西側陣営に参加し，アメリカはその見返りとして多額の経済援助や軍事援助をタイに注いだ。

戦後国内では，中国系の人々を中心に共産主義運動が活発化し，さらに49年10月に共産党による中国統一が実現したことは，タイ指導者に共産主義の脅威を実感させた。彼らは国内の政治活動の自由を制限するとともに，それまで年平均１万人が流入していた華僑移民に門戸を閉ざした。

ピブーンは55年以降，政治や出版活動などへの締めつけを緩和し，55年９月に複数政党の政党活動を認め，労働組合法をタイ史上はじめて施行して，労組活動を認めた。ピブーン自身もセーリーマナンカシラー党を結成し，57年の総選挙に出馬した。ピブーンの動きは，軍事支配から民主化への第一歩と見ることができるが，この総選挙でピブーン派は，内務省などの官庁機構を動員して与党票の獲得に努め，「選挙箱の奇跡」を実現した。しかし，政権党の「汚い選挙」は，バンコク市民や学生の大反発を招き，デモが渦巻いた。ピブーン首相の下で，陸軍トップに上りつめたサリット元帥は，反ピブーンの世論に便乗して，ピブーンと袂を分かち，57年９月にピブーン政権追放のクーデターに成功した。

継続する軍事政権とタイ国共産党

サリット以下の軍部は，決して民主主義者ではなかった。58年10月20日にサリットの軍部は，共産主義の脅威を口実として革命評議会の名により「革命」と称する無血クーデターを実行。憲法を廃止し，政党，労組を解散させ，国民に一切の政治活動を認めない軍事独裁を強行した。サリットは63年末に死亡したが，軍事独裁政権は後継者のタノーム，および

プラパートの両将軍に引き継がれ，68年６月に新憲法が施行されるまでの10年間の長きにわたって継続した。この間，サリットはタイの理想化された伝統的指導者像である「民族という一家族の恩情ある父親」（ポー・バーン）を演じた。また独裁政権は経済成長を重要課題とした。従来の公営企業中心の経済開発方式を民営中心の経済発展方式に転換し，タイ経済の目覚ましい発展の端緒を開いた。

武装化したタイ国共産党は，65年８月７日に東北タイの一寒村で政府側にゲリラ攻撃を開始した。中国共産党から物質的理論的支援を受けたタイ共産党は毛沢東の「農村から都市を包囲する」，「銃口から革命が生まれる」などの基本戦略を愚直に踏襲して，80年代の初めまで武装闘争を継続する。70年代後半には東北，北，南の山岳地帯を中心に共産党の解放区は，相当の規模をもった。

共産化した中国の存在やアメリカに対して戦争をつづけるベトナムの革命運動などの外的脅威，タイ共産党からの内的脅威に直面して，タイ政府は国民意識の統一のために民族アイデンティティを形成することを重要視して民族，国王制，宗教の価値を強調した。国王一家も地方を巡回して国民統合のシンボルとしての役割を担った。

学生の民主化運動と軍事弾圧

68年憲法を公布した後もタノーム，プラパートをトップとする軍部は政権から退かず，71年11月17日には再び「革命」と称するクーデターを敢行し，純然たる軍事独裁に逆戻りした。これに対して学生運動が民主憲法を求めて立ち上がった。学生運動は60年代末からベトナム反戦運動や日本の急激な経済進出と日本製品輸入の増大を批判する反日運動として，じょじょに力を養ってきた。73年10月に憲法を要求する学生・知識人などを軍事政権が逮捕したことから，学生・市民の反政府感情は全国的に高揚した。バンコクでは50～60万人に上るデモが連日開かれた。軍の一部は集会中の学生市民に発砲するという強権弾圧を試みたが，これはかえって学生・市民の反発に油を注ぐ結果となった。結局，国王の調停によりタノーム，プラパート両元帥は国外に退出して軍事政権は崩壊した。これは「10月14日事件」として著名である。　74～75年はタイの近隣のベトナム，ラオス，カンボジアで共産主義勢力が全面的に勝利した。近隣の社会主義革命は，農民の貧困や労働者の窮状に同情的な学生運動にも大きな影響を与えた。社会主義のユートピアへ若者の関心が高まり，彼らのなかにタイ共産党の武力闘争路線が急速に影響力を拡大した。学生，労働者，農民の左傾化した運動に対して，選挙の洗礼を経た文民政権も弾圧的となり，軍部は政権復帰の口実に共産主義の脅威を利用した。そのような状況下で，76年10月６日にタマサート大学でタノーム元首相帰国に抗議して集会中の学生・市民に対して大規模かつ凄惨な弾圧が行なわれた。「10月６日事件」の狂気の弾圧では，警察や治安当局が組織した反共暴力組織が主役を演じた。この事件を契機に軍事政権が復活した。

黄金の時代へ

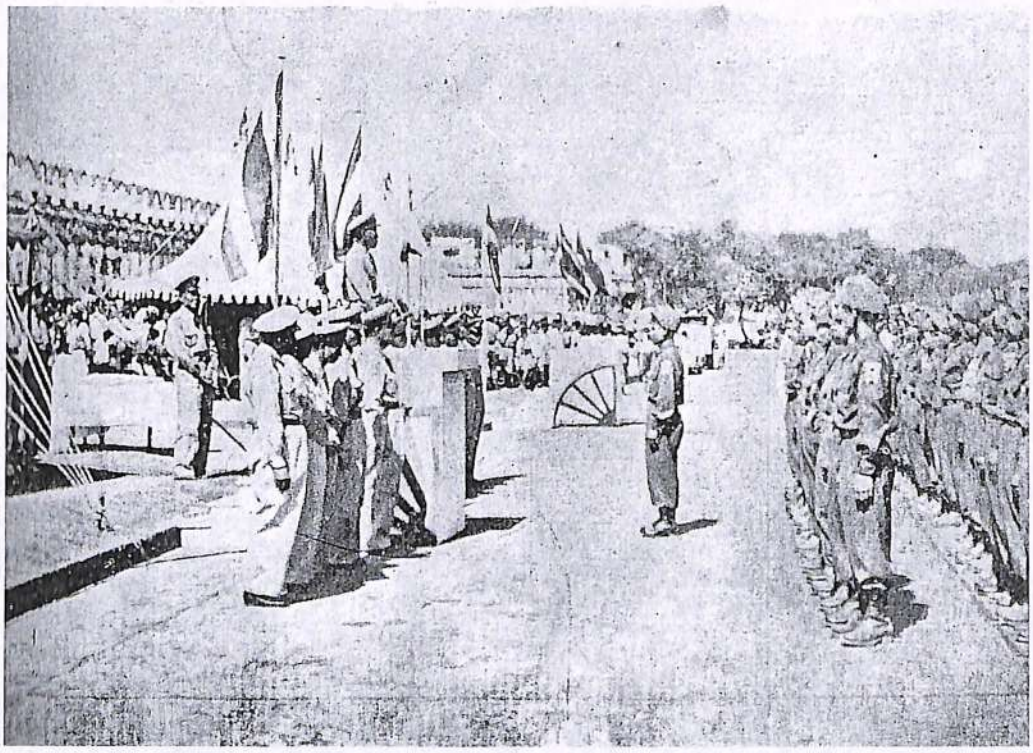
1980年に入ると，軍を背景としながらも政党および国王からも支持を受けたプレーム内閣が発足した。この政権は88年８月まで長期にわたって安定政権を維持した。この間，「政治が軍事をリードする」というスローガンの下に武装闘争をする共産党との和解に努めた。78年末にソ連に支援されたベトナム軍がカンボジアに進攻して中国派のポルポト政権を追放し，そのままカンボジアに駐留すると，ベトナム軍と直接国境で対峙することになったタイでは緊張感が高まった。タイ国のカンボジア国境には，カンボジア難民を収用する巨大な

キャンプがつくられた。中国派のタイ共産党は，タイ政府よりもベトナム軍を主敵と見たため革命運動に混乱が生じた。この時を政府は和解の好機と見たのである。1982年頃までに，ほとんどの共産主義者は投降し，長期にわたった内戦は解決した。

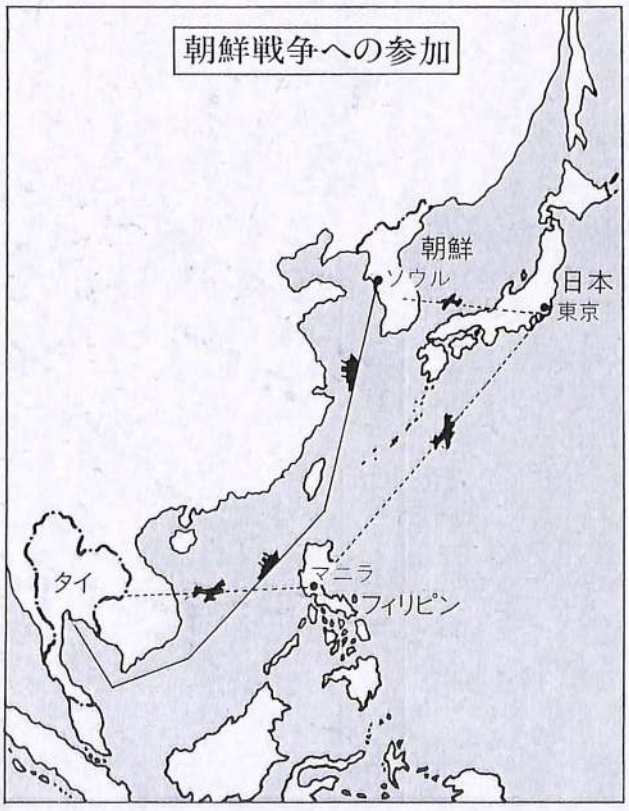
80年代後半以降は，タイにとって正に黄金時代である。プラザ合意以降の急激な円高は，日本企業のタイ投資を増大させ，さらに他の東アジアからの投資も増大して，タイの経済発展に一層の弾みがついた。対外的にも冷戦の終結は共産主義の脅威を消滅させ，インドシナや中国にタイの市場を拡大させた。しかし，軍部は依然として政治介入の伝統を捨てきってはおらず，91年２月にクーデターによって文民政権を追放した。さらに，選挙の洗礼を受けることなく，スチンダー大将が92年５月に首相に就任しようとした時，これに抗議する野党，市民の集会を陸軍は武力弾圧して「血の５月事件」を起こした。これも国王の調停によって解決した。以後，文民政権が継続している。

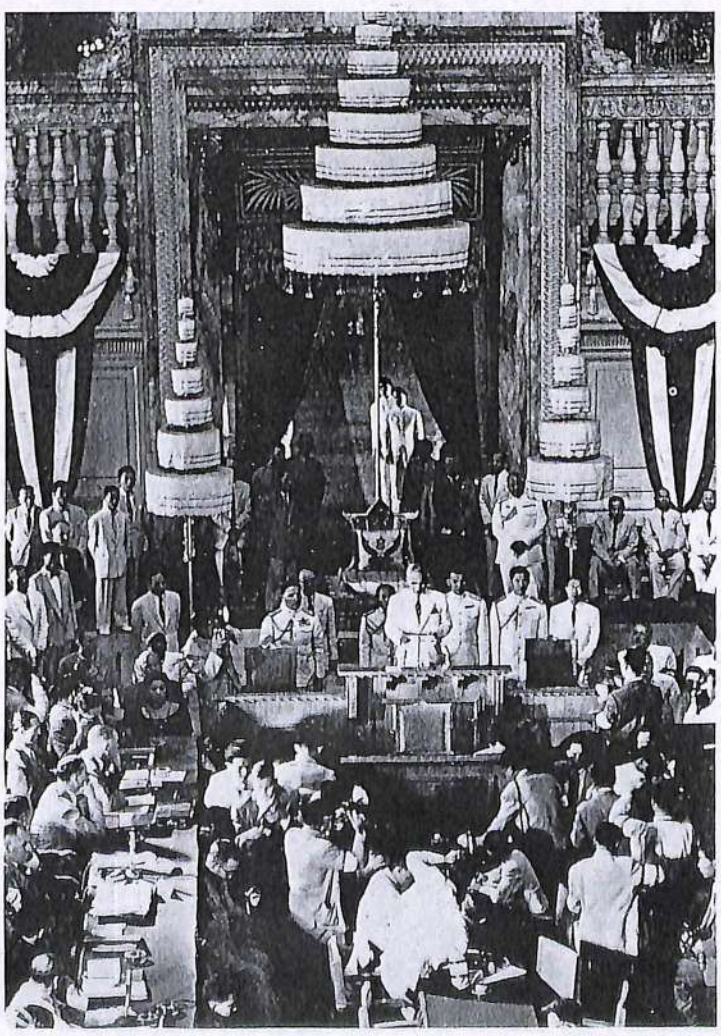
高層ビルが林立する首都バンコク　1996年。
（撮影／村嶋英治）

1．冷戦と対米協力



A



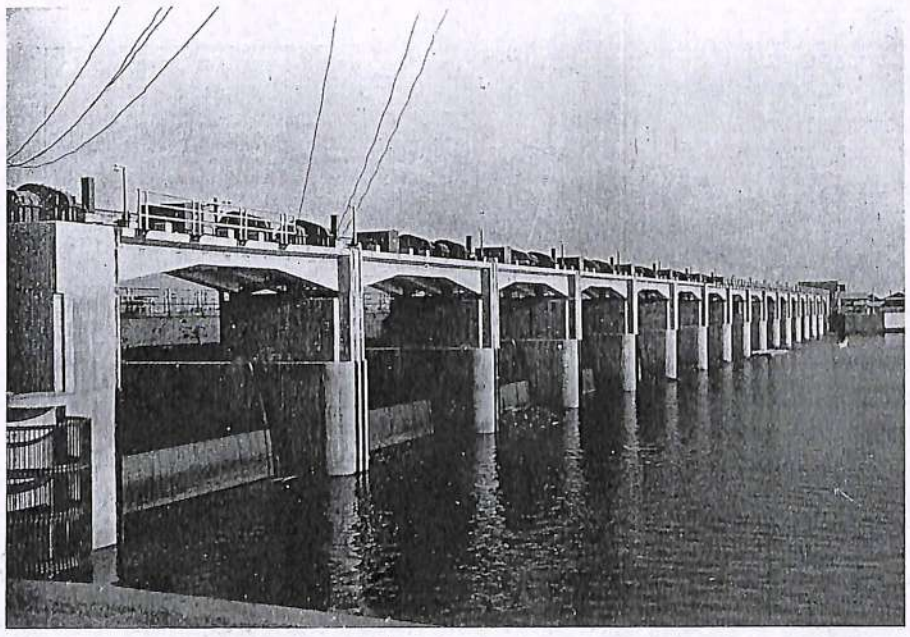


B

A　朝鮮戦争へのタイ軍の派遣

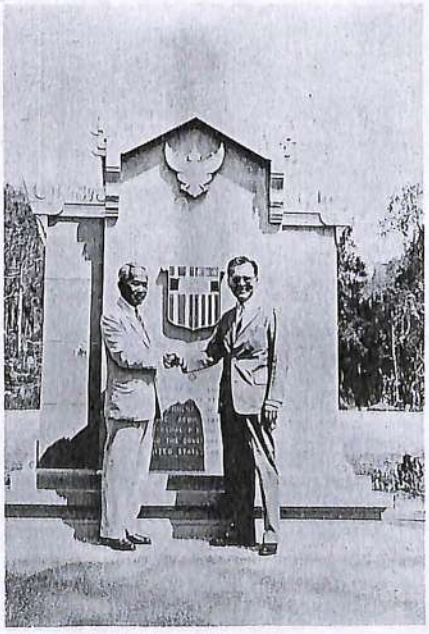
B　ＳＥＡＴＯの加盟国会議　1955年２月23日，バンコクのアナンタサマーコム宮殿で。

C



D

E



C　王宮前広場で演説するハイド・パーク運動の主唱者ピー・ブンナーク　1955年。ピブーン政権末期の民主化運動。

D　チャオプラヤーダム（チャイナート県）竣工　1957年2月7日。

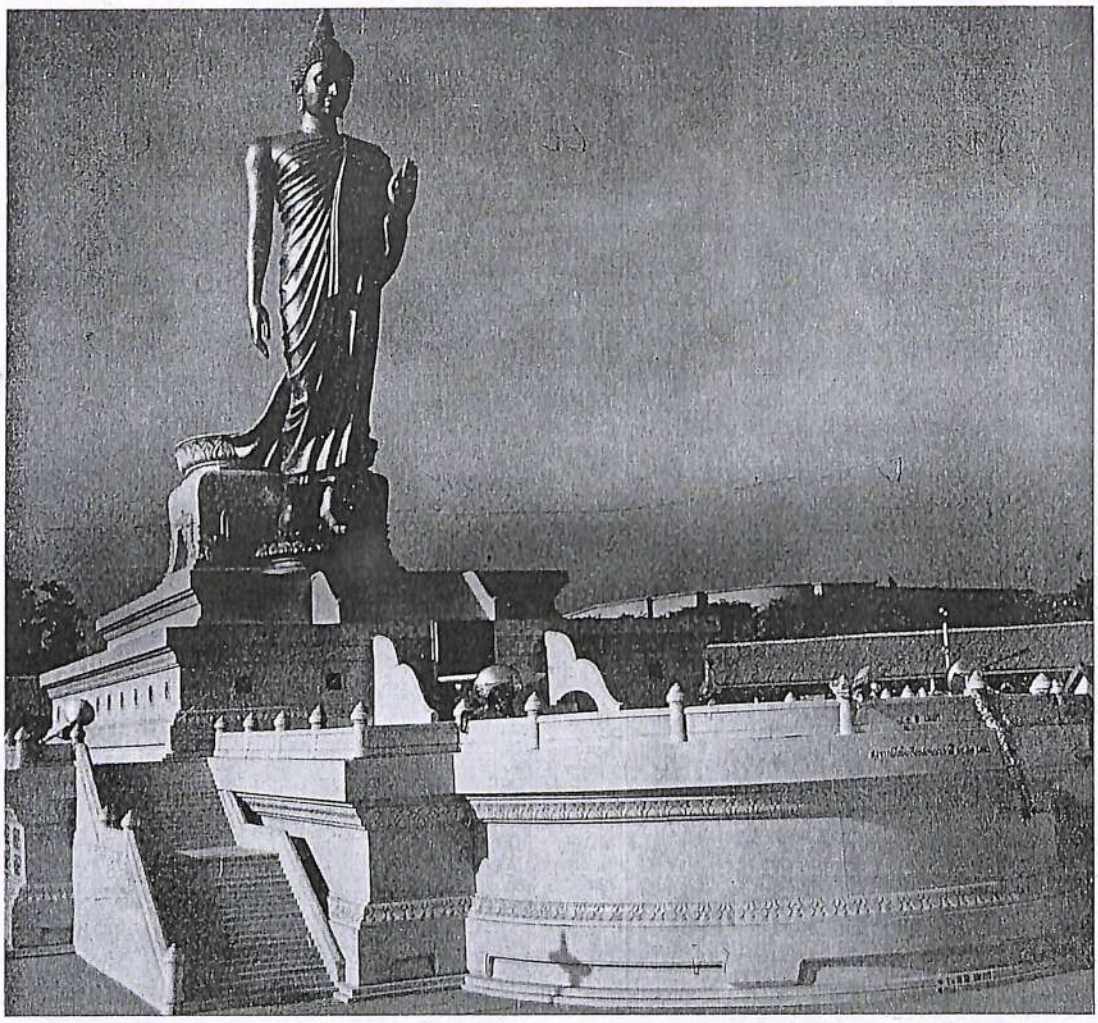
E　フレンドシップ・ハイウエイの開通　1957年2月20日，アメリカの援助によって建設されたサラブリー・ナコンラーチャシマー間が開通した。

A

B

A　ピブーン首相の「汚い選挙」に抗議のため押しかけた学生・市民に理解を示す軍幹部 1957年3月2日，バンコク官庁街のマッカワーン橋で。中央サリット陸軍司令官，左ブンチュー空軍参謀長，右プラパート第一方面軍副司令官。

B　ピブーン首相への抗議に押しかけた学生・市民に演説するサリット陸軍司令官　1957年3月2日。



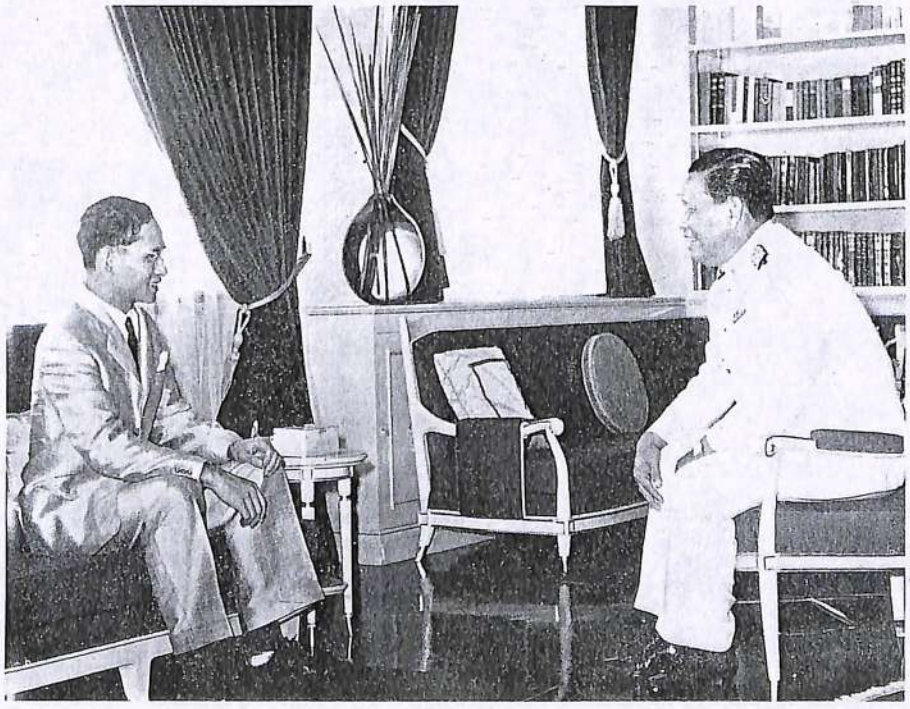
C

D

CD　釈迦入滅2500年国際式典　1957年5月13日。

2. 恩情的軍事独裁者サリット

A



B

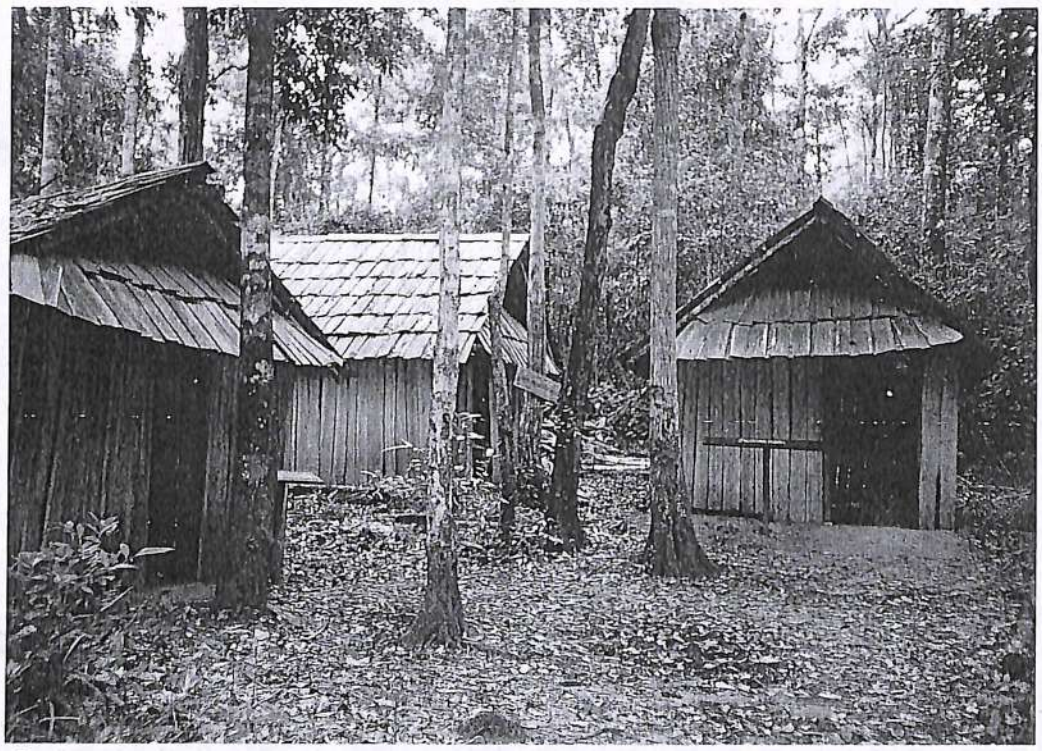
A　バンコクの火事現場を視察するサリット元帥　1960年2月23日。
B　プーポミン国王（左）とサリット元帥

C

D

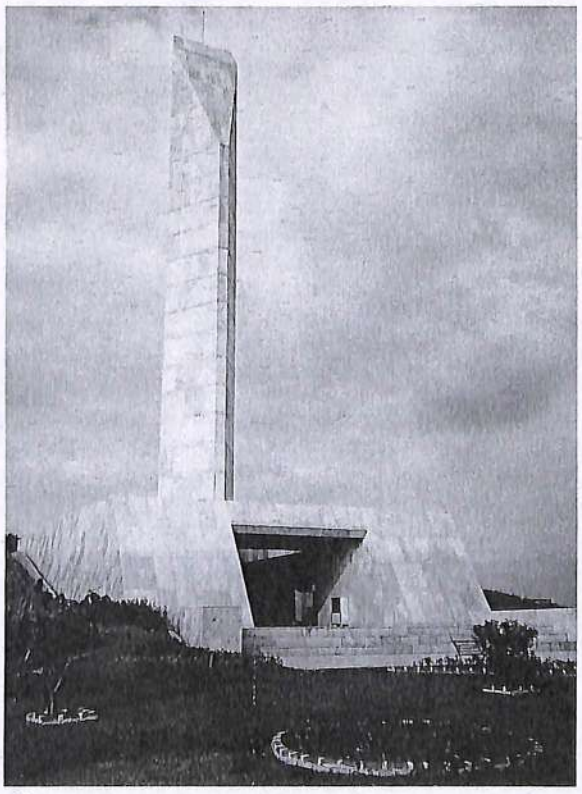
C　ベトナムに派遣したタイ軍を視察にきたタノーム首相　1967年。
D　国王は国民の父であり，国民統合の中心老人に声をかけるプーポミン王。

3．共産主義ゲリラとの内戦



A

B



C

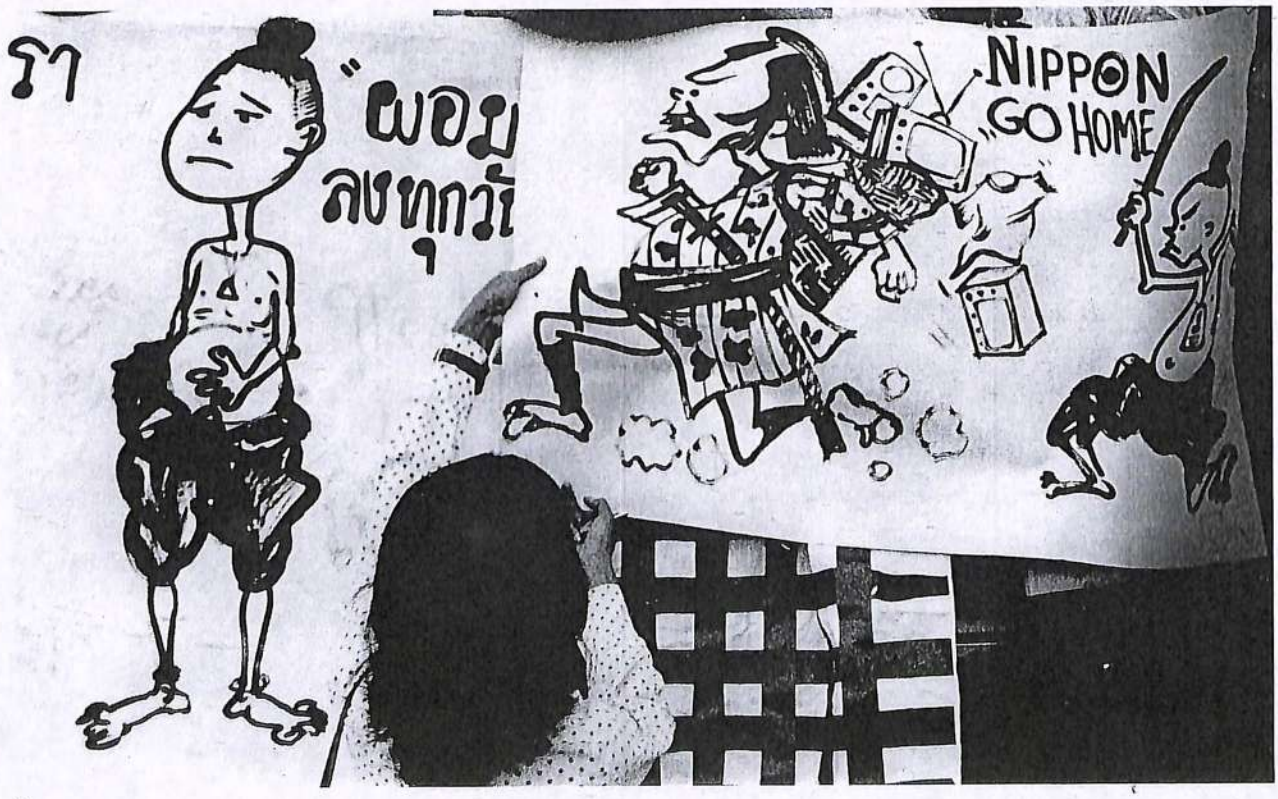
A　元共産ゲリラの住居跡　ピサヌローク県プーヒンロンクラー山頂付近のジャングル内に残っている。1981年までにゲリラは投降した。

B　共産ゲリラ掃討記念碑　北タイ・ナーン県の最北端・トゥンチャーンに建つ。

C　中北部ピサヌローク県の共産ゲリラの拠点カーオ・コー山地制圧の記念碑　1983年竣工。この山地の戦闘による，1968年から82年までの政府側戦死者958 人，病没者195 人の名前が記されている。（A～C撮影／村嶋英治）

4．民主化要求と軍事弾圧

A



B

A　日本の経済進出に抗議する学生の反日貨キャンペーン　1974年1月9日，田中首相の東南アジア5か国訪問に際し，バンコクの宿舎・エラワンホテル近くで，デモ隊の学生たちは張り子の日本製自動車を焼いて抗議した。

B　学生たちが張り出した抗日マンガ　追われる日本製品を背負ったサムライ。

A

朝日新聞

首相訪タイに学生デモの渦

5000人、反日叫ぶ

両首相きょう会談

原油価格すえ置き

OPEC 4月1日に再検討 総会決定

イシラレ 消費国に要求

物資 500カ所

府案

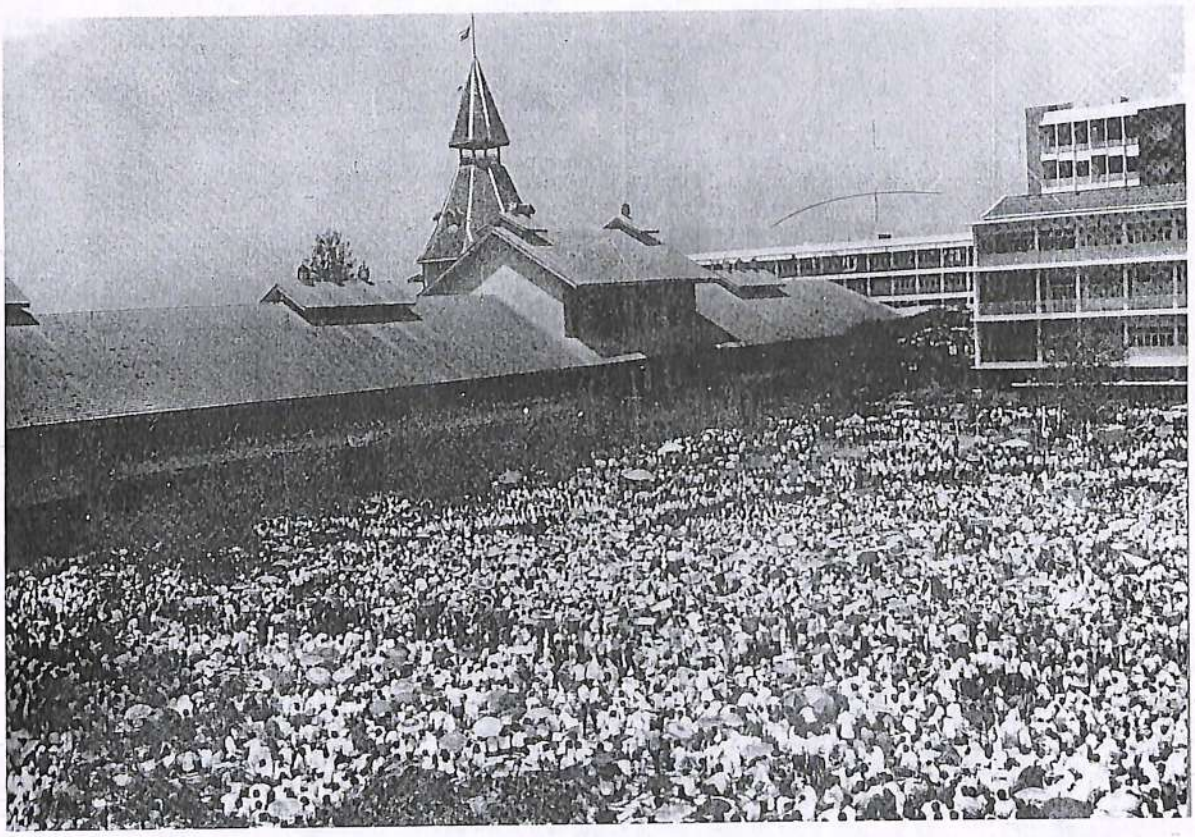
B

C

A　田中首相批判のマンガ・ポスター

B　抗日デモを報じる記事　1974年1月10日，朝日新聞。

C　抗日学生デモ



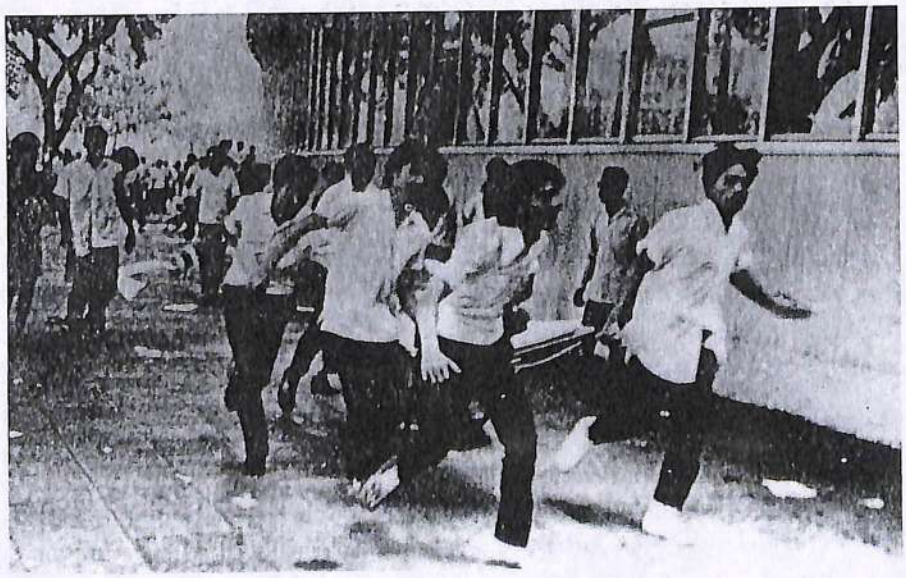
D

E

DE　タノーム軍事政権に対して民主憲法を要求する集会　写真Dはタマサート大学，Eはラーチャダムノーン通り。1973年10月13日。

A

B



C

A～C　軍による市民・学生の集会の武力弾圧

D

E

F

D　国王の調停により軍事政権追放

E　反米のポスター　1974年。

F　左翼楽団が好んで演奏した「稲は雨を待つ，労働者，人と水牛」のレコード・ジャケット

A

B

C

ＡＢＥ　1976年10月６日事件　王宮前広場の虐殺。

ＣＤ　1976年10月６日事件　タマサート大学での集会学生弾圧。（撮影／三留理男）

D

E

A

B

D

C

ＡＢＥ　1976年10月６日事件　王宮前広場の虐殺。
ＣＤ　1976年10月６日事件　タマサート大学での集会学生弾圧。（撮影／三留理男）

E

A

B

C

A～C　ジャングルに逃げ込み，タイ共産党の武力闘争に参加した学生たち　（撮影／三留理男）

D

E

F

D　政党の総選挙演説会　バンコク王宮前広場。

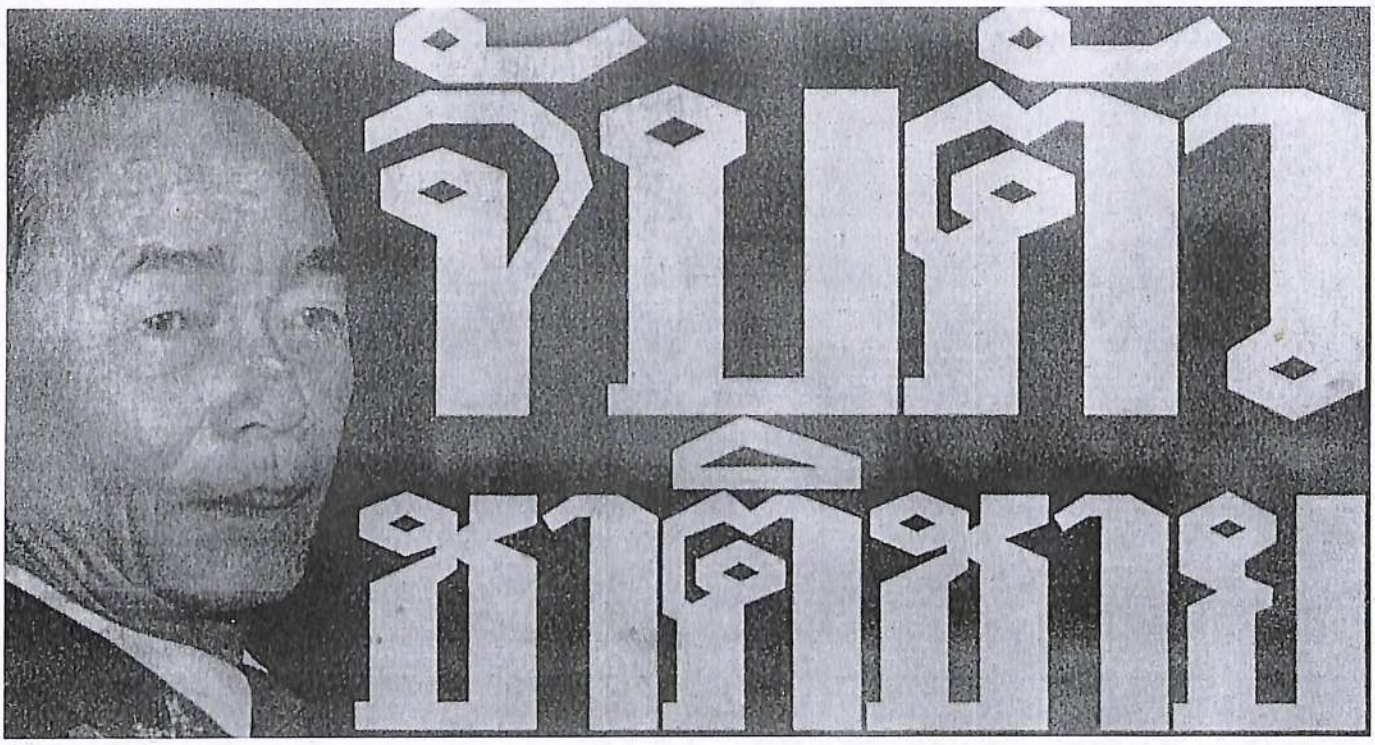
E　地方選挙演説会　コーラート県。

F　選挙の開票風景　ナコンサワン県。（EF撮影／村嶋）

A

B

AB　1985年9月9日クーデター



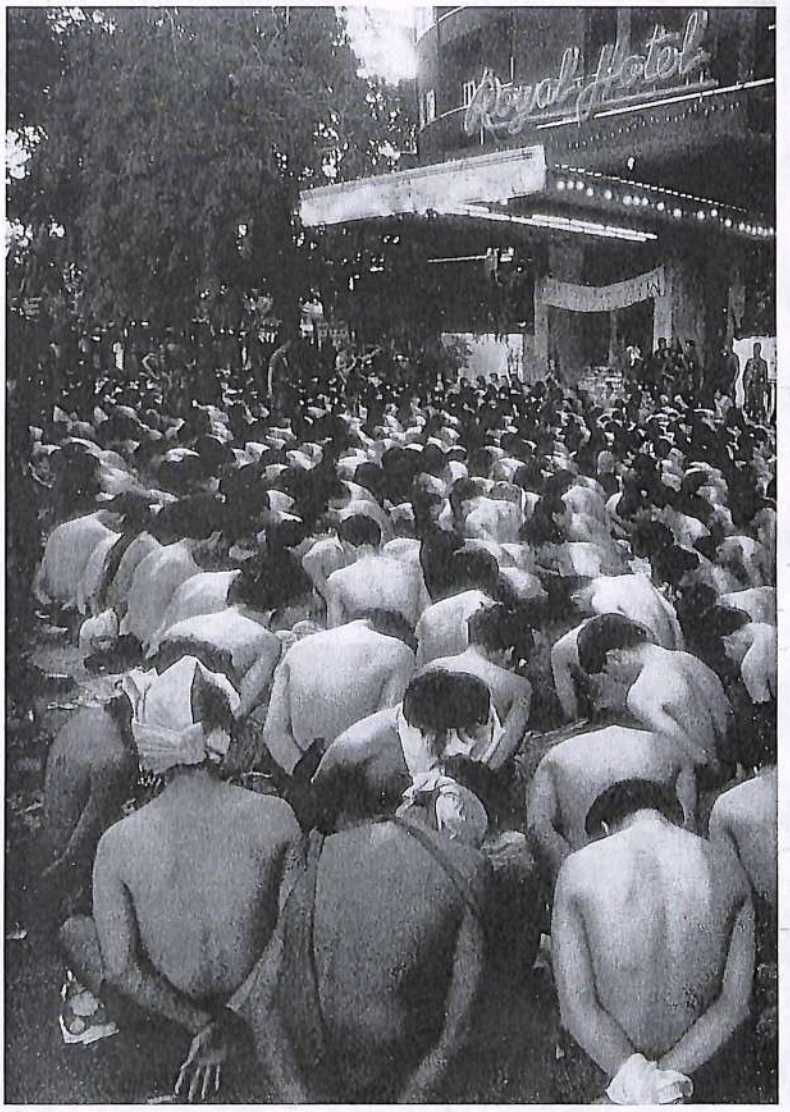
C

D

CD　1991年2月23日クーデター

A

B

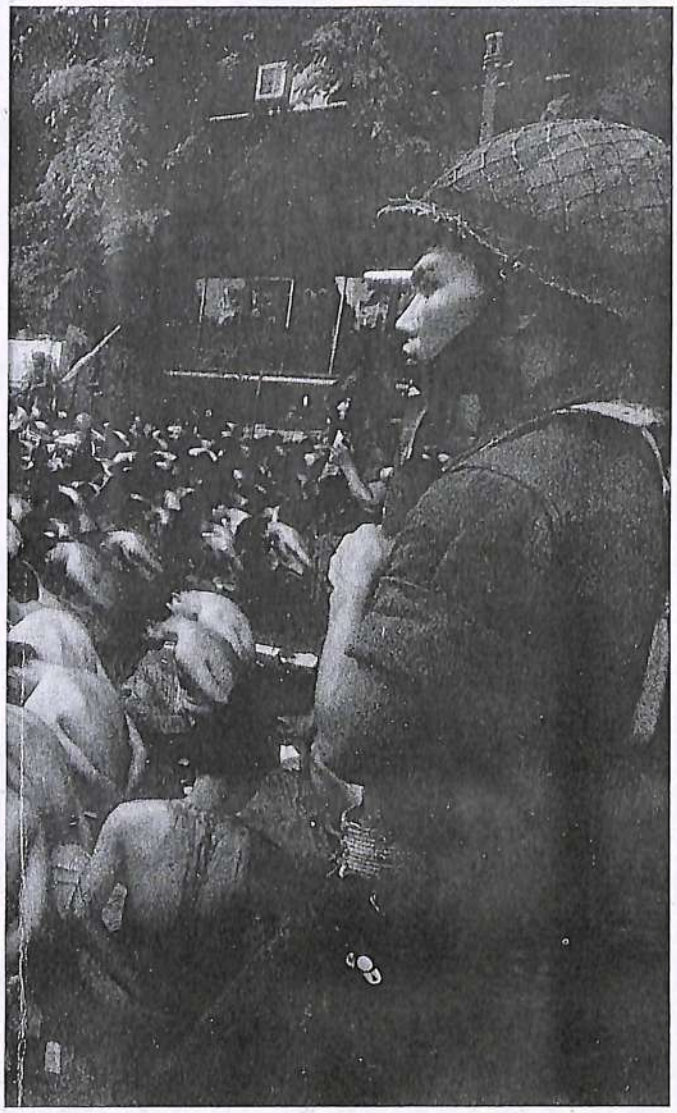


C

D

A～E　「血の５月事件」　1992年５月18～19日。

F　1992年５月20日，国王の調停で終息

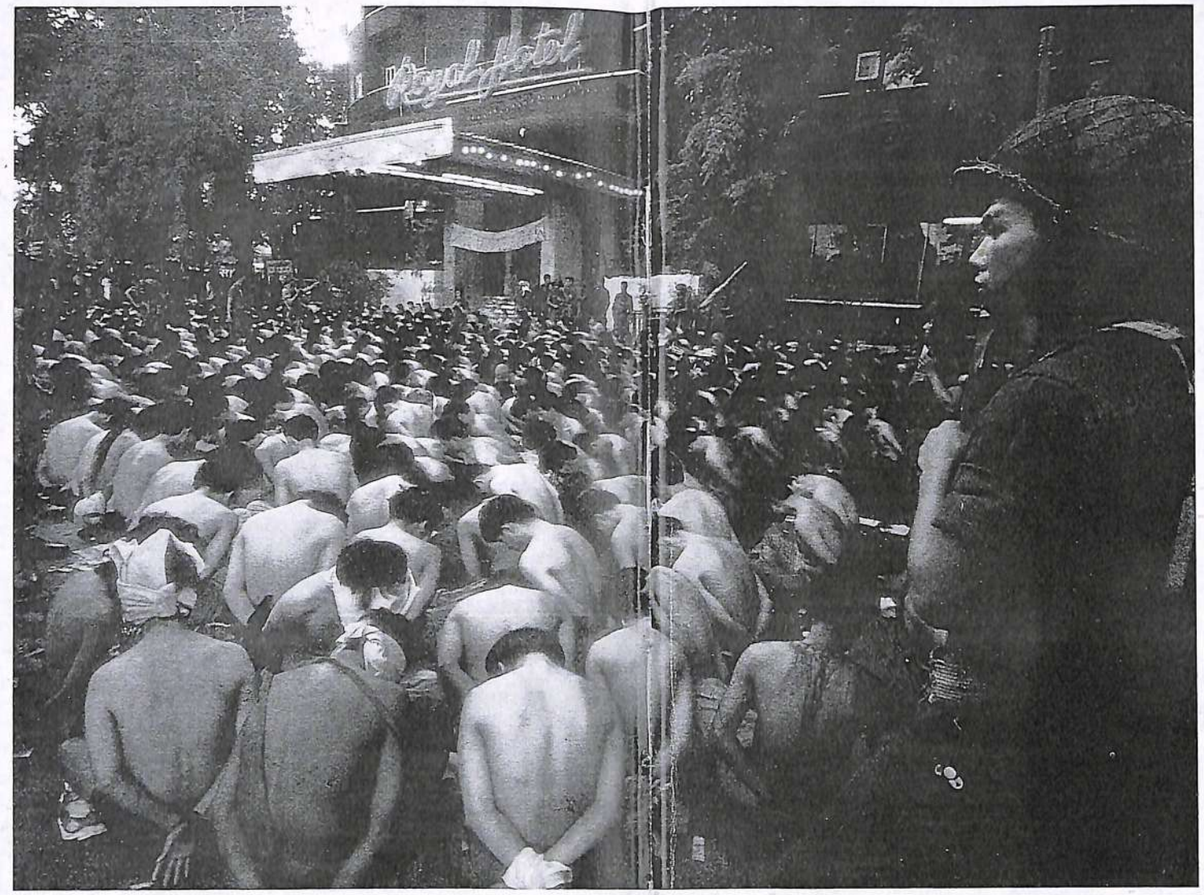


E

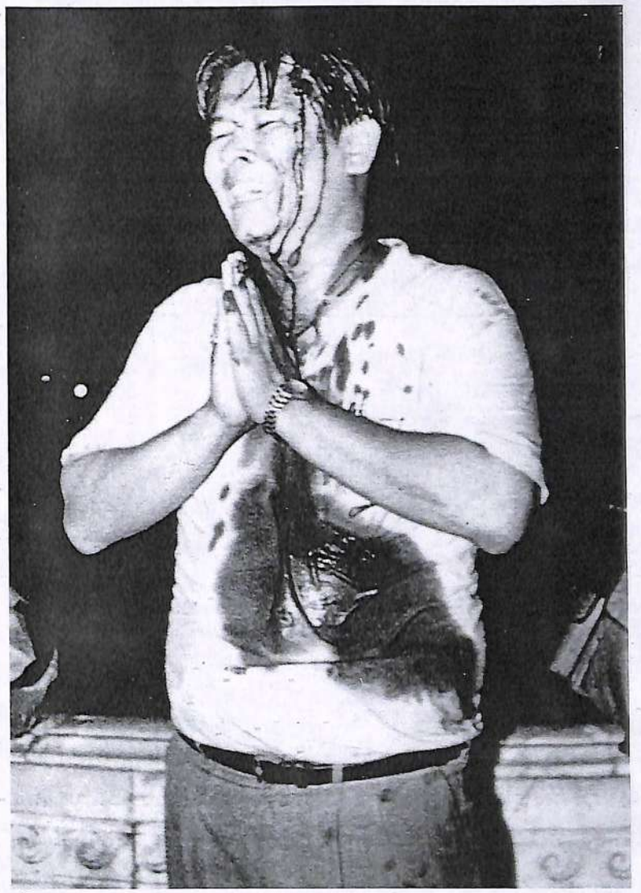
F

A

B



C



E

D

F

A～E 「血の５月事件」 1992年５月18～19日。
F 1992年５月20日，国王の調停で終息

タイ

『写真集，友好の世紀ー日・タイ交流の100年』
朝日新聞社編　朝日新聞社　1987年
『日・タイ交流六〇〇年史』石井米雄・吉川利治　講談社　1987年
『タイの事典』石井米雄・吉川利治編　同朋舎　1993年
『日本占領下タイの抗日運動』市川健二郎　勁草書房　1987年
『タイ現代政治史』加藤和英　弘文堂　1995年
『タイのインド人社会』佐藤宏　アジア経済研究所　1995年
『シャムの日本人写真師』松本逸也　めこん　1992年
「日タイ同盟下の軍費交渉　1941～1944」村嶋英治
東南アジア史学会編『東南アジアー歴史と文化』第21号　1992年
『東南アジア華僑と中国』原不二夫編ー「タイ華僑の政治活動，
5・30運動から日中戦争まで」村嶋英治　アジア経済研究所
1993年
『アジア太平洋研究』ー「日タイ同盟とタイ華僑」村嶋英治（成蹊
大学）第13号　1996年
『ピブーン，独立タイ王国の立憲革命』村嶋英治　岩波書店　1996
年
『泰緬鉄道』吉川利治　同文館　1994年

村嶋英治（むらしま・えいじ）
1951年生まれ　成蹊大学教授
東南アジア史（タイ史）
著書に『ピブーン，独立タイ王国の立憲革命』（岩波書店1996年），『シャム華人の政治』（タイ語，チュラーロンコーン大学アジア研究所刊，1996年），共編著に『ＡＳＥＡＮ諸国の政治体制』（アジア経済研究所，1987年），『ＡＳＥＡＮ諸国の政党政治』（アジア経済研究所，1993年）他

写真記録　東南アジア一歴史・戦争・日本　4
ビルマ（ミャンマー）・タイ

初版　第1刷発行	1997年3月25日
編集委員	古田元夫　鈴木亮　早瀬晋三　倉沢愛子 高嶋伸欣　根本敬　村嶋英治　松本逸也
編著者	根本敬 村嶋英治
発行者	安藤好昭
発行所	株式会社　ほるぷ出版 東京都文京区本郷3-2-6 電話　03-5684-8871（代表） FAX　03-5684-8870
企画・制作	(株) CBエンタープライズ　山浦喜三夫
編集	(有) エディトリアルさぁかす　清水博義
印刷・製本	東亜出版社

© HOLP SHUPPAN, Publishers.1997 Printed in Korea.